南国群狼伝

柴田錬三郎

ケイブンシャ文庫

柴田錬三郎（しばた れんざぶろう）一九一七年三月～一九七八年六月。岡山県生まれ。慶応大学卒業。三八年処女作「十円紙幣」を『三田文学』に発表。五一年「イエスの裔」で第二六回直木賞を受賞。「眠狂四郎無頼控」で時代小説の一人者となる。主な作品に「赤い影法師」「剣は知っていた」「図々しい奴」など。

カバー・福田隆義

南国群狼伝

柴田錬三郎

ケイブンシャ文庫

南国群狼伝

天下泰平の世に豊臣家再興に命を賭ける忍者“影”。そして影を助ける老忍者赤猿佐助。キリスト教弾圧に抵抗して、いっせい蜂起した切支丹一揆に加担し、天下転覆の野望に燃える影の非情の生きざま。風雲急を告げる天草を舞台に、歴史の裏舞台で暗躍する男たちを壮大なスケールで描く長篇伝奇小説の決定版。

柴田錬三郎

勁文社

ケイブンシャ文庫 し 04-01 440

ISBN4-7669-0225-4 C0193 ¥440E 定価440円

ケイブンシャ文庫
好評発売中

大林宣彦
ムービーランドの子守唄

川上宗薫
つまむ

五味康祐
まん姫様捕物控シリーズ〈2〉
小太刀の舞

多岐川恭
牝

安井かずみ
愛の回転扉

南国群狼伝

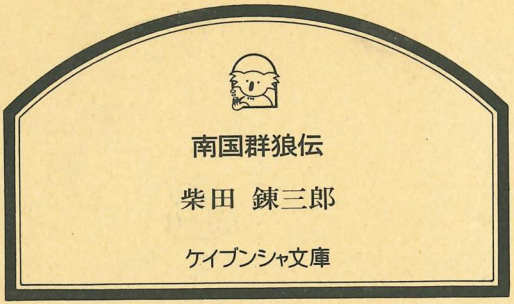
柴田 錬三郎

勁文社

南国群狼伝

柴田錬三郎

ケイブンシャ文庫



南国群狼伝

柴田 錬三郎

ケイブンシャ文庫

勁文社

目次

花ざかりの森……八
南蛮屋敷……二〇
美女浚い……三三
江戸の浪人たち……四六
地獄牢……五九
姫舞い……七二
美少年……八五
闇の目……九七
四君子……一一〇
白円陣……一二三
踏絵……一三五
殉教……一四七
さかさ銀杏……一六〇
紫雲旗……一七二
きりしたん四郎……一八五
呂宋行……一九八
幻の城……二〇九
原城暮色……二二一
落日……二三三

南国群狼伝

花ざかりの森

一

「――ほ！」

およそ、一刻も、鼻を衝くような険しい急坂を、倦まずに、せっせと登って来た赤猿佐助は、突然、岩も樹木もかき消えた明るさに、顔をあげて、パチパチと眩しげに、まばたきした。

山また山の、襞あいを縫う杣径をひろって来て、いつか下界から遠い山霊の棲む嶺ふところに入って、佐助は、全くの無心にかえっていたのである。

突然、涯もなくひろがった草地の一隅に立たされて、佐助は、ぬるい微風になぶられるおのが老いの身を、とまどわせた。

春――まさに闌の、生きもののいのちの息づかいとうごめきが、草地いちめんに満ちていたのである。

若い女の柔肌のような、けがれを知らぬ、いきいきとした生気が、一時に、佐助をおしつつんで来た、といえる。

嘻々として、青草を跳ぶ小さな動物や、中空にはばたく小禽が、ここへ春をはこんで来て、夢の世界をつくったかと、錯覚される。

げんに、佐助の眼前一間ばかりのところに、にひきの兎がならんで、この無断の侵入者の行手をはばむように、長い耳を立てて、赤い目をじっと据えている。

「ははは……」

佐助は、笑ってみせた。

「咎めるでないぞ。むさい面をして居るが、猟人の険しい目つきはして居るまいがな」

そうことわって、のそのそと歩き出すと、兎たちは、くるっと尻を向けるや、すばしこく、走り去った。

……およそ、一里を進むあいだ、佐助は、牙を持たぬ優しい動物たちを、幾十匹となく見かけた。

やがて、濶葉樹の森をくぐると、これはまた、小さな湖をかこんで、いちめん春の花ざかりの一郭であった。

すみれ、あずま菊、あざみ、れんげ草、桜草……。

こいわ桜の群落が、ひときわ、鮮かに浮き立つ彩りであった。

そして、色さまざまの蝶が、その上を、舞うていた。
佐助は、なんとなく、かぶりをふって、湖の畔に出た。
水草が、ぽっかりと大きな白い花を咲かせ、そのかたわらの水面の浮巣に、小鷭のとまっている景色は、まさしく、一幅の絵であった。
佐助は、どっこいしょと、柔かい青苔の上へ胡坐をかいて、しばらく、澄んだ水面へ、放心の眼眸を落していたが、やがて、ふと、ゆるやかに動く水花へ、眉宇をひそめた。
「ふむ！」
にやっとして、合点してから、佐助は、口をひらいた。
「お久しゅうござる」
水花が除けられ、ゆるやかな波紋を描いて、ひとつの貌が、水上へ浮いた。
冷たく冴えた眉目は、若い忍者のものであった。
ゆっくりと、抜き手をきって、岸辺へおよぎつくと、その逞しい裸形をあらわした。
寛永御前試合にあたって、その勝者 悉くに闘いを挑んで、一度も敗れなかったこの若い忍者は、三年の歳月を経て、さらに、その躰を鍛えあげていた。
無駄な肉は一片もなく、痩せぎすにひき緊った筋骨は、弾力のある鋼鉄に、よく鞣した革を張ったように、滑かで、美しく、のびのびと発達していた。
もはや、「若影」と呼ぶには、あまりにも器は完成し、その父服部半蔵と「母影」の血を

合せて雕し琢した「影」そのものであった。
もとより、雕し琢されはしたが、いまだ、樸に反る人格を所有するには、ほど遠いであろうが……。
総髪を椿でたばね、黒の小袖をまとって、大刀を一本だけ腰に帯びた「影」は、そのまま、岸辺をふりかえりもせず、歩き出していた。
佐助は、三年前と変らぬ不愛想さを気にもとめずに、うしろにしたがった。

二

その庵は、森の中に、ひっそりと建っていた。
小猿を頸にすがりつかせた巨きな牝猿が、跫音をききつけて、樹上から飛び降りると、主人のために、板戸を開けた。
炉辺に坐った「影」の口から、吐かれたのは、
「天下は泰平か――？」
その言葉であった。
「まずまず……」
佐助は、にこにこと、頷いてみせた。
「おかげで、このわたしだけは、忙しい思いをつかまつり申した」

主人真田左衛門佐幸村が、黒部の秘境で、睡るように逝ったのは、去年の春であった。
その遺言によって、この一年間、佐助は、豊家の遺臣たちを歴訪して、それぞれの生活が成立つようにする仕事をつづけて来たのであった。
この若い忍者の好意によって、京の都の西郊の丘陵から掘り出された平家財宝が、そっくり、その扶持にあてられたのである。
佐助は、その仕事が、ようやくおわったことを報告に、やって来たのである。
佐助は、一人語りにも似た時刻を移してから、ふと、思い出したように、
「ところで、お前様は、近頃、しばしば、江戸へお出かけになさることがおありかな？」
と、何気ない調子で、問うた。
「ある。月に二三度は――」
この奥秩父から江戸まで、三十里の距離も、「影」の足をもってすれば、往復するのに一昼夜を要するのみであった。
「ふうん――」
佐助は、皺面を、つるりとひと撫でしてから、独語するように、
「悪戯が、チトすぎるのではござるまいかな」
と、言った。
「……」

「影」は、じっと、佐助を瞶めかえしていたが、ふっと、薄ら笑った。
「どうして、おぬしの耳に入った？」
「夢男の噂は、半年ばかり前から、きいて居ったが、よもや、お前様の仕業とは、気づかなんだ。ところが、先月はじめ、織田兵部少輔殿の奥方が、夢男に犯されて、自刃されたときき及んで、ハタと納得つかまつった」
それをきいて、「影」は、双眼を光らせた。
「自刃した？」
「左様――。どうやら、兵部少輔殿が、無理矢理に、自刃させてしもうたときいた」
「……」
「影」は、もとの冴えた無表情に戻ると、
「……美人であったな」
ぽつりと、言いすてた。
「影」が豊臣家に恩顧を蒙り乍ら、大阪の役にあたって、旗幟を反して、徳川家につき、その家を安泰にした大名をえらんで、つぎつぎと屋敷へ忍び入って、夫人もしくはその女を犯しはじめたのは、昨年の夏からであった。
警戒きびしい諸藩邸も、「影」の目には、空家同然に映った、といっても過言にはならな

い。

当時は、まだ、桃山時代の遺風をのこして、各大名屋敷はそれぞれ、豪壮を競うていた。二重の櫓門、大棟門を表門とし、別に将軍家の御成りに備えて、御成門を設け、屋敷の周囲には長屋をつらねて家中の住居とし、公式部分は書院造風となり、上段をそなえ、廊下を廻し（主殿の広縁に当る）、庭前には能舞台を有した。常住の部分は、壺庭を距ててあり、その中間に台所が位置し、長局の棟は、その奥に廊下でつながっていた。

夫人および女中たちの住居である長局は、一本の廊下が各部屋に通ずる構えで、いわば、今日の団地のように単純であった。

すなわち——。

公儀は、大名がたに、その屋敷を築かせるのに、いかに豪壮をきわめようとも、出費は咎めず、むしろ奨励さえしたが、その構造は、厳重に取締ったのである。決して、独特の設計は許さず、規定の絵図面にしたがわせた。したがって、親藩・譜代・外様の別に応じ、格式・石高の差に順じて、その邸第の模様は、手にとるように明白であった。

「影」が、その敏捷無比の身を忍び込ませて、その目的を遂げ、悠々と退散することは、易々たる業であった。

「影」が、他の暴漢とおのれを区別したのは、対手を夢裡に犯しておいて、知らずにすごさせることであった。

あるいは、書物を読み耽っているところへ、音もなく迫って、これを睡らせて、ひえびえとした畳の上で、帯を解いて、肌身を剝いた。女は、目ざめて、拡げた裳裾の中に、おのが下肢が、ざまざまましく、八の字に押し開かれているのに気づくことになった。

あるいは、また——。

良人と同衾している夜をえらんで、忍び入り、その営みに疲れはてて睡り入ったのを、見すまして、良人の方を、畳へひき出しておいて、代って、愛撫の一刻を過すとか……。

また、ある時は、壺庭へかかえ出し、飛石を枕にさせて、月の光の中で、犯すとか……。

思うがままに、「影」の趣向は、凝らされたのである。

そして、推参の証拠として、必ず、その下腹へ、むかしの装飾風の葦手絵を真似た文字絵を、描きのこしたのである。

それは、「ゆめおとこ」と読めた。ただの墨ではなく、特殊の塗料を用いたために、一度や二度の入浴ぐらいでは、洗い落せなかった。

被害を蒙った各藩邸は、この恥辱を厳秘にふしたが、隠すより現るるはないたとえにもれず、いつか、「夢男」の噂は、殿中はもとより、巷間にも、ささやかれるようになっていた。

慙じて、自ら生命を断つ者も出たし、良人から斬られて果てた者もいたし、つぎつぎと悲劇が演じられて、邸内に暗い翳が落ちない家はなかったのである。

賢明に、良人にも召使いにも知らさずにすませた夫人もいたが、これは、ふたたび、「影」

の襲撃を受けるところとなった。

その場合、「影」は、おのれの姿を、面前に現し、恐怖させ戦慄させつつ、睡らせて、これを抱いた。

三

「影」が、織田兵部少輔信良の夫人を犯したのは、先月はじめであった。

かぞえて、十七番目の犠牲者であった。これは、むしろ、おそきに失したといえる。美貌の噂たかく、聡明をもってきこえた夫人だったのである。

織田信良は、信長の次男信雄の三男であった。従四位上左少将に叙せられ、上野国小幡に二万石を領していた。

その父信雄が、名家北畠を嗣ぎ、はじめ、家臣の豊臣秀吉に屈せず、徳川家康と勢を合せて、小牧・長久手の役を起したことは、掲載るまでもないことである。

天正十三年、秀吉が関白となり、従三位権大納言の信雄は、朝廷の位階でもすでに昔の関係をゆるされなくなり、やむなく、秀吉に屈した。

野州那須で謫居ののちに、入道となっていたが、文禄の朝鮮役の頃、召出されて、関白秀次の御相伴衆に加えられ、また秀吉の前に伺候した。

関ケ原役では、石田三成のために欺かれて、西軍に応ぜんとして事ならず、ついに、尺寸

の地もない人となった。やむなく、叔姪の間柄である淀君をたよって、寓した。

ところが、大阪の乱が起るや、信雄は、翻心して、大阪城から、風雨に乗じて、脱れ出て、家康の許へ趨った。

そして、豊臣家がほろんだのち、和州宇多郡五万石を与えられて、寛永七年に、七十三歳で逝った。

その父信長の赫々たる威武の後を承けたために、信雄が、歴史にとどめた失計の事跡は、あまりに惨めなものとなり、織田家がなおも、残存していることを、にがにがしく思う人も尠くなかったのである。

豊臣家を裏切って、徳川幕府の下に、家をのこしている大名をにくむ「影」として、この織田家を見のがす筈がなかった。

「影」は、その夫人を犯すに、はじめて、睡らせることをしなかった。

自分が、信良に、風丰体格が似かよっているのを利して、巧みに信良に扮して、信良が長局に入る半刻前に、夫人の寝所をおとずれたのであった。

すでに、寝所における信良の振舞いは、天井裏からつぶさに見とどけている「影」に、夫人に疑念を抱かせる遺漏はなかった。

灯を細めて、あとから褥に入って来た夫人を、ゆるゆると全裸にして、その白い豊かな肌を、くまなく、舌で玩味するのを、信良は、常の前戯としていた。

「影」は、それにならって、信良よりも、さらに、念を罩めた。

……やがて、胸の隆起を、五指それぞれに与えて、股間へ、男の顔を埋めさせた夫人は、恍惚に堪え得ぬ低声をもらして、生絹の脚布を鳴らして、腰をもだえさせた。

信良本人が、入って来たのは、その時であった。

声もたたず棒立った信良は、やおら起き上ったおのれをそっくりに写しとった男の貌を視て、けだものじみた叫びを発したことだった。

信良が「影」に躍りかかった時、夫人は、すでに失神していた。

信良もまた、両のこぶしをむなしく、宙に舞わせたまま、意識をすてさせられた。

われにかえった折には、贋物がそうしていたと同じ恰好で、妻の股間へ、顔を埋めていたのであった。

「ゆめおとこ」の絵文字が、その絖のような美しい下腹の円部へ、くろぐろと記しのこされていたことは、例外ではなかった。

いま、あの美貌の貞女が、自刃したときかされ乍ら、「影」の冷たい滑石色の面相に、一片の悔悟の色も現れていなかった。

遠い目が、思い泛べているのは、美しかった肢体であろうか。

「のう、影殿」

佐助は、咳払いをひとつしてから、言いかけた。

「お前様も、そろそろ、世嗣ぎを儲けてはいかがでござるかな」

「影」は、佐助を見かえして、

「おれに、嫁を与えて、本能を矯めさせようとの存念なら、措いてくれ」

と、しりぞけた。

「い、いや、そういうわけではないが……、御世おさまれば、忍者も、正当のくらしをして、一向にさしつかえあるまい、と思うてな」

「生きのびたぞ、赤猿！」

鋭く、「影」は、あびせた。

「左様、生きのびすぎた。お主の遺言がなければ、むざとは、息をむさぼらなんだ」

佐助は、ふかいためいきをついた。

「おれは、おれの生きたいように生きる！　去んでくれ」

にべもなく言いすてて、「影」は、すっと立って、庵を出て行き、それきり戻らなかった。

昏れて、下界への坂道を辿りはじめた佐助は、ひとり、いくども、かなしげにかぶりをふっていた。

南蛮屋敷

一

博労町――という。

文字通り、一の日に馬市の立つ一郭で、諸国から曳かれて来た馬匹と、半裸の博労と、そして馬蠅があふれていた。

ほかの街衢が、公儀法度の厳粛がゆきわたって、秩序にしたがって、整然として来るにつれて、はんたいに、いよいようす穢く、野蛮になり、その臭気にひき寄せられるように、浮世の掟からはみ出した連中が、集って来て、いまでは、名馬さがしの武家のほかは、まっとうな人々は、おそれて、近づかないのであった。

編笠で顔をかくし、鼠の木綿を着流した牢人姿が、肩に、いっぴきの小猿をとまらせて、飄然と、博労宿のひとつへ、入って来るのを見かけても、これを胡散くさく思う者は一人もいなかった。

泊り賃を先に投げておいて、無言で、すっと二階へ上って行く――。

肩の小猿が、たかって来る蠅を、ひょいひょい、とつかまえて、口に入れるすばやさを、小女が、みとめて、「へえ――」と目を瞠ったばかりであった。

焼け跡だらけの、傾いた畳に立って、はじめて、編笠をとると、小猿も、肩から跳んで、西陽のあたる窓へ、ちょこなんと、うずくまった。

……ごろりと仰臥して、目蓋をふさぐ。それきり、微動もせず、西陽が貌にあたるにまかせた。

江戸における「影」の定宿が、ここであった。

そうして、どれくらいの時刻が移ったか――。

突然、おもての辻から、なにか紛争が起ったらしい騒音がつたわって来た。

そして、それは、この旅籠の前へ、移動して来た。

「そ、その猿めを、とらえいっ」

呶号する武士らしい声に、「影」は、目蓋を開いた。

やおら起き上った「影」は、窓から、ぱっと逃げ戻って来た小猿を視て、眉宇をひそめた。

その手に、何やら、煌とかがやくものを摑んでいた。

「影」が、黙って、右手をさし出すと、小猿は、胡桃まなこで、主人を見上げ乍ら、すなおに、さし出した。

それは、小豆大の真珠を繋ぎ、かなり大きい青銅の十字架が下げられた品であった。
——伴天連の念珠。
この江戸に於ては、すでに絶えはてた筈の邪教徒が所有している珍奇の禁制品であった。
——白昼、公然と、これを持って、歩いている者がいたのか。
「影」は、その勇気の持主に、ふと、興味をおぼえた。
この時代、真珠は、宝玉中でも最高の貴重品であった。淡桃を帯びた銀白色の、純良無瑕の、この一顆だけでも、数十両のねうちがあろう。
「影」は、小猿を見やって、
「よう掠めて来た。……どうやら、持主は美婦のようだな」
念珠には、仄かな芳香がうつっていたのである。
だだっ、と梯子段を駆け上って来る足音に、小猿は、ぴょんと飛びあがって、主人の肩にしがみついた。
「ここかっ！」
襖が音たててひき開けられた。
勇壮を銜うた十河額に、みごとな髭を蠟と松脂で頬上へはね上げて、同じ牢人者乍ら、模様も華やかな革づくりの蝙蝠羽織の肩をいからせていた。
いずれは、どこかの長者の用心棒であろう。

「いたぞ！」
ふみ込んで来て、形相凄じく、睨みつけた。
「おいっ！　その猿を使って盗んだ品ものを、返せ！」
「……」
無表情で、じっと見上げていた「影」は、やおら、小猿へ視線をまわして、
「お前、何を盗んだ？」
と、訊ねた。
小猿は、小さな皺面を仰向けて、白い歯を剝くと、きっきっきっと叫んだ。
「お気の毒乍ら、こやつは、何も盗んだおぼえがない、と申して居る」
「黙れっ！　対手を観て、口をきけ！　げんに、盗んで、逃げ戻った猿を肩に置きながら、しらじらしく、ようもほざけた！　おもてへ出いっ！」
「人目のない場所へみちびいて、斬り倒して、奪いかえそうという存念か？」
「出いっ！　出ぬかっ！」
髭面は、鍾馗のごとく、目玉をひき剝いた。
「影」は、やむを得ぬ、といった様子を装い乍ら、編笠を把って、腰を上げた。
瞬間——。
小猿が、髭面へ、飛んだ。

不意をくらってのけぞった牢人者が、夢中で、はらいのけて、「おのれっ！」と抜刀した時、すでに、「影」の姿は、消えていた。

小猿もまた、窓の外へ、逃げていた。

一挺の駕籠が、遁れるように、博労町を出て行こうとしていた。

左右につき添ったのは、これは、律義な商人ていの男たちで、いくども、不安げに、うしろをふりかえり乍ら、駕籠をいそがせたのである。

駕籠の中の者は、貴重な念珠を奪われ乍ら、ひそとして、声もなかった。

二

これはもと、徳川家康に近侍して、無二の信任を得て、飛ぶ鳥を落す威勢を誇った本多上野介正純（宇都宮十五万石）の下屋敷であった、という。

本多正純が謀叛の企てがある疑いで、失脚し、配流の身となってから、この屋敷もまた、間口八間の矢倉門を、かたく閉ざして、ついに、一度も開いていないのであった。

公儀において、何者に管理させているのか、あるいは、もうすでに誰人かに下げ渡してしまっているのか——世間に知らされて居らず、たしかに、人は住んではいるが、昼間の出入りは絶えて無く、夜間にいたって、しのびやかに、裏門の潜りが開かれるという噂であった。

博労町から、逃げるようにして去った駕籠が、宵闇にまぎれて、入ったのが、この屋敷であった。

その時、もとは主人の居室であったとおぼしい常楽様という営作であろうか、古めかしい板壁、板敷の広い部屋で、二人の男が、対座していた。敷いているのは、これは、あきらかに、海の彼方からもたらされた真紅の天鵞絨毯の円座であった。

一人は、かなり高い地位に就いていることを示す身分熨斗目をつけて、おもては、山岡頭巾で包んでいた。恰幅もよく、そうして、無言で、端座しているだけで、威厳があった。

もう一人は、茶筅髪の、眉の薄い、目も鼻も口も、まるまるとした、いかにも愛嬌のある顔つきの町人であった。年配は、まだ四十前であろう。膝に置いた左手の、親指と人差指が無いのが、ぶきみであった。

先刻から、この町人が、一人で喋っているのだが、対手の返辞を待とうとせずに、抑揚のない、ゆっくりとした語調で話をすすめる態度に、不敵なものがうかがわれた。

「……つまりで、ございます、東照宮様（家康のこと）が、耶蘇教をおきらいになり乍らも、一方では、御朱印船の海外往来をおゆるしあそばされたのも、国を鎖ざしてしまうお気持はすんぶんなかったからでございましょう。耶蘇教は耶蘇教、交易は交易——ここのところは、ちゃんと、わきまえておいであそばした。関ケ原の役で、東照宮様は、おらんだ船の水先案内者の安針から、二十門の大砲をおもとめになって、これが、大阪方に対してどんな凄い威力を発揮したか、充分におみとめになった。外国との交易が、いかに必要か、ご自覚なされ

ていた。……失礼乍ら、二代様（秀忠のこと）には、この大きな目をお持ちあわせではなかった、と申せます」

堂々と、将軍家を非難してはばからぬこの町人は、堺町人で、湊屋久右衛門という男であった。

たしかに――。

家康が許可していた朱印船は、遠く蘇抹都拉海峡以東――あらゆる方面を通商区域に容れていたのである。

暹羅、安南、かんぼじゃ、呂宋、爪哇、ぼるねお等々……。それらの街には、日本人町があり、巨富をなした者も尠くなかった。

もとより、その交易ぶりは、国をうしろ楯としたものではなかったので、祖国から拉致して来た多勢の娘を、英人や葡萄人や和蘭人に与えたり、時には海賊に豹変したりして、あくどく儲けていた。

この湊屋久右衛門は、朱印船の船頭と呂宋の女とのあいだにうまれた、いわば、和寇の末裔ともいうべき、人物であった。

朱印船は、六七十万斤を積載するに耐える、長さ二十間、幅九間、七尋の柁を用い、四百人の水主を擁する唐船作りの巨体をもっていたので、ひとたび、海へ出れば、小さな祖国の支配者の命令など、歯牙にも掛けぬ存在となった。その船で生れて、育った男である。江戸

のまん中で、将軍家を非難してはばからぬ気概があるのは当然であった。

「二代様になって、伴天連門徒をおそれるあまり、里船いぎりす船まで、入って来るのをご禁止になった、というのは、まことに、たわけた御政策であった、と申すほかはありませぬ。……東照宮様は、創業のあるじだけあって、御政策もずいぶん大胆であられた。二代様になると、ひたすら、外様の大名がたの謀叛をおそれて、この手足を捥ぐことを、お急ぎになるあまり、外国の勢力と結託させないように、国を鎖ざしておしまいになった。そして、いよいよ、御当代様になると、ご公儀の威光を、さらに増すためには、徹底して、この国ぜんたいを籠の鳥にし、人民たちを、盲にしてしまおうとなされて、当今の狂気じみた耶蘇教禁止の御措置と相成って居ります。……左様、ご公儀が、耶蘇教徒をとらえて、火あぶりになさろうと、狂犬に嚙み殺させようと、非人に犯させようと、それはご勝手と申すものでございます。信徒どもは、よろこんで、殺されたり、犯されたりしているのでございますからね。ただ、耶蘇教を迫害するあまり、海外との交易をねがっている、わたくしども商人までも、白い目でごらんになるのは、いかがなものか、と申したいのでございます」

前年――幕府は、和船の海外渡航禁止令を出していた。

それまでは、海外通航の船には、朱印の外に、老中の奉書を長崎奉行に差添えて下して、所謂奉書船として、許可を与えていたのである。

その奉書船をも、幕府は、停止してしまったのである。

定

一、異国へ日本の船遣し候儀、堅く停止のこと
一、日本人、異国へ遣す可らず候条、忍び候て乗渡り候者、これ有るに於ては、その身は死罪、その船並び船主とも、留置き言上すべきこと
一、異国へ渡り住宅仕る日本人来り候わば、死罪申付く可きこと
幕府は、日本人が海外へ出て行くことを禁止するとともに、海外に在る日本人及びその子孫が帰国することさえも許さなくなったのである。
また――。
南蛮人（ぽるとがる人とかおらんだ人とか）が、日本に子孫を残すことも禁じた。南蛮人の妾になって、もしその子を生んだならば、即座に殺さなければならなくなった。
そして――。
交易の場所は、長崎一港のみに限定してしまったのである。

三

「しかし、久右衛門――」

はじめて、頭巾の武士が、口をひらいた。
「お主一人だけは、こうして、本多の屋敷を買いとって江戸の中央で、悠々と、密輸の品々をさばいて、巨利を得て居るではないか。海外渡航の絶対禁令のおかげで、かえって、お主は儲けが倍になるのではないかな」
皮肉な口調で言った。
「御冗談を仰せられます。手前は、この首をつなぐために、愈々もって賄賂に精を出さねばならぬではございませぬか。ご公儀も三代目になりますと、お役向きも、あさましゅう慾深におなりでございます」
「ふゝゝゝ、賄賂ぶんだけ、儲ければよい理窟であろう。ぜいたくを申すな。……時に、隠れ切支丹の件は、しかと引受けてもらえるな？」
「念を押して頂くには及びませぬ。手前の首がつながっているのは、その件で大いに役立つからではございませぬか。心得て居りますよ」
久右衛門が笑ってこたえた折、駕籠につき添って戻って来た男の一人が、入って来て、耳うちした。
「……盗まれた!?　何者に――？」
久右衛門は、その円満な童顔を険しく一変させて、問いかえし、
「なに、猿に？　……ばかな！」

吐きすてて、あとで相談する、と男を追い出した。
それをきっかけにして、武士が、辞去すべく、円座を立つと、
「お待ち下さいまし」
久右衛門は、とどめて、
「ひとつ、ごらんに入れたいものがございます」
「早速、わしにも賄賂か」
「賄賂は賄賂でも、いささか、ちがったおもむきのしろものでございます」
頭巾の武士が、みちびかれたのは、表と奥の境を越えて、長局の長廊下を過ぎて、さらにその奥に、渡廊でつないだ建物であった。
のみならず、それは、ただの建物ではなかった。
頭巾の武士は、曾て、伊達政宗によって遣された支倉常長が、羅馬より持ち帰った羅馬市の風景画を観たことがあるが、それに描かれていたと全く同じ建物を、眼前にして、
——いつの間に、このような家を！
と、今更に、湊屋久右衛門という男の放胆不敵な実践力に、舌を巻いた。
建物の内部は、昏かった。
いくつもの部屋は、厳重な扉で仕切られてあった。
久右衛門は、とある部屋の前に立つと、扉をたたいて、何か異国語を、口にした。

内側から、錠をはずす音がひびいた。
「お入り下さいまし」
久右衛門は、自分は入らず、頭巾の武士に、すすめた。
一歩——入ってみて、頭巾の武士は、
——これは！
と、息をのんだ。
見たこともない、さまざまな、珍奇な、異邦の調度の中に——。
まず、武士の目を晦ませたのは、煌とかがやく金色であった。
それは、ゆたかにみうった金髪であった。
その下に、窓の明りを背負うて、幻影かとも目を疑わせる、彫ふかに、繊細な貴げな貌があった。
双眸は、湖底の幽幻な青い色が湛えられていた。
真紅の天鵞絨の長衣をまとうて、えもいえぬ美しい姿態であった。
……茫然と、見惚れて、立ちつくす武士に、背後から、堺商人の声が、かけられた。
「お殿様、ご遠慮には及びませぬ。お抱き下さいまし。奉仕のすべは、仕込んであるつもりでございます」

この時、この建物の裏手の一隅には、「影」が立っていた。

駕籠のあとを尾けて来て、屋敷内にかつぎ込まれたその駕籠から、金髪の異国の女が出るのを見てとって、凝然となったのである。

「影」のなすべきことは、もう、きまっていた。

美女浚い

一

当時――。

泉州堺には、八人衆と呼ばれる大商人がいて、外国交易および内地海運業の主力となっていた。

八人衆は、それぞれ、千石船を所有して、西国諸大名が瀬戸内海を経て大阪に蔵米を輸送するに当って、これを一手に引受けていた。

鎖国禁令によって、荷船のほかに五百石以上の船を造ることが許されなくなって、八人衆の持船は、愈々その価値と威力を持ったのである。ただの荷船ではなく、これはいつでも、剽悍無比の和寇の船と化す構造をそなえていたからである。

伊達政宗が、支倉常長を羅馬に遣わすために、大船を造ったのを最後にして、諸大名は、兵船一艘も所有していなかった。幕府には、もと北條氏の船であった安宅丸という、三重の

楼がまえの、長さ三十余間の巨舸があったが、なさけないことに、これを自由に運転する者がなく、いたずらに、品川の浜に曝されていた。

大阪の町々は、元和元年の夏の陣で、滅茶滅茶に破壊されて、町民は八方に離散し、落城後、大阪城代となった家康の外孫松平下総守忠明が、市街の復興と、町人の還住を奨励して、ようやく、かたちをととのえたばかりであった。

大阪城三ノ丸の地を市街地に払い下げて、そこへ伏見の町人を招き、その商業力を期待していたが、いまだ、隆盛とまでは至らぬ状態であった。

すなわち——。

堺八人衆の隠然たる勢力は、微動だにもしていなかった。

湊屋久右衛門は、その八人衆の筆頭であった。一年の半分は、江戸に在住して、打つ手をあやまたず、幕閣の要職にある面々と昵懇を得ていた。

いまだ、武士道の吟味がゆきとどいて、公儀の威光が絶対的なものであった時世であった。商人が、私利をむさぼるために、施政者たちを動かすことは、まことに容易なわざではなかった。

武士たるものは、利慾に迷って意志を枉げるのを卑怯の極とし、膝前に千金を積まれても、初一念を翻さないのを重んじていた。したがって、武士は、金銀を与えることがあっても、貸すことはなく、貰うことがあっても、借りなかった。秀吉は、金貸を業とする者があるのを

をきいて、奸悪な徒であろうと、刑に処した、という。

天正中の武士の借用証文に、

「若し、この金子相済み申さず候わば、われら人にてこれ有るまじく——」

とある。

金銭を軽んじて、営利を卑むのは、戦国の遺風であった。

古い書物に、

「兵馬縦横の際に金銀を儲蓄すれば、かえって、襲撃せらるる患あり、まして武人は明日の命をも量らざるもの、銭あればとて一時の快を貪り、窮すれば則ち他を掠奪す、攻戦の際には千万の金も、一合の糧、一口の刀に如かざれば、金銀を重んぜざるは当然の勢いにして、この風、泰平の世に至りても存せるなり」

と、記されている。

尚武の風と雁行して、きびしい徳義の精神がみなぎっているこの寛永の時世に、あえて、地獄の沙汰も金次第と、必死の体当りをした湊屋は、やはり、和寇の末裔というべきであったろう。

使った金銀は、おびただしかった。

そして、その賄賂は、ようやく、急処急処に利いて来ていた。

ひとたび、顔を合せてしまえば、くどい会話のやりとりは必要ではなかった。対手には、

意外な贈物をしておいて、後日、下役どもを饗応し乍ら、こまかい具体的な打合せを行えばよかった。

足利から豊臣へかけての戦乱百年の間、自ら、守兵として、腕の立つ牢人者をかきあつめて、宛然一国を形成して、権益をまもりぬいて来た堺商人の不屈の根性は、こうした場合にも、遺憾なく発揮された、といってよい。

二

湊屋久右衛門は、薄ら笑い乍ら、その南蛮館の庭に面した露台の椅子に、腰かけていた。

日本名を、光耶と名づけたおらんだ女の部屋へ、送り込んだ頭巾の武士は、目附・大平修理という人物であった。公儀目附中第一の利けものとして、若年寄さえも、一目置いていると噂されている。

幕府においては、老中の耳目となって大名・交代寄合などを監察する大目附は、故老の隠居級が多いが、若年寄の耳目となってあらゆる政務に干渉する目附は、出世慾の権化のような壮者ぞろいで、公儀奉公のすべての士たちから、おそれられていた。目附は、時として、直接、将軍家に意見を言上する権利さえ与えられていたのである。

湊屋にとって、大平修理こそ、唯一と言ってもいい難物であった。この屋敷への招待さえも、一度も応じなかった人物であった。それを、ようやく、実現させ、異国の美女を与えたのである。

——彼奴を陥落させれば、もう、おそろしい者はない。

湊屋は、満足であった。

いや、満足しようとしていた。ところが、北叟笑みを、口辺に刷いてはいるが、なぜか、いちまつの不安感が、心の片隅にただよっている。

自信の強い、度胸のすわった湊屋としては、めずらしいことであった。

大平修理を、この館にみちびいたのを、何者かが、もの陰から、窺っている——そんな不安感であった。

あり得よう筈のないことだった。この館を守るために、湊屋は、人目のふれぬ場所に、信頼の置ける忍者をひそませてある。怪しい気配が、近づけば、直ちに、その忍者の報せがある筈であった。かぶりをふって、椅子から立ち上った湊屋は、館の内へひきかえした。

ほのぐらい廊下を歩みかけた——とたん。湊屋は、はっと、きき耳をたてて、全身をこわばらせた。

むかって右側の部屋から、女の呻き声がもれて来た。それは、あきらかに官能の悦楽に酔うて、思わず、無意識にたてたものに相違なかった。

この館には、三人の美女が飼うてあった。印度の女と、おらんだの女と、琉球の女と——。

これらの女を、湊屋は、十日に一度ずつ抱いて、閨中の秘技をしこんでいた。二年を経て、

いまでは、女たちが、湊屋の愛撫によって、身もだえる陶酔ぶりは、凄じいばかりであった。

左様――月に一度か二度、湊屋が招いた客が、男に飢えた美女たちを、交互に与えられて、疲労しつくすまで、そのしなやかな肉体をむさぼらせることになっていたのである。

今宵の番は、おらんだ女であった。

他の二人は、飢えて、部屋の中に、じっととじこもっている筈であった。

意外にも――。

その呻き声は、印度女の部屋から、もれて来た。不安感があった矢先だけに、湊屋は、一瞬、血相を変えて、扉に走り寄って、鍵孔へ目をあてた。

――むっ！

湊屋は、肚裡で唸った。

ぺるしゃ絨毯の上に、淡紅色の部屋着をみだして仰臥した印度女の、ゆたかな褐色の太腿の一部が、覗き見られた。

一部であるだけに、かえって、それは異常に強烈な刺戟を、湊屋に与えた。

快楽の律動は、その太腿にも示され、恍惚の嘆声につれて、湊屋の視界いっぱいに、拡がりつつ、蠢いた。

「おのれ！」

湊屋は、監視者の目をぬすんで、男を引き入れた印度女の不敵さに、かっと全身の血を逆

流させると、鍵をはずす手も、もどかしく、扉を、ひき開けた。

唖然としたことであった。

絨毯の上で、女は、いっぴきのしゃむ猫を、はだけた腹に乗せているだけで、姦夫の姿は、どこにも見当らなかったのである。

湊屋は、目蓋を閉ざした女の寝顔を、睨め下した。あきらかに、その表情は、悦楽に酔い痴れて、もの倦げであった。

湊屋は、しゃむ猫を蹴とばしておいて、卓上の洋燈をとりあげると、女の祖国の品々で飾られた部屋をくまなく、探した。それからのち、女をひき起して、何事だ、と責めた。

女は、にんまりと微笑すると、

「夢で……」

と、こたえた。

三

湊屋はその部屋を出た。

すると、またしても、湊屋の耳は、同じみだらな呻き声をきかされなければならなかった。

それは、琉球女の部屋から、もれた。印度女よりも、その声は高く、あたりはばからぬ歓喜の言葉さえ交えた。湊屋が、狂ったように、扉にとびついて、ひき開けるのに、数秒も要

しなかった。

ここでもまた、湊屋は、女のほかに、何者もみとめることはできなかった。

琉球女は、故郷から持参した緋毛氈の上に、ぐったりと俯伏していたが、その裾は捲られるままにまかせて、ふっくらとした臀部まであらわにして、白い下肢を開いていた。湊屋は、いきなり、その臀部の陰の柔襞へ、片手を突き入れた。

ぬめりと、滑り入った指を、ひと掬いして、鼻孔へ寄せた湊屋は、男がのこしたものの臭気をかぎわけた、と思った。

「こやつ！」

矢庭に、女を摑み起すや、

「男は、何者だ！　ぬかせっ！」

と、喚いた。

痴呆のように、焦点を喪った眼眸をかえした女は、黙って、かぶりをふった。

「おのれ――この期におよんで、白ばくれようとか！」

湊屋は、形相凄じく、ふところ刀を抜きはなつや、切尖を女のそこへ擬した。

「えぐりとられるのが厭ならば、ぬかせ！」

その呶号をあび乍らも、女は、なお、春夢からさめやらぬていで譫言のように、

「夢で、出会うて……」

と、呟いた。

「なにっ、夢！　夢だと！」

湊屋は、ひとえぐりにえぐり取りたい衝動にかられた。

その時、奥の部屋から、鋭い悲鳴がつらぬいて来なければ、あるいは、本当にえぐり取ったかも知れなかった。

湊屋は、とび上った。

奥の部屋――そこでは、大平修理が、おらんだ女を抱いている筈であった。

悲鳴は、つづいて、起った。

廊下を奔りかけた湊屋は、一瞬、はっと、足を釘づけた。

その悲鳴は、これまた、女が、男の激しい愛撫の渦の中で身もだえているうちに、その竜巻に、もみ込まれ、まきあげられて、その頂点で、ついに堪え得ずにほとばしらせるものにまぎれもなかったからである。

印度女と琉球女の、奇怪な振舞いに、気を顚倒させた湊屋は、おらんだ女もまた、姿なき曲者に犯された、と直感したのである。

大平修理が、そこにいるのであってみれば、修理が、女にその悲鳴をあげさせた、と思いかえしていいのである。

湊屋は、いまいましげに、かぶりをふった。印度女と琉球女に、まんまと、かつがれた、

という気がしたのである。

いったん、ひきかえそうとしかけて、ふと、また思いかえして湊屋は、念のために、鍵孔から、覗いてみることにした。

忍び足で、近づいて行き、そっとあてがった湊屋の片目に映ったのは、意外にも、床に倒れて悶絶している大平修理の寝顔であった。

愕然として、息をのんだ湊屋は、咄嗟に、この大失態が、こん後の商いにおよぼす影響に思い及んで、総身が冷たくなった。わななく手で、扉を開いた。鍵はかかっていなかった。

大平修理は、袴さえもぬいではいなかった。この部屋に入って、すぐに、当て落されたことが明らかであった。

おらんだ女は、洋牀の上に、一糸まとわぬ裸形を、横たえていた。その姿態は、まぎれもなく、男にしがみついた、あられもないものであった。ただ、男の姿が、そこになかっただけのことである。

双腕は、姿なき男の頸を、しかとかかえていたし、二本の脚は、空ざまに挙げ拡げて、股間に容れた男の腰を、さらに深く、わがものにしようと、きつく挟み込んだかたちであった。

その姿態で、固着したなり、女は、意識を喪っていた。いや、意識を喪っているのではなく、一切の神経が、官能のために動員されて、快楽の海におぼれた仮死状態にある、とみえた。

湊屋は、憤怒のあまり、しばし、なすすべもなく、棒立っていた。

「……ああ！」

女の呻き声が、反射的に、湊屋を躍りかからせた。足くびを、ひっ摑みざま、その豊かな裸体を、洋牀から、ひきずり落そうとした刹那、湊屋は、

「あっ！」

と、目をひき剝いた。

その白い下腹の円部には、くろぐろと、文字絵が描かれていたのである。

ゆめおとこ

そう読めた。

その時、館の北方の木立の中では、二個の黒影が、三間余をへだてて、音もなく、対峙していた。

一方は、館からぬけ出して来た「影」であった。

「影」は、おのれの遁走路をふさいだ者を、一瞥して、

——忍者だな！

と看破した。しかも、並の忍者ではない。並の忍者ならば、こちらの姿を発見して、先まわりする迅さをそなえてはいない筈であった。

通り魔に似て掠め過ぎるおのが影を、瞥とでも目にとめさせることさえも、いまの「影」は、不満としていた。それ程の自信があったのである。

みとめただけでなく、行方をさえぎってみせた対手である。

「おのれ、よく、見つけた」

頭巾のかげで、「影」は、眸子を細めて、言った。

「おれの不覚か、それとも、お主の修練ができているためか――」

すると、対手は、即座にこたえた。

「お主の不覚だ」

「理由は？」

「忍者にもあるまじく、香料を、匂わせた！」

これをきいて、「影」は、合点した。

小猿のぬすんだ十字架の数珠が、懐中にあったのである。

「そうか――これは、まさしく、不覚」

頷いてみせて、「影」は、そろりと、一歩さがった。すると、対手もまた、そろりと一歩進んだ。

次の瞬間、二個の黒影は、飛鳥のごとく、木下闇の中で、跳躍した。

その闘いは、木枝一本さえもそよがせぬ無音のうちに、なされた。

そして、たちまちに位置を移して、表御殿前の池泉のある宏大な書院式露路の一隅において、対手は、「影」を見うしなった。

ほっと、ひと息ついて、

「あれは……もしや、影と名のる忍者では――？」

と呟いた――その声音は、孤独になって思わず地声にもどり、意外にも、若い女のものであった。

江戸の浪人たち

一

徳川幕府の江戸市街の経営は、まず譜代将士の知行割とともに、江戸城を中心とする屋敷取りをなし、そして、その周辺に町割をして、繁栄をはかったのである。

すなわち、大名旗本たちには、思うさまな豪壮華麗の邸第を築かせ、商人たちは、只で土地を与えて町をつくらせたのであった。

江戸を慕って出て来たのは、伊勢・三河・駿河の者が圧倒的に多く、伊勢屋とか三河屋とかの暖簾をかかげる店は、一町内に二三軒もあった。

江戸の俗諺に、物の数の多いのを、

「伊勢屋、稲荷に、犬の糞」

と語呂を合せて、唱っている。

三河町、駿河町の名も、移住者の出身をあらわしていた。

慶長十一年の江戸城修築にあたって、郭内に在った四日市町、大伝馬町、小伝馬町、南伝馬町が、郭外へ移され、江戸の市街は、いよいよ、八方へひろがっていた。

まさに——。

江戸は、大名と町人の街であった。

したがって、一城一邑の主にもなれず、町人にもなれぬ者たちが、この街に住もうとすれば、与えられる場所は、落葉の吹き溜る日陰の低地であった。

寛永も十余年を経て、浪人者の数は、いよいよ増していた。時勢の変遷を見て、はやく思い切りをつける者はきわめて稀だった。商人になるには、その才覚を持たず、百姓になるには、土地がなかった。

のみならず、戦国時代をあまり遠くに去っていない当時とて、やはり、武士階級を羨望して、大小を腰に帯びて、機会をうかがう者が、輩出して、これらも浪人者と看做されていた。

巨きな大名屋敷や寺院や神社の陰に、必ず、これらの浪人者の棲息する長屋があった。

愛宕下通り——俗に藪小路と呼ばれる一郭にも、細川三斎の宏壮な屋敷の裏手に、この長屋が在った。

もし、主家が改易となって、やむなく、ここに入ろうとする者があれば、入口に立っただけで、

——これが、人の住むところか！

と、居竦むに相違ない。

家康入国の頃に建てられて、そのまま修理もせずにすてて置かれた人夫長屋かと思われる。九尺二間ずつに割った長棟が、石をのせた板屋根を大きく傾けて、幾本かのささえ柱で、ようやく倒壊をまぬがれている。

羽目ははずれ、陽のささぬ路面は、幾日か前の雨水を溜め、どの家の油障子も破れ放題であった。

その油障子に、おのが家柄を忘れかねて、大きく家紋を画いているのも、一層あわれに見える。

ただよう臭気は、鼻を曲げるばかりであった。

住み人は、すべて、浪人ばかりで、どうして口を糊しているのか、互いに打明けたこともなく、九尺二間を、おのが城にして、それぞれ、交際を避けてくらしているので、一種不気味な静けさがあるのであった。

多少の学識がある者は、易者をしているのであろうし、聊か腕が立つ者は、武術を教えに商家へ出張しているのであろうし、なんの取得もない者は、顔を布で包んで、材木はこびや泥こねの下働きをしているのであったろう。

傘張りや楊枝削りは、後世の浪人者の手間で、まだこの頃は、商人に頭を下げて仕事をもらうのを、いさぎよしとしていなかった。

わが家で、できる職は、手習師匠ぐらいのものであったが、この臭気の盈ちた極貧長屋へ、子供を寄越す町家は、なかった。

その代り、

「喧嘩買い申候」

の張紙をしておけば、破落戸の親方から口がかかって来たし、髭面を看板にして、道場荒しをやれば、たとえ打ち倒されても、草鞋銭にありつける算段にはなり、どうやら、近頃は、鼻を曲げる臭気の中に、暴力のにおいも交るけはいがあった。

ところで――。

この長屋にも、武士たるものの面目を保って、折目正しくくらしている者もなくはなかった。

不破伝次郎――という。

もう一年近くも住みつき乍ら、いまだに、〝新参〟と呼ばれている若い武士であった。

いつまで経っても、この浪人長屋の風習に染まないからであった。早朝起き出て、木太刀の素振りを一千回、そのあとで水浴みをして、経書らしいものをのせた見台に向って終日をすごす、というくらしを、倦きもせずに、くりかえしているのであった。

一日中、きちんと袴を着用しているのも珍しいことであった。

といって、べつに物堅すぎるというのでもなく、他の者たちは隣家と反目しあっているか、

不愛想に終始しているか、どちらかであるのに比べて、物腰はやわらかく、笑顔を惜しまなかった。ただ、自分の身についた生活を、他人に関係なく行っているのであって、隣家がどんなくらしをしているか一切無頓着な態度であった。壁をへだてたとなりで、酒盛りがひらかれようと、若い女のなまめかしい声が立とうが、別に眉宇をひそめるでもなかった。むしろ、自由な浪人ぐらしを、ひとり愉しんでいるふうに見受けられた。ふところは、居食いするに足りるのであったろう。

二

某日、この長屋に、立派な乗物が到着して、俄然、〝新参〟は、隣人たちから好奇の目を向けられることになった。

乗物には、葵の紋がうってあったのである。

乗物から降り立ったのは、その身分格式の高さを示すしじら熨斗目をつけた初老の武士であった。

「不破伝次郎殿は御在宅か？」

そう呼ばわるのをきいて、あちらこちらの油障子の破れ目から覗いた視線は、一様に、異様に光った。

誰かを、どこからか、召しかかえに来る——そんな想像を、しただけでも、嫉妬と羨望で気が狂いそうになる世界であった。

誰の許にも、絶対に、そんな幸運の使者は現れぬ、と断定できるために、利己的な静けさは保たれていたのである。

ところが、あり得ぬ筈のことが、いま起りそうであった。

葵の紋のついた乗物が来たのである。これ以上の一大事があろうか。誰一人、武士の案内を乞う声に応える者はいなかった。ただ、ひそと固唾をのんだ。

武士は、やむなく、大声をあげた。

「不破伝次郎殿、御在宅ならば、姿を見せられい」

この時、〝新参〟の隣りに住む浪人が、その声に、午睡の夢をやぶられて、むっくり起き上ると、不精髭の醜い貌を、おもてへ突き出した。

兵藤貢というこの浪人は、不破伝次郎とは、対蹠的な放埒な生活を送っている男であった。年齢はさまでちがわないようであったが、その面相の険しさは、すでに、あらゆる陰惨な経験をして来ているためであろうかと思われる。

「不破氏は、他出いたして居り申す。御用向きならば、それがしが、代って、うけたまわり申そうか」

ふしぎなことに、この兵藤貢だけは、乗物の紋も、武士の立派さも、一向に気にかからぬ、無神経な顔つきで、云った。

「左様か。では、御造作乍ら、紀州より、加納左近が出府いたしたついでに、立ち寄ったと、お伝え下されい」

たのんでおいて、武士は、乗物に姿を容れると、立ち去った。

〝新参〟が、帰宅したのは、それから半刻ばかり後であった。兵藤貢が、その旨を告げると、不破伝次郎は、べつになんの感情もあらわさず、

「そうでしたか。それは、どうも……」

と、微笑をかえして、行き過ぎようとした。

「あいや！」

貢は、呼びとめた。

「加納左近殿と申せば、紀州家お目附の一人でござろう」

紀州大納言頼宣は、資質英明で、武勇を好み、しかも家康の子であったので、幕閣の最も警戒すべき人物であった。

先年ほろぼした将軍家の弟駿河大納言忠長とはちがい、老中を圧倒するぐらいの器量の持主であったので、容易に、処分することは叶わなかった。

幕府は、外様大名に向ってのみ峻厳ではなく、その一門、親藩に対しては、より以上に苛酷で、寸毫も仮借しなかった。いやむしろ、親藩をこそ、次々とほろぼしてしまいたい意向を蔵していたのである。

紀州頼宣の隠然たる勢力と人気は、将軍家光にとって、迷惑であった。折あらば、事由をたてて、隠居させてしまいたい計画は、まえまえからあったのである。

紀州家には、公儀からの付人として三家老が送られていたが、その監視だけではまだもの足らず、さらに、三人のお目附が派遣されていた。加納左近はその一人で、その前は、大番頭を勤めて、二条城をあずかっていた人物であった。

その加納左近が、供もつれずに、単身で、若い素浪人者をたずねて来たのは、尋常の出来事ではなかった。

にも拘らず、不破伝次郎は、その訪問にいささかも反応をしめさぬのであった。そのことが、かえって、不審を呼ぶ。

――それが、どうしたというのか？

そういう表情で見かえす〝新参〟を、兵藤貢は、睨むように、見据えていたが、何を思いかえしたか、ぷいと、顔をひっ込めてしまった。

三

次の日の宵――。

不破伝次郎は、いつものごとく、粗末な夕食を摂り了えると、見台に向って、端座した。

ひもといたのは、孫子であった。

兵は、詭道なり、故に能くすれど、之に能くせざるを示し、用いて之に用いざるを示し、近ければ之に遠きを示し、利して之を誘い、乱して之を取り、実して之に備え、強ければ之を避け、怒りて之を撓し、卑しくして之を驕らせ、佚すれば之を労す、親しんで之を離す、その備え無きを攻め、その不意に出づ、これ兵家の勝にして、まず伝う可からざるなり……

——故に能くすれども、之に能くせざるを示し、とは？

伝次郎は沈思した。

——そうか！

頷いた。

——これは、韜晦だ。

能力があっても、知らない顔をし、愚なように空とぼけ、茫洋として測り知れないように構え、一意乗ずべき虚隙を覗うことだ。

——六韜にあるな。聖人のまさに動かんとするや、まず愚色あり、猛獣のまさに搏たんとするや、耳を垂れて伏す、と。

そう呟いた時、伝次郎は、孫子から目をあげた。

隣家から、女の吐息が、荒壁を通って、洩れて来た。兵藤貢が、今宵もまた、酔うて、女をひき入れたことは、さき程耳にしていた。

兵藤貢も、一年ばかり前に、飄然として入り込んで来た浪人であったが、いつの間にか長屋の顔役的存在になっていた。むっつりしていると、面相の険しさが、対手を怯じ気づかせるが、破顔すると、なんともいえぬ愛嬌に富んだものになり、また酒が入ると、まことに多芸多能ぶりを発揮した。その醜面が、どうしてこんな美声をもっているのか、とおどろかせ、女たちがつい惹かれるのも、巧みな唄いぶりのせいのように噂を呼んでいた。

実際、女にかけては、長屋一番の果報者であった。

自身も、ぬけぬけと、

「おれの名は、女に貢がせる、という意味で、親がつけてくれた」

と、言いはなっていた。

女のみだらな嬌声が、壁を通して、ひびいて来るのは、毎夜のことであった。時には、白昼から、伝次郎は、きかされている。すこしも、それを気にとめずに、読書三昧にすごす伝次郎の方が、他の者たちには、変り者に思われていた。

だが——今宵は、女の声に、伝次郎の神経が、遽にひきしまった。

貢の老練な誘導に、必死に歯をくいしばって、官能の疼きに堪えていた女が、ついに、耐えきれずに、はっはっと洩らしはじめた吐息に、ふしぎな一種の律動があるのを伝次郎はさとったのである。

はじめて——。

伝次郎は、じっと、荒壁へ、目を当てた。

その向う側に、男女の痴態がある。

「……はあっ、はあっ、はあっ……はあっ、はあっ、はあっ……」

男の巧妙な翻弄にゆだねた女体は、微かな摺り音とともに、絶え間ない吐息を洩らしつづける。そして、時折、愉悦の一言を交えるのだが、その声音さえも一定の律動に乗っているのであった。

――これは！

伝次郎の表情が、冷たく、冴えた。

意外にも、吐息は、剣の極意のひとつ――律呂の呼吸であった。

律呂の呼吸とは、一太刀をもって対手を仆すべく、肉薄する時、わざと、おのれの呼吸をあきらかにしてみせて、対手の無念無想の状態を擾す――いわば、奇法であった。

男女の営みにおいて、陶酔した女を恍惚の頂きにひきあげるために、その吐息を律呂の呼吸になさしめる。

これは、容易ならぬ技巧であり、よほど、剣法の奥儀に達した者のしわざと言わなければならなかった。

伝次郎は、さらに能く聴くために、音もなくいざって、壁ぎわへ寄った。

荒壁に耳をつけると、女の吐息は、心臓の鼓動のように、規則正しく、伝わって来た。

――む！

伝次郎は、肚裡で、うなった。

次の刹那、伝次郎は、ぱっと、鳥のようにはね跳ぶや、反対側の壁ぎわで、石火の構えを、とった。

そして、それなり、固着してしまった。その眼眸は、いままで耳をつけていた荒壁に据えつけられて、またたきもしなかった。

そこには、一条の横線がひかれていた。それは、太刀の切尖三寸が、閃き去った切断線であった。もし、伝次郎の跳び退るのが一瞬おくれていたならば、頬から耳朶にかけて、したたか血を噴かせられていたに相違ない。

石火の構えを沈めた伝次郎のおどろきは、なお、依然として、きこえて来る女の吐息であった。対手は、女を抱いて、律呂の呼吸をつづけさせつつ、一剣を鞘走らせて、荒壁を斬ったのである。

その一颯の迅業を、女に知らせず、吐息を乱させなかったとは！

不破伝次郎は、隣家に住む兵藤貢が、尋常一様の兵法者でないことを、さとった。この一年間、絶えず監視されていたのではあるまいかと思いかえされた。

――いずれは、立合うことになるかも知れぬ。

そう自分に呟き乍ら、伝次郎は、未踏の秘境をのぞく思いで、荒壁を截った一線を凝視し

つづけた。

地獄牢

一

――斬るか、彼奴！

天井にかけた巣に、じっと蹲って、微動もせぬ蜘蛛を、後頭で手を組んで仰臥した兵藤貢は、もう小半刻も、見上げていた。

思念は、荒壁をへだてた隣家の不破伝次郎の上に凝らされていた。

多淫な町家の後家をひき入れて、これに、律呂の呼吸をさせつつ、荒壁を切ってから、すでに、五日が過ぎていた。

次の日の夕刻、顔を合わせると、不破伝次郎は、いつもと変らぬ、穏かな、おちついた物腰で、会釈して、すれちがって行ったのである。

これ以上、激しい挑戦手段はなかったにも拘らず、対手は、みじんも、応じる気色をしめさなかった。

兵藤貢は、屈辱さえおぼえた。

——なぜ応じないのか？　兵法者ならば、こちらの腕前を知って、立ち合う闘志をふるいたてるべきではないか！

貢は、隣家へふみ込んで、正面きって、試合をいどみたい衝動にかられた。

しかし、それは、抑えなければならなかった。あくまで、闘いは、隠密裡になされなければならなかった。

貢の目的は、ふたつあった。不破伝次郎を監視して、その陰にかくれている大きな徒党の動向をさぐることが、まず第一。それから、伝次郎を殪して、その所有している兵法秘巻を奪うことであった。これは、私の目的であった。

貢は、この一年間、ずっと、絶え間なく、伝次郎の行動を監視して来て、ついに、何の得るところもなかった。そして、ついに、しびれをきらして、無言の挑戦をしたのであった。

第一の目的からすれば、こちらから、挑戦することは不利であり、軽率であった。しかし、貢は、やらざるを得なかった。

一年間の監視で、貢がさとったのは、伝次郎の挙措振舞いに、全く隙がないということであった。これは、これからさらに一年、いや、二年が三年にわたって、監視しつづけようとも、無駄だと、貢をして焦躁させることに役立ったのである。

伝次郎をたずねて、紀州お目附・加納左近が来たことは、ついに、貢の焦躁を爆発させた、

といえる。

貢は、すでに、加納左近と不破伝次郎の関係を知っていたのである。

加納左近は、五年前から、伝次郎の腕前と人格を高く買って、なんとかして、自分の側近にしようと、辛抱づよく、くどきつづけていたのである。

伝次郎が固辞する表向きの理由は、

「まだ兵法未熟でありますれば、いましばし、修業仕り……」

というのであった。

理由は、ほかにあった。

兵藤貢は、伝次郎を仕官させぬ大きな秘密をさぐる任務を、公儀の要職にある人物から命じられていた。

貢が、その任務を引受けたのは、伝次郎が所有している兵法秘巻をわがものにしたい野望があったからである。すなわち、貢は、第二の目的のためにも、第一の目的をはたさなければならなかったのである。

ここに、この二人の兵法者の素姓を、あきらかにしておく必要があろう。

寛永御前試合のうち、第十試合は、芳賀一心斎と難波不伝との、何気ない対座の間に、行われたことは、前の巻において、すでに述べた。

不破伝次郎は、芳賀一心斎の愛弟子である。

兵藤貢は、難波不伝の直弟であった。

両者は、ともに、雌雄を決すべき宿運をせおうていた。

難波不伝は三年前に、芳賀一心斎は二年前に、逝っていた。

不伝は、その遺言として、

「一心斎の神妙霊知秘攷一巻を入手せよ。されば、天下無敵となるは、疑いなかろう」

と、兵藤貢に、告げたのである。

それから、一年間、貢は、必死に、一心斎をつけ狙って、ついに、機会を失してしまった。

当然、その秘巻は、唯一の愛弟子である不破伝次郎に渡ったものと、判断して、貢は、その野望を、愛弟子にむかって、燃えたたせたのであった。

——斬るか、彼奴！

くりかえして、貢は、独語した。

斬れる対手ではなかった。だから、斬りたかった。

こちらが、荒壁へ一閃をくれたのに対して、対手は、必ず、石火の構えをしめしたに相違ないのである。

亡師は、つねづね、もらしていた。

「一心斎には、石火の構えがある。いかなる、居合の抜きつけに対しても、これを躱す一心斎の神速の業は、残心である石火の構えから、逆に編まれたものだ。……一心斎を斬るためには、石火の構えを視てとらねばなるまい。石火の構えをとらせぬためには、不意に襲わねばならぬ。不意に襲えば、卑怯のそしりをまぬがれぬ。一流兵法者としては、とれぬ手段じゃ」

貢は、しかし、敢えて、その卑怯の手段をとろうと決意し、一心斎を狙い、伝次郎を狙いつづけて来た。その師にも、その愛弟子にも、一瞬の油断もなかったために、貢は、それを、とり得ずに、今日にいたった。

荒壁を一閃したところで、そのむこうの石火の構えを視ることは叶わぬ。

……むっくり起き上った貢は、

「たわけ！」

と、おのれ自身を罵りすてた。

翌朝、貢の姿は、伝次郎よりも一足さきに、長屋から、消えた。

二

数日後の黄昏刻、薄靄のただよう小日向の険しい勾配の庚申坂をのぼって行く貢の姿が見受けられた。

この坂は、俗に切支丹坂と呼ばれていた。坂上に、切支丹牢屋敷があったからである。

先年まで、井上筑後守の下屋敷であったが、筑後守が宗門奉行となったのを機会に、切支

丹宗徒を吟味し、監禁し、刑戮する牢屋敷に改造した。

地所は広く、高低四千余坪もあった。丈余の石垣をめぐらし、御蔵、番所、吟味所、牢屋、斬罪所、火刑所、梟首所が、棟をならべていた。

一通の書面が、番士たちに、貢を丁重に扱わせた。

貢が案内されたのは、屋敷の北隅にある黒い建物であった。檜造りに鉄鋲を打った扉が、ぎりぎりと不気味に軋んで、暗い口を開けた。

一歩入ると、階段が、地下に通じていた。

外の階の光に馴れた目には、にわかな闇に、地下の内部は何も見わけがつかなかった。

奥で、竈灯がともされて、光と影が、大きく、ゆらゆらと動き乍ら、近づくにつれて、鉄格子の中が、分明になった。

およそ百畳敷きもあろうか、蓆を敷いた土間に、惣別三四十人の男女がいた。土中に鉄の杭を打ち込んで、それに鎖をつけて、一人一人を繋いである。

女は足に、男は頸に、みなそれぞれ鉄枷をはめられ、鎖の長さ以上には、動けないのであった。

其処此処に、穴が掘られ、これは、便を仕落すところとみえた。

「入れて頂こう」

貢は、番士を促した。

「危険がござるが……」

躊躇する番士に、貢は、ふんと、嗤ってみせた。

……貢は、名状し難い凄じい悪臭のこもる内部へ、ふみ込んだ。

戸口に蹲っている女人は、鉄格子に黒髪を捲きつけて、両足をなげ出し乍ら、悲しい歌を、物倦げに、口ずさんでいた。

花模様のあでやかな衣装を纏うていたが、袖も裾も海松布のように裂き切れていた。顔は、垢にまみれていたが、眉目が整って、とり繕えば美しい娘かと思われる。

「……文をやりたや、若殿さまに、取りや違えて、余人にやるな、花の香のような手に渡しゃ……渡そ、渡そにも、殿御は居りゃぬ、去年の秋の、夜あらしに、十万億土へ、去なしゃった……十万億土へ、去なしゃった……」

囚徒のうちで、きかせているのは、この歌声だけで、他の悉くの者は、ふかく沈黙をまもり、鎖の音をひびかせて身じろぎする者さえ、かぞえる程だった。

ただ、一様に、松の樹脂のように垢と塵で染まった顔の中の眸子を、底光らせて、不意の闖入者を、じいっと凝視した。

貢は、たじろがずに、それらの陰惨な顔を、ひとつひとつ、鋭く見わたして、歩いた。

突然、一人の男が、はね上るようにして、貢の腰へ、すがりついた。

「お、おたすけ下さいませ！……わたくしは、ち、ちがいまする！　切支丹では、ございま

せぬ！　ただ、伴天連に、一夜の宿をしてやっただけでございます！……おたすけ下さいませ！　お、お慈悲でございます！」

狂気のように喚くのを、貢は、突きとばした。

男は、襤褸のように、蓆の上へ俯伏して号泣した。

すると――。

とある壁ぎわで、ひくく、祈りの言葉をもらしはじめた者がいた。

貢は、その男に目を当てた。

髪は、さむらい風に鬢髪を詰めて、元結いで、きりきりと捲きあげ、白装束をつけていた。

白装束は、まだよごれていなかった。

見わたしたところ、この男が、囚徒中で最も威厳ありげであった。

貢は、つかつかと寄って、

「お主、豊臣の残党か？」

と、訊ねた。

「苦界の一門徒でござる」

男は、しずかに、こたえた。

「大阪城で、切支丹に帰依したのであろう？」

「左様、炎につつまれた大阪城で、無限地獄を見申した。……遡れば、偏えに、われわれが

元祖あだんとえわの科の応報でござった。それがしは、天主の御憲法の怖ろしさに、五体の血が冷えわたり申した。……御子ぜずすの流し給うたおん血の功徳によって、おん身の震怒を和らげ給え、と地にひれ伏したのでござる」

「お主を捕えさせた訴人は、誰だ？」

「……いかに慈悲哀憐、至りて甘味にてましますびるぜん・さんたまりあよ、追放人なるえわの子、われら、この泪の谷底に号きて、ひたすら、たのみあげ奉る。われらが訴えを顧みたまい、おん身のお力により、この苦難をゆるめたまえ、あめん！」

貢は、男の肩を蹴とばした。

この時、すぐそばで、一人のはだかの女が、鎖を高鳴らして、ふらふらと立ち上った。

「ひっひっひ……ひひひ……」

うす気味わるい笑い声をたてて、貢をのぞき込むようにしたが、すぐに、さもはずかしげな挙動になると、足もとに散らばった白い紙片を、いちまいいちまいひろいあげた。

とみるや、両脚をひらき、中腰になると、その紙片を、まるめて、陰部の中へ押し入れはじめた。

貢は、その下腹が、ぷっくりと脹れ出ているのを看て、

――孕んで居る。

慄然となった。

紙片を一枚のこらず、陰部の中へ押し入れた女は、よたよたと歩き出して、片足の鎖がのびきったところで、足をとられて、よろめき、がくっと膝を折った。

そのまま、よこ坐りに、脚を崩すと、髪をしごいて、ばさっと前へ振りおろして、ぐらぐらと首を振りつつ、笑い声をたてた。

この女だけは、窶れも見えず、肉の肥えた白い肌が艶やかであった。腹の子を育てるために、女の生理が、この地獄の苦難にも破げないのであったろうか。

貢は、戸口までしりぞいて、大声を発した。

「お主ら、市中にかくれる仲間たちに、この苦しみをあじあわせたくないためには、訴人を阻まねばなるまい。裏切者は、何者か？」

しばらく、牢内はしんとなっていた。

「きかさぬか？　どうだ？」

貢は、促した。

ようやく、応える声があった。

「われら信徒の敵は、泉州堺の商人、湊屋久右衛門でござる」

瞬間――貢は、大きくまなこを瞠いた。

「よし、わかった！」

三

次の日の朝、兵藤貢は、本多正純の元下屋敷をおとずれた。

ここでもまた、持参した一通の封書が、貢をすぐに書院へ通す効力を発揮した。

湊屋久右衛門は、待たせずに、現れると、不審げに、じろじろと貢を眺めやって、

「ご用向きは――？」

と、訊ねた。

「当邸の用心棒を志願いたす」

「用心棒？」

久右衛門は、露骨にいやな顔をした。

「お主を狙う刺客ではない。お主の命を護衛する役を買うた」

「手前どもには、もう、手練者を用意いたして居りまするが……」

「多くて困ることはあるまい。それとも、公儀から遣された用心棒をやとうのは、何か不便が生じるのか？」

「いえ、べつに、そういうわけではありませぬが……」

「されば、勝手に、用心棒にならせてもらおう」

湊屋の方も、それ以上拒む理由はなかった。

貢は、一室を与えられた。
夜に入って、貢は、ひそかに、壺庭へ抜け出した。
木下闇をさぐって、長局の裏手を過ぎ、渡廊でつないだ異邦の建物を、前方に見出した。
——これか！
ひそかな噂として、きいていた建物であった。
——異国の美女をやしなって、公儀の重臣たちにつぎつぎと抱かせている、というが……。
一歩、ふみ出そうとして、貢は、はっと、全神経を張った。
——いる！
何処かで、自分に注ぐ視線があるのを、直感した。
しかし、その位置は、さとれなかった、いや、対手の方でさとらせないのだ。
——忍者だな！
これは、確信できた。
貢は、ゆっくりと、苔のある地面を、五歩ふんで出た。
刹那——
「うッ！」
と、呻いて、よろめき、膝を折った。
その姿勢で、しばらく、動かずにいて、やおら、立ち上った。

何か凶器が襲って来たのではなかった。わざと、やったのである。
姿をかくした者が、咄嗟に、はっとなる。当然、おのれの気配をあらわにする。
貢は、こうして、対手のひそむ場所を感知したのである。
貢は、悠々と、とある檜の大樹の下へ来た。
星空へ、巨きくひろげた樹冠を仰いで、貢は、声をかけた。
「降りて来て頂こう。新入りの用心棒が挨拶をいたす」

姫舞い

一

浪人長屋の〝新参〟不破伝次郎が、風貌の端正にふさわしく、挙措態度の折目正しさを特徴とすることは、すでに、前に述べた。

常時、きちんと袴を着用しているのが、よく似合うのである。

兵法者の武骨はすこしもなく、それでいて、男らしいすがすがしさを、出会う人々へ感じさせ、由緒ある家柄の出である印象を与えるのであった。

紀州藩お目附・加納左近の来訪があってから、俄然、〝新参〟は、注目の的になり、やはり、その折目正しいくらしぶりが、意味ぶかいものであった、と囁かれた。しかし、当人は、そのことを問われても、笑って、こたえようとはしなかった。

……兵藤貢が、忽然として長屋から姿を消してから、三日後に、不破伝次郎もまた、衣服をあらため、酢漿草の五つ紋の羽織をつけて、家を出た。

――すわ！

とばかり、長屋中の浪人たちの目が光った。

加納左近の許へ行くのだと、思ったのである。

我慢ならなくなった一人が、とび出して来て、

「いよいよ、この貧乏長屋とも、縁を切る秋が参られたな？」

と、のどをひきつらせる声音で云いかけると、伝次郎は、微笑して、かぶりをふった。

「宵には、戻って参ります」

「な、なぜでござる？」

「この長屋の一軒が、わが家であります故……」

あっさりと、こたえておいて、伝次郎は、さっさと、行き過ぎてしまった。

平常互いに交際を避けている浪人たちも、〝新参〟に関することになると、鳩首して、あれこれと臆測をたくましゅうせざるを得なかった。

はたして、〝新参〟が帰って来るか否か――これは、真剣な賭となった。

伝次郎が、おもむいたのは、麻布青山の、宏壮な大名屋敷のあいだにはさまれた、ごく目立たない神社であった。

これは、備中賀陽郡庭瀬に在った樟媛神社を移したものであった。

庭瀬は、正しく、庭妹といい、慶長五年宇喜多家の旧臣戸川肥後守遠安が、この地三万石

を賜って築城した際、廃れた一宇の小祠を、叢中に発見した。これが、樟媛を祠った社であった。

樟媛に関する挿話は、ふるい。

雄略天皇の頃である。

吉備上道臣田狭という武将がいた。勅命によって、任那におもむいていた。その留守中、天皇は、田狭の妻稚媛を犯して、妾にしてしまわれた。風の便りにこれを耳にした田狭は、憤怒して、叛心を起すと、新羅へ趨って、天皇を討つ援を求めた。

天皇の方は、田狭の息子の弟君を召されて、吉備海部直赤尾とともに、未だ入貢していない新羅の征伐を詔された。

弟君は、百済に渡り、すすんで新羅に入ろうとしたが、老に化けた国神にはばまれて、征伐を中止して、百済にとどまった。

これをきいた田狭は、ひそかに使者を、わが息子の許へ送った。

「お前の母親は、天皇の妾になって、子まで生んだ、ときく。お前が、どうして、良人と息子をすてた母親を恨み、天皇を憎まないのか、ふしぎでならぬ。……お前は、百済の援を受けて、日本に叛け。わしは、新羅の援を受けて、日本へ叛こう。そうすれば、日本は、われら父子の手中に帰すであろう」

弟君は、その手紙を読んで、即座に、謀叛を決意した。

ところで、その時、弟君は、樟媛という妻を、ともなっていた。

樟媛は、良人の様子が怪しいので、ひそかに調べて、謀叛のことを知った。樟媛は、国を愛する心が深く、君臣の義に厚かった。

某夜、樟媛は、良人弟君を、短剣で刺し殺し、床下に隠し埋めて、百済の献った雑工をつれて、帰国した。

愛する良人を殺して、祖国の危機をすくった烈婦は、大いに、称讃された。

その烈婦の廟が、どうして、庭瀬に在ったか、分明ではないが、それにまちがいないと判ると、徳川家康は、これに賀茂神社と同格の、最高の格式を与えて、江戸へ移したのであった。

神社を、目立たない構えにつくったのは、祭るのが、女人であったための配慮であったろう。しかし、これに仕えるのは、斎の宮――内親王と定められている、という。

不破伝次郎が、この樟媛神社の宮司から、一度、御来駕ありたい、と使いを寄越されたのは、一月あまり前であった。

「貴殿が御師芳賀一心斎殿の御遺志により……」という口上に、伝次郎は、断り難く、ついに、腰を上げて来たのである。

長屋を出る時、嫉視する隣人にこたえて、必ず戻って来る、と云いのこしたものの、実は、内心では、もはやふたたび戻っては来ないであろう、という予感があった。

で——、伝次郎は、家の中をきれいに清めておき、差配には、ひそかに金子一封を托したのであった。明朝までに戻らなかったならば、この金子で、長屋御一統へ、酒肴をふるまって頂きたい、と——。

二

伝次郎がしずかにふみしめて行く神域の砂利道上には、数百羽の白鳩があそんでいた。伝次郎の足にふれそうになっても、にげようとしないのは、公儀の命令によって保護され、参詣人は必ず餌をまくならわしがあったからである。

尤も、参詣人はごく尠く、山中のように静寂が深い神社であった。

伝次郎は、太刀を鞘ごと腰から抜いて、うしろへまわし、朱色の柱の拝殿へのぼった。

これが、ふつうの神社とちがっているところは、拝殿の奥の神座に、二尺あまりの高さの神像が据えられてあるのが、御簾ごしに、仰ぎ視られることであった。

具をつけ、鐔物の大刀をはき、強弩をもち、髪を男子と同じく美豆良に結った御像であった。玉纓、瓔珞、肩布、裙帯などをつけているのが、女人の証左である。

相貌は、ふっくらとした丸顔で、菩薩のようであった。

板の間に坐って、じっと、凝視した伝次郎は、やがて、ふっと、冷たく微笑した。

——良人を殺して神とまつられるか！

皮肉な独語を、胸の裡でもらした。

人の気配があって、伝次郎はやおら立ち上った。

宮司であった。もう六十もなかば過ぎた白髯の老人で、神道学者としての名も高く、その評判にふさわしい穏かな物腰の人物であった。

面晤は、いまが、はじめてであった。

宮司が、伝次郎をともなったのは、舞殿であった。ここもまた、四方の柱は、朱であった。

「率爾なお願いにも拘らず、ようこそ、御承諾下された」

宮司は、丁重な礼をのべた。

用向きは、すでに、伝次郎は、きいていた。

四月十七日、将軍家が、江戸城内紅葉山東照宮へ参詣にあたって、その舞殿で、樟媛神社につたわる舞楽を、上覧に入れることになったので、是非その前に、これを観とどけておいて頂きたい、という依頼であった。

その舞楽には、伝次郎の恩師芳賀一心斎が編んだ〝剣の舞い〟が組み入れられてあったのである。

先の斎の宮の時、古い型をあらためたのであるが、これは、一心斎の指南によるものであった。

伝次郎にとって、これは、はじめて耳にする恩師の話であった。

「このたびの舞いは、先の斎の宮の伝授そのまま演ずるのでござるが、なにせ、柳生但馬守はじめ、高名の武芸者の揃うた江戸城内で、はたして、上覧に堪え得るものかどうか、舞い手が、まだ二十歳にもならぬお方でござれば、聊か心細うて、あらかじめ、一心斎殿の愛弟子である貴殿に御覧願っておきたく存じ――」

宮司は、真剣な面持で、そう云った。

伝次郎は、思い出した。

むかし、草庵にあって、師は、酒に酔って機嫌がよくなると、鉄扇で、膝を打ち乍ら、ひくくうたっていたものであった。

その時は、それが、何であるか、伝次郎には判らなかったが、後年になって、舞楽であった、と思いあたった。

師は声の佳い人であった。唇をうごかさぬ程度に口ずさんでいても、伝次郎は、草庵から遠い場所で、ききとることができた。

また、ぴしりぴしりと、膝を打った鉄扇の音は、虚実交互のひびきをもっていた。

剣の道で謂う、青眼破の極意であった。

敵の青眼の構えに、おのれの太刀を進んで合せる時、敵の撃太刀を虚と視れば、わが対太刀を実とし、咄嗟に、敵がその虚を実に転ずれば、こちらは実を虚に変え、撃って来れば身を翻して、撃ちかえす。

敵の青眼に対するこちらの青眼は、青眼を破るためのものである。

虚と見せて実、実と見せて虚――この玄妙の呼吸を、構えの内に置くことで、必勝の瞬間をとらえ得る。

舞楽をうたう師の声が虚声であれば、膝を打つ鉄扇の音は実となり、声が実声となれば、音は虚となった。

伝次郎は、几帳のむこうで、楽器が奏されはじめるや、恩師に会う気持で、粛然となった。

三

――お！

思わず、伝次郎をして、胸中に、叫ばせたのは――。

剣を手にして、しずしずと、舞台に現れた斎の宮の、目ざめるような臈けた美しさであった。

伝次郎は、宮がゆるやかに舞いはじめてもなお、その美しさに目をうばわれたままであった。

はっと、われにかえって、おのれを慙じた伝次郎は、しかし、全身に遽にたぎった血汐の熱さを、しずめることは、咄嗟によくなし得なかった。

そのために、伝次郎は、対いの座の宮司が、不審に思うくらい、苦しい表情になった。

そのうちに、伝次郎の双眸は、鋭く冴えて来た。
斎の宮の美貌が消え、宙を截る剣尖の動きのみが、伝次郎の目に映った。
ひとたび、無限の空間を舞いはじめた剣尖は、楽に応じて、どこにも静止することなく、天を払い、地を薙いで、とどまるところを知らなかったのである。
これは、尋常の剣さばきではなかった。
一太刀あびせて、さっと、残心に移るのではなく、絶えず剣は、旋回しつづけているのであった。
のみならず、その旋回しつづける、どの刹那をえらんでも、それがみごとな残心の型をなしていたのである。
そこには、石火の迅業はなく、ただ、優美な線のみが、描かれていた。
空間が無限であるように、その曲線もまた無限であった。
支那の剣仙談に、剣そのものが、空中を飛んで、人を刺しに行く話がある。いま、伝次郎の目に映る剣が、まさしくそれだった。
剣にも、舞う人にも、全く殺気はなく、白い閃光の優美は、白い貌の腐けた華麗と相映えて、見戍る者を恍惚の境にさそうばかりであった。
やがて、羯鼓が大きく鳴り、剣は、ゆるやかに、舞い納められた。
右手の剣を、左足のさきへ切尖を指して、落し、左のてのひらを、かるく、峯にあてている形で、停った。

席をあらためて、斎の宮を上座にして、宮司から意見を需められた伝次郎は、しばらく、考えていてから、
「剣技ではなく剣舞として工夫したわが師に、弟子たる者が、言葉をさしはさむ余地はありませぬが、……しいて申すなら、舞いおわった時のかたちでありますが、もう少々、左右の足さきを、ひらき気味にされては、いかがかと存じられます。これならば、樟媛神社の舞楽にふさわしい、破邪の剣の構えかと思われます」
「では、その型を示して下さらぬか」
乞われて、伝次郎は、剣をひろって立つと、ぴたっと、残心をとってみせた。
じっと瞶める斎の宮のすずしい双眸が、異常につよく光った。
……伝次郎が示したのは、浪人長屋で、隣家の兵藤貢に、荒壁を両断されて、跳び退きざま、とった石火の構えであった。
伝次郎の観たところ、この剣の舞いにおける唯一の残心とも云える舞い納めの形は、それを教えた一心斎が、まだ若くして、石火剣の極意を開明していなかったのである。
晩年にいたって達したこの極意を、弟子たる自分が、受け継いでいるからには、その形をいささか改めてもいい、いや、そうするのが、弟子の役目であろうか、と伝次郎は、思った

のである。

宮司は、手宮の中から、一通の手紙を、とり出して、伝次郎に渡した。

一心斎から、先の斎の宮へ送ったものであった。

文中に、

「……不測のこと有之候わば、逸疾く、はせ参じ申すべく――」

とあるのを読んで、伝次郎は、おのれの予感が当ったのをさとった。

こういう確約は、みだりにできるものではなかった。

よほどの覚悟が、できていなければならぬ。

かりに、もし、他家の招きに応じたとする。

その場合、その家と、約した人との間に不和が生じては、身が立たぬ。士たる者は、決死の約定は、生涯一度しかしてはならぬのである。

一心斎は、けだし、その一生のうちにこうした約束は、先の斎の宮とのみ交したに相違ない。

先の斎の宮とは、そうせざるを得ない仔細があったのであろうし、その約束を守って、一心斎は、ついに、主取りをせずにおれたのであろう。

「で――」

宮司は、膝をすすめた。

「このたび、将軍家よりの御所望は、あるいは、この舞いの由来を知る者の企てであると察しられるふしもあり、また、この催しを妨げようとする謀略もあるときおよび申す」

「それは、何故に――？」

「ただいまのところは、臆測の域を出ず、あからさまに、理由を申上げるのは、さしひかえとうござるが……、ともあれ、一心斎殿との約束を、唯一の門下である貴殿にはたしていただくのは、不当ではないと心得申す。この姫宮様の守護を折入って、お願いいたしとうござる」

宮司は、ひくく、頭を下げた。

伝次郎は、上座で、俯向いている斎の宮の美しい貌へ、冷静な一瞥をくれた。

どことはなしに、淋しい翳のあるひとであった。

斎の宮と呼ばれているからには、内親王か、女王のご身分に相違はない。その貴い身分が、かえって、何かのわざわいをまねいているのであろう。

伝次郎は、宮司へ視線をもどして、

「お引受けつかまつる」

と、云った。

「忝けない！」

宮司は、再び、頭を下げた。

斎の宮は、言葉でこそ、礼を云わなかったが、眼眸の色に、感謝のこころをこめた。

——わしは、この任務のために、もしかすれば、生命を落すかも知れぬ。

ふっと、伝次郎は、そう思った。

美少年

一

「今宵は、春が匂いまする」

幼い頃から、ずーっと仕えてくれている老女が、そう云って、ひきさがって行ってから、もう半刻あまり過ぎている。

春が匂う——まさしく、その形容がふさわしく、空気は、しっとりとして、あたたかなのであった。

褥に就いた斎の宮は、あるかないかに細められた灯の中で、じっと、目をあけて、動かずにいた。

神域の夜は、静かである。どんな遠い場所で、ほんの小さな物音がしても、はっきりとひびいて来る。

ふしぎなことに、あまりに寂寞がふかいと、静けさそのものが、じいんと、ひびくような

感がある。そのひびきを、斎の宮は、きき乍ら、ひとつの想いにひたっているのであった。

やがて――。

宮は、そっと、音をしのばせて起き上った。白羽二重の寝召の襟を合せると、燭台に寄って、明りを大きくした。それから、床の間わきの黒棚の上から、鏡宮をとりおろして、蓋をひらいた。

中には、葡萄紋の青銅の鏡があった。ゆかりのある古鏡であった。

それを、鏡台にたてかけて、おのが貌をうつして、乱れ髪を梳きあげ、臙脂貝の蓋をひらいて、うすく、唇へひいた。

これから、なそうとすることのための、女の身だしなみであった。

宮が、なしたのは、ふたたび鏡宮を把って、錦の下敷きをめくり、その下にかくしてあった一枚の絵を、とり出すことであった。その絵を、鏡の上へよりかけて、宮は、じっと、見入った。

それは――。

桜花を散らした大振袖に、猩猩緋の袖無し羽織をまとい、細身の太刀を杖にして立った前髪立ちの少年の肖像であった。

美しかった。しかも、それは、架空の貌でも、誇張して描いたのでもない証拠に、眉目はいきいきとして、眺める者に、いまにも話しかけようとする表情を示していた。現実に存在

する者を、ありのままに、写しとった肖像であった。

数奇な運命のもとに生れたこの姫宮はいままで、三度び大きな旅をしていた。

まだ、いとけない頃に、伊勢へおもむき、伊勢神宮の外宮で、三年あまりすごしていた。

次いで、三年前――十四歳の年に、西国へわたって、太宰府へ行き、宇佐八幡宮で、一年ばかりを送った。そして、このたび、江戸下りをして来たのである。

三度びの旅は、姫宮の生涯にとって、それぞれ、重大な意味をもった。

伊勢神宮の外宮ですごしたのは、斎の宮となるためであった。

宇佐八幡宮においては、この絵に写された美少年を、垣間見たのである。

少年の年頃は、宮とあまりちがわなかった。数人の武士にかこまれるようにして、境内を横切って行く優雅な後姿を、

――いずこの若殿であろうか！

と思い乍ら見送っていると、少年は、なにか後の武士が話しかけるのにこたえて、振り向いた。

にっこりとしたその貌を一瞥した宮は、思わず、小さな叫びをあげたくらいであった。それほど、美しかった。たった一度、見ただけで、永久に忘れられない妖しいまでの美しさであった。

事実、その後、宮は、思い泛べることができたし、またその俤は、決して、薄れるどこ

ろか、月日を経るにつれてかえって、鮮かになるようであった。

京へ帰って来て、半年ばかり過ぎてから、宮は、桂御所に遊びに行った時、招かれていた絵師の画帖を観る機会があった。

その画帖の中に、思いがけず、あの美少年の絵すがたがあったのである。

少女は、ちいさい胸をとどろかせつつ、

「これは、だれであろ？」

と、訊ねた。

こたえは、意外であった。どこかの大名の若殿ではなかった。西国一円を旅して歩く陰陽師ということであった。

しかも、氏素姓も知れぬ少年であった。噂によれば、乳のみ児の時、天草上島の北にある大矢野島の浜辺にすてられていた、という。

もと小西行長の右筆をしていた益田甚兵衛なる者が、関ケ原役後、流浪の果てにこの島に住みついていて、たまたま、この幼児を漁師がひろったところへ行きあわせて、自分が貰いうけて、育てたのであった。

甚兵衛は、美しさに惹かれたのであったが、育ててゆくうちに、非常な天才児であることが判って来た。

五歳の時には、すでに書道に天稟を示し、人々は、これをゆずり受けて、表装して賞翫し

た、という。

美少年であったばかりか、言辞挙措進退に、なんともいえぬ、悠揚迫らざる優雅さがあり、その在るところ、常に春風が吹く雰囲気がつくられた。

これは、後年のことであるが、別当李左衛門覚書に、

「……大矢野村に、益田四郎と申す者、十六歳にて、名誉を致し候よし、近時風聞仕り候、この四郎、稽古なくして読書を仕り、講釈を致し、やがて切支丹の世になり候由、申し勧め、その証拠を見せ申す可しとて、天より鳩を招き寄せ、手の上にて卵を産ませ、それを割りて、切支丹の経文を取出し見せ申し候、あるいは、竹に雀のとまりたるを、枝折れに致すなど、万不思議なる事のみ仕り……云々」

とある。

これは、その評判そのままを記したものであった。

あるいは、豊臣秀頼の遺児ならんか、とも噂されたくらいであった。

その絵師は、西国を旅行中に、わずか十五六歳の少年が、呪文を称えて、手をふれれば、いかなる業病を患う人も、薄紙をはぐように恢復にむかうと、非常な評判をとっているのをきいて、あとを追いかけて行き、肖像を描くことをゆるしてもらったのであった。

宮は、絵師に懇願して、この絵すがたを、画帖から、切りとって、ゆずり受けたのである。

爾来、古鏡の下に秘めて、人知れず、そっと眺めるのを、唯一の愉しみにして来ていた。

はじめは、伊勢物語にある筒井筒の幼な友達をなつかしむような気持であったのが、いつか、絵すがたは、宮にとって、ひとつの深い信仰の対象となってしまっていた。

二

このたび、姫宮が、この樟媛神社の斎の宮として、江戸下りをして来たのは、実は、ただそれだけの意味ばかりではなかった。

近時、皇室の内帑は、とかく不足がちであった。豊臣時代、また家康の頃までは、かなり、援助があったのであるが、家光が将軍職に就いてから、急に、公儀は、禁中経営に対しても、きびしい態度で臨むようになり、一文たりとも、無駄な費用を出さなくなったのである。

朝廷に於ける行事というものは、無駄といえば、悉く無駄のようなものであった。したがって、内帑金は、あればあるだけ、使いなされて来ていた。

御世泰平となったからには、もっと、たくさんの援助が公儀からあるものと期待していた禁中側としては、逆に予算を削られては、やりきれないことであった。

そこで、なんとかして、将軍家の一声を得ようと、鳩首した挙句、この姫宮を、樟媛神社の斎の宮とする名目で、江戸下りをさせて、将軍家に会う機会をつくることにしたのであった。

将軍家光は、美しい斎の宮を一瞥すれば、必ず、心を動かされるに相違ない。宮は、大奥に入るのはゆるされないとしても、公然の秘密として、将軍家を、月に幾度か、樟媛神社へ、忍びお成りをさせるようになろう。

宮が閨房のささやきは、必ず、朝廷の内証を大いに甘がせるのは、明らかである。

つまり、禁中側は、宮を人身御供にして、内帑をうるおわさんという狸算用をたてているのであった。

宮は、舞楽を献じたあと、将軍家の希望があれば、その身を、大奥の寝所に横たえなければならぬ覚悟をきめさせられていた。

わが運命の儚さを知っているだけに、宮が、この一枚の絵すがたにそそぐ、恋慕の情は、ひとしおであった。

……およそ、半刻も、じっと、美少年に見入っていた宮は、ようやく、それをまた、そっと、鏡宮の中にかくして、あらためて、鏡台に向って、じぶんの白い細い貌をうつした。

われ乍ら、美しかった。

美少年と一対にしてもらうに足りる麗質を、じぶんはそなえているのだ、と思う。

誰人にも、この心がわかってもらえない悲しみが、ふかい溜息となった。

と——。

そのおりであった。

宮は、どきりとした。

鏡の奥に——じぶんのうしろに、ひとつの貌が、闇の中から、うすぼんやりと浮かび出て来たのである。

それは、絵すがたの貌に、まぎれもなかった。

宮は、瞬間、息をのんで、両手で胸をおさえた。

貌が、仄かな笑みを湛えた。

宮は、気遠くなるような快い戦慄が全身を走るのをおぼえた。

貌は、ふっと、闇に消えた。

反射的に、宮は、ふりかえった。しかし、灯の光のとどくかぎりにはだれの姿もなかった。

幻覚であった、と思いかえして、宮は、鏡台を片づけ、鏡筥を黒棚にもどしておいて、褥に入ろうとした。

刹那——宮をすくませたのは、一方の壁ぎわに、もうろうとしてイむ黒影であった。

灯が細められていたので、その輪郭だけしかみとめられなかった。

宮は、五体がふるえて、誰何しようにも、声も出なかった。

「おそれないでもよい」

黒影は、しずかな声音で云った。

「そなたが見入っていた絵のおとこの、影だと思ってもらおう」

「貴方は、なにゆえに、ここへ……？」

「この神社の斎の宮は、天女のように美しいと、噂にきいて、参上した。ありていに申せば、そなたを犯す存念であった。……その存念をすてたのはわれ乍らわからぬ。そなたが、美しすぎるのか？　それとも、絵のおとこを恋うるいじらしさをあわれんだのか？　わからぬ！」

この声音は、「影」のものであった。

忍法に、生写しの法というのがある。顔面の筋肉の作用で、ほんのみじかい時間ではあるが、誰の顔でも、真似てみせる法である。それによって、一瞬、対手を錯覚に陥入らせるのである。「影」の面差は、それに適して、なんの特徴もなく、一度や二度見かけても、思い出しにくいことは、すでに、以前に述べてある。

「影」は、宮を犯すかわりに、美少年の貌を写しとってみせたのである。

宮に云った言葉にいつわりはなかった。どうして、こんな気持になったのか、自分自身でも、わからなかった。

「やすまれい。……おさらば——」

壁の中へ吸い込まれるようにして、「影」は、消えた。

三

不破伝次郎は、我破と、掛具をはねて、とび起きざま、枕もとの差料を摑んで、廊下へ奔

り出た。

宮の寝所から、銀鈴が鳴るや、目覚めるのと、その動作は、全く同時であった、といえる。そのまま、まっしぐらに、宮の寝所に行くかわりに、庭へ躍り出て、その寝所の前をめざしたのは、流石は一流の兵法者であった。まさしく、伝次郎のとった行動は正しかった。ただ、宮をおびやかした者が、尋常一様の曲者ではなかったために、伝次郎の疾駆も、ほんのわずかの差でおよばなかったのである。

星の光も潤んでいる、靄のまいた春夜であった。そのしっとりと重い夜気の中を、一陣の風が吹き過ぎるような気配を、伝次郎は直感したばかりであった。

鋭気に盈ちた伝次郎の目も、掠め去る影をとらえることは、叶わなかった。

しかし、伝次郎は、奔ることを止めなかった。そして、

「曲者っ！」

と、一喝しつつ、懐中から、手裏剣を抜きとった。消えうせた方角が、わかったわけではなく、わかったように見せかけるためであった。

次の瞬間――。

伝次郎は、築山のふもとにある一基の石燈籠の淡い赤い灯が、ほんの微かにまたたくのをみとめた。それへ向って伝次郎は、手裏剣をひょーっ、と放った。

燈火は、消えた。

奇怪にも、手裏剣は、そこから宙を旋回したもののごとく、伝次郎めがけて、飛びかえって来た。

「おっ！」

身をひらいて、差料を鞘ごと腰から抜きあげて、柄で、丁と手裏剣を撃ち落した。それから、しばらく、敵のひそむ地点を睨んでいてから、ゆっくりと、足をはこんで行った。

燈籠に、二間の距離を置いて、立ちどまると、

「出い！」

と、叫んだ。

気配をひそめていても、たしかに、その陰に、敵はいるのだ。

「出ぬか！」

伝次郎は、さらに二歩をつめた。すると、敵は、気配をあらわして、動いた。

「勝負！」

差料の剞形へ左手をかけて、鯉口を切った伝次郎は、すっと、右方へ二尺ばかり移って、木立の暗みへ、身を入れた。

そうした対峙のまま、数秒かが過ぎた。

伝次郎は、うたがった。

敵は、勝負に応ずる気配を示し乍ら、容易に姿を現そうとせぬのである。

ただの敵ではない故、いかなる武器をもって、どんな意外の業を使うか知れぬ予感はあるが、それにしても、時間を置きすぎる。これは、敵自身、おのが立場を不利にすることではないのか。

どうして、出ぬのか？

伝次郎は、不審のまま、待ちつづけた。

……ついに、しびれをきらして、

「行くぞっ！」

と、叫んだ。

とたんに、その蔭から黒いものが、ぱっと、燈籠の上へ、躍り上った。

——猿！

伝次郎は、声なく、唸った。

——計られた！

伝次郎の、その無念をあざけるように、猿は、奇声をそこにのこすと、数尺上の木枝へ、とびついて、またたくうちに、何処かへ逃げ去った。

伝次郎は、宮の寝所の前へひきかえして、声をかけた。宮の返辞する声は、恐怖のためのみだれはなく、美しく澄んでいた。

伝次郎は、納得がいかないままに、自分に与えられた部屋へしりぞかなければならなかった。

闇の目

一

狂ったような、烈しい男女の営みが終ったあとの、しらじらしい沈黙が、異国造りの部屋をおとずれていた。

一糸もまとわぬ全裸となったおらんだ女は、死んだように、ぐったりと、洋牀に横たわっていた。

その上から起きて、はだけた着物の前を合せた兵藤貢は、なかば嫌悪をもって、おらんだ女へ、一瞥をくれた。

異国の女の肌をはじめてあじわった快感は、なかった。兵藤貢ともあろう者が、その凄じい慾求に、応じきれなかったのである。頤と肩と腕を、食いちぎられる程嚙まれていた。

貢は、忍び入った時、烈しい抵抗に会うものと覚悟していた。それが、反対に、嘻々として、迎えられ、こちらが挑みかかるよりさきに、頸へ双腕をまきつけられて、口を吸われた

のである。貢の慾情は、その瞬間において、半減したといってよかった。

やっと、解き放たれた。

ざんねん乍ら、その思いであった。

貢は、扉へむかって、歩みつつ、女が洋牀からはね起きて、とびついて来るような、微かな戦慄をおぼえた。

ぶじに、廊下へ出ると、正直ほっとした。

——このおれとしたことが……。

苦笑したとたん、貢は、悸っとなって、足をとめた。

露台の椅子に腰かけている湊屋を、みとめたのである。

——彼奴！　知っていて、待っていた！

貢の全身に、殺気が盈ちた。湊屋は、やおら、立って、向きなおった。愛嬌のある顔には、明るい微笑があった。

「兵藤様。手前自慢の庭を、ごらん頂きましょうか」

「……？」

貢は、殺気を納めると、近づいて、

「お主の持物を犯した。咎めるか？」

と、言った。

「なんの……、おのぞみとあれば、いつでも、お抱き下さいまし」

こともなげに、湊屋は、こたえた。わざと剛愎ぶりをしめすのか、貢が一度で懲りることを見通しているのか、貢の方には、判断がつかなかった。

肩をならべて、庭へ降りて行き乍ら、貢は、言った。

「おれが、屋敷を抜けて、夜歩きする毎に、必ず尾けて来る黒犬が居る。お主の飼うているやつだな」

「お気づきでございましたか？」

湊屋は、平然としていた。

「気づかせるために、尾けさせたのではないか。黒犬は、囮であろう。あとを尾けて来る黒犬に、おれの気をとらせておいて、本物の尾行者が、おのれの存在を巧みにかくす、という方法だ。たしかに、三夜すぎるまでは、おれは、うかつにも、本物の尾行者に、気がつかなんだ。——はてな、とはじめて五感を働かせてみると、おれを、じっと観察している目が闇の中にある。おれは、ふりかえってみた。路上には、黒犬がいるばかりで、誰も居らぬ。おれは、再び歩き出した。すると、やはり、おれを見戍って、尾けて来る目を、感じた。目、というよりほかに、えたいの知れぬ者であった。黒犬の方は、その目の影だと、判った。……その目が、お主のやとうている者とすれば、これは、成程、おれなどを用心棒にする必要をみとめないわけだ」

そこまで、喋って、貢は、ふりかえった。いつの間にか、二間ばかり後から、黒犬が、尾けて来ていた。よほど、訓練のゆきとどいた尾行犬に相違なかった。

湊屋は、後手に組んで、ゆっくりと歩き乍ら、

「貴方様は、どういう御料簡で、手前どもの用心棒を志願なさいましたか——それを、ひとつ、伺わせて頂きとう存じます」

「お主は、おれを、敵か味方か、と疑うたのだな？」

「左様でございます」

貢は、ちょっと間を置いてから、

「おれは、切支丹牢屋敷の地下に設けられた生地獄を覗いた。そして、そこで、信徒どもに、お主らの敵は何者か、と訊ねた……」

「すると、この湊屋久右衛門だ、と誰かがこたえた、と仰言います」

「そうだ……。おれは、ただ異国の神を信仰しているだけの、善良な者たちを、こうした地獄の苦しみに遭わせている湊屋という悪党に、興味をおぼえた。お主は、まさしく、人間の皮をかぶった物慾の鬼らしい。会うてみると、想像通りに、悪党も徹底すると、いっそ、虫も殺さぬ好人物に見えて、気持がいい。おれの剣技を売りつけるにふさわしい商人と思った。……敵でもなければ、味方でもない。ただの取引にすぎぬ。お主の方では、買うたからには、充分に、おれの剣技を使うがいい、ということだ」

「わかりました」

湊屋は、大きく頷いてみせた。

「およそ、人間で、慾のない者はございますまい。お武家とお生れになれば、天下を取りたくなり、町人に生れれば、日本国中の金を一手にかきあつめたくなる。これは人情と申すものでございます。貴方様は、兵法の奥義をきわめて、天下無敵になりたいとおのぞみでございましょう。そのために、不破伝次郎殿がご所持の秘巻を奪いとりたいと念願なさっておいでなのも、無理からぬことでございます」

貢は、愕然として、湊屋を見やった。

人に語ったことのない自分の秘密を、この堺商人が、どうして、かぎつけたのか？

二

湊屋は、枯流れに井筒伽藍石や石橋を配した書院露路の中の、四阿へ、貢をみちびいた。

黄昏の翳が、ようやく、物陰に濃くなっていて、前方の織部燈籠に入った灯が、赤く、光を増して来ていた。

貢は、湊屋がどうやってかぎつけたか、訊きたい衝動を抑えて、対手が言葉を継ぐまで、口をひきむすんでいた。

「兵藤様」

「うむ」

「黒犬めは、あそこに――」と、織部燈籠の横を指さして、「おとなしく、待って居りますが、貴方様の仰言る目の方は、どのあたりに、光って居りましょうか、おわかりでございますか？」

と、訊ねた。

貢は、鋭く視線を配っていたが、

「あの柊の陰あたりだろう」

と、こたえた。

「お見えなさいます？」

「見えはせぬ。おれのならったのは、忍びの術ではない。兵法だ」

難波不伝の晩年の直弟子として、貢は、人里から遠い山中に隠栖する師に仕えていたので、当然、闇に利く目をつくっていた。しかし、忍法によってきたえた目とは、おのずからちがっていた。

この点に就いては、常に師から、きびしく、教えられていた。忍法と兵法は、似て非なるものだ、と。

兵法に於ては――。

おのが目を、すてるのである。はじめのうちは、いつどこから撃ち込まれるか判らないために、つい、肉眼を使って、物を見定めようとする。しかし、背後に目を持たぬ以上、うしろから斬りつけられた刹那、肉眼の働きは役立たぬ。敵の視線を、遠く距離を置いて、とぎすました神経によって感得する――それが、兵法者の高等技術であろう。これは、天性の鋭さもあるが、十年不眠の訓練を積んで達せられる境地であり、達人と称されることになる。

これとは逆に、現実に、墨を流したような暗闇を透して、物を見分けるのが、忍法である。例えば、闇夜に、城内へ忍び込もうとする時、目が利かない限り、これは、必ず失敗する。敵の視線にとらえられるのをまぬがれる前に、まず、城壁というものをはっきりと見分けて、これをよじのぼらねばならぬからである。いわば、忍者にあっては、敵は、人間であるより前に、木や石や水や土であった。これを征服しなければ、その任務は果し得なかった。当然、忍法は、肉眼の視力に重点を置く。

もとより――。

兵法と忍法を、兼備するとなれば、これこそ、稀世特異の天才というべきであろうが……。

「たしかに、あそこに、手前のやとった忍者が、ひとり、忍んで居ります」

あっさりと、湊屋は、みとめた。

「貴方様は、たしか、この屋敷へおいでになった夜、あの南蛮館の前の壺庭で、檜の大木の梢にかくれているのを、看破なさいました」

「うむ――」

その時、対手は、貢の挨拶に応えて、降りては来なかった。
そのまま、猿のように、別の木へ飛び移って気配を絶ってしまったのである。
「かりに、あれを、〝闇〟と呼んでおきましょうか。……ご相談申上げたいのは、〝闇〟と貴方様の協力によって、ひとつ、盗み出して頂きたい品がございます」
「それは、何か？」
「古鏡でございます」
「どこにある？」
「麻布青山の樟媛神社にございます」
「それは、造作もないわざではないか。おれが、援助するまでもあるまい」
「ところが、手前の方が、うっかりいたして居りましてな」
古鏡の所持者は、このたび出府して来た十八歳の美しい斎の宮であった。いつでも、奪いとれると考えていたところ、数日前、宮司が、おそるべき剣の使い手を、護衛者にやとってしまった、という。
「それが、偶然でございました。いや、もしかすれば、偶然ではなく、当然そうなる因縁であった、と申せないこともありますまい。その兵法者は、貴方様がよくご存じの御仁でございます」
「おれが、知っている？」

「左様でございます。貴方様の当面の敵――不破伝次郎殿と申上げたら、お驚きなさいますか？」
「彼奴が！」
貢は、愕きをかくさなかった。
「何故に、また、斎の宮の護衛者などに……？」
「さあ、そこまでは、調べがとどいて居りませぬが、なにはともあれ、不破殿は、これを必死の役目と覚悟した模様でございます。手前が、貴方様の剣技を買うたことは、失礼な申分乍ら、おあつらえ向きであったということに相成ります」
「まさしく、な」
この時、貢は、思い当った。
この湊屋は、公儀にとり入るために、かくれ切支丹門徒の摘発役を引受けている。
貢自身、実は公儀隠密であり、与えられている任務は、徳川家によって滅ぼされた大名の遺臣どもが、ひそかに、集って、天下覆滅の計画をたてて、大きな徒党を組んでいるという事実の有無をさぐることであった。
すなわち――。
湊屋がとり入っている幕閣の要職にある人物と、自分に命令を下している人物とは、同一人ではないか。

たしかに、そうにちがいない！

だからこそ、湊屋は、自分が不破伝次郎所持の秘巻をねらっていることを、知っているのだ。

貢は、湊屋が、斎の宮から古鏡を奪いとろうとしている目的も、もしかすれば、自分の任務と共通しているかも知れぬ、という予感がした。

三

夕食を摂ったのち、貢は、南蛮館の前の壺庭へ、忍び出た。

数歩して、たちまちに、貢は、〝闇〟の目が、自分にそそがれるのを感得した。それは、夜空の昴のように、微かだが、鋭い冷たい光であった。

——不破伝次郎ならば、この目を、どの程度の光として、感ずるであろう？

貢は、思った。

〝闇〟の目に感応する神経のすばやい働きの優劣こそ、不破伝次郎と自分の勝敗を決する——そう思った。

もし、不破伝次郎が、ここにいて、〝闇〟の目の光を、自分がいま感じているのよりも明るいものに感ずるとすれば、剣を交えるまでもない。

勝利は対手に帰す。

貢は、わざと遠まわりし乍ら、檜の大樹へ向って、ゆっくりと近づいて行った。

味方にはちがいなかったが、しかし、忍者対兵法者の隠微な対抗意識をすてるわけにはいかなかった。

檜の下に立った貢は、わざと全身を隙にして、ふり仰いだ。

——はてな？

〝闇〟の目は、その高処に在ると、察知していたのだが、こうして、その下に立つと、ただ、黒い樹冠が、星空にひろがっているばかりで、そこにひそむ者の気配はなかった。

貢は、微かな狼狽をおぼえた。

刹那——。

貢は、冷たい光芒が、背中へ向って、一直線に襲って来るのを感じて、飛鳥のように、一間あまり、横へ跳んだ。

気配もなく迫って来た者に、斬りつけられ、わずかに刃先を、紙一重で遁れた——その戦慄をのこした五体は、すでに姿勢を崩していた。

二の太刀は受けきれない崩れかたであった。

しかし、二の太刀は、襲って来なかった。電光が、一瞬閃いて、消え去ったように、ただの一撃のみであった。

茫然と、貢は、闇の中で、総身に汗した。

ようやくにして、貢は、その一撃は、実際に、白刃をもって斬りつけて来たのではなく、殺気のみを放射して来たのだ、と知った。

殺気のみを放射して、実際に、斬りつけた、と感じさせる——これは、なみなみでない術であった。

そうと判ると、貢は、思わず、ぶるっと、身顫いした。

——何者か？　〝闇〟ではない。もう一人、いる！

おのが顔面が、血の気を引くのを、おぼえつつ、貢は、そこに、立ちつくした。

と——。

突然、頭上はるかな高処の、葉陰で、微かな呻き声が、発するのを、貢は、きいた。

つづいて、葉摺れの音が……。

貢は、おのが視力の乏しさに、切歯した。いかに、眸子をこらしても、わずかに、枝葉のゆれるのをみとめるにとどまった。

その音も、ふっと絶えて、いくばくかが過ぎた。

苛立って、貢が、二歩あまり出た——とたん、

「おとすぞ、受けとれい！」

冴えた一声が、降って来た。次の瞬間、黒い物体が、落下して来た。

「……おっ！」

貢は、両手をひろげて、それを受けとめた。

全身を指さきまで包んでいたが、その胸だけを、はだけさせられていた。

ぐったりと、意識のない躰をかかえて、木下闇を出た貢は、わずかな星明りに、はだけた胸を見て、声なく唸った。

ふっくらとした双つの隆起が、そこにあった。

さらに——。

灯のある燈籠のかたわらに来て、貢を愕然とさせたのは、乳房と乳房のあいだに、むかしの装飾風の葦手絵を真似た文字絵が、くろぐろと描いてあったことである。

ゆめおとこ

そう読めた。

四君子

一

何処から拉致して来たものか。

「影」が、裲襠に包んだ女人を小わきにかるがるとかかえて、博労町の旅籠へ、飄然として戻って来たのは、まだ宵のうちであった。

土間に半裸の博労たちが三四人、屯していたが、べつだんの愕きは示さず、裲襠の裾から覗いた白い足が、するすると梯子段をひきあげられて行くのを見送って、

「なぐさんで、吉原へ売るつもりかの」

「浪人衆も、近頃は、いろいろとあきないの手を考えはじめたて――」

「いちばん、手っとり早い金づくりにはちがいあるまい」

まるで、こんなことは日常茶飯にすぎないような口ぶりで言い交して、すぐに、別の話題に移った。

ここは、そういう町であった。

夜のうちに、路上に、斬られて仆れている屍があっても、面倒くさそうに、脇へ蹴ころがしておいて、馬匹を曳いて行く光景が、あたりまえのこととして、見られる一郭であった。

「影」は、部屋に入ると、無造作に、えものを、畳へ抛り出した。

金箔でいちめん松皮菱のように箔置いた小袖をまとうた若い女であった。兵庫髷が、がっくりと崩れ、乳首がのぞくほど胸が乱れていた。かなりの抵抗をしたとみえた。

無表情で、腰を下した「影」は、しばらく、黙然として、その寝姿を眺めていた。気まぐれに拉致して来たまでであった。

素足の白さに惹かれて、ふっと、その気になったのである。

立派な乗物から、降りようとして、供が揃えた草履へ、つとのせた素足の美しきを「影」の目にとめたのが、この女性の不運であった。

旗本の中でも、かなり大身の、若女房に相違なかった。

……いつの間にか。

窓から、ひょいと、小猿が戻って来て、ひょこひょこと、傍へ寄ったが、主人の顔色を窺うように仰ぐや、すぐ、ぴょんと、ひと跳びして、女の小袖の裾をつまんで、するっとめくった。

「影」が、そうするように訓練したわけではなかった。

おそらく、主人が、大名屋敷へつぎつぎと忍び入って、夫人もしくはその女を犯すさまを、物陰から視ていて、おぼえたものであろう。そうすることが、主人をよろこばせると心得ているように、小猿は、小袖をめくり、生絹の脚布をはぎ、容赦なく、内腿まであらわにした。

そして、さあ、おやりめされ、というふうに、いびつな両手を拍ちあわせた。

その瞬間、珍しく、「影」のおもてには、暗い自己嫌悪の翳が刷かれた。

ふっと、ひとつの俤が、脳裡を横切ったからである。それは、樟媛神社の斎の宮の臈けた貌であった。

「影」が、目的を遂行せずに、立ち去ったのは、あの上臈に対して、はじめてであった。

爾来、どうしたものか、「影」の脳裡に宿った俤は、日を経るにつれて、鮮かになりこそすれ、すこしも薄れようとせずにいる。

「影」は、小猿に、女の白い下肢をかくせ、と手真似しておいて、ごろりと横になった。妙な虚しさが、黒い孔を開けているように、胸の中に、あった。

「ごめん――」

梯子段に跫音がしたわけでもないのに、不意に、声がかけられて、襖が開いた。「影」は、近時とみに老けた赤猿佐助の貌を、そこに、見て、むっくり起き上った。

佐助の方は、昏絶している女を、ちらと見てから、どっこいしょ、と坐った。

「影」は、佐助の諫言をきかされる前に、先手を打って、口をひらいた。

「おれは、今日まで、生きたいように、生きて来た」

その沈んだ語気に、佐助は、「影」が云おうとするところを読んで、微笑した。

「ところが生きたいように生きることさえも、面倒になって来た。なにもかも、面倒くさくなると、思いきり狂暴な振舞いをやってのけたくなる。……この女を、さらって来たのも、ほんの気まぐれだ。ここまで、かかえて来たら、犯すのも、面倒になって来た。……教えてくれぬか、赤猿。おれは、どうすればいい？」

「さあ……」

佐助は、微笑をつづけた。

「どうすれば、よろしかろうな」

「お主にもおれに教える才覚はないか？」

「もともと、毛が三本足りぬ男でござる。……さり乍ら、お前様がそういう淋しさをおぼえられたのは、重畳と申さねばなりますまい。正当の生活をなさるか？」

「そこまでは、考えぬ。正当のくらしをしてみたところで、おれは、なんの役にも立ちそうもない」

「嫁をもろうて、世嗣ぎを儲けることも、男のつとめと存ずるが……」

以前ならば、「影」は、にべもなく、しりぞけたであろう。

今日は、その言葉をきくと、冷たい面貌に、微かにうごく色を示した。

佐助は、すかさず、言った。
「嫁にしてもよい女の、あてがござるかな」
「影」は、じろりと佐助を見かえしたが、
「ない」
とこたえた。
「はああん、全くござらぬかな？」
佐助は、念を押した。
すると、「影」は、急に、おちつかぬ様子をみせて、懐中から油紙で包んだものをとり出すと、佐助の膝の前へ投げた。
「なんでござる？」
油紙をひらいてみた佐助は、怪訝そうに、眉宇をひそめた。
あらわれたのは、美しい前髪立ちの少年の肖像を描いた絵絹であった。
「これは、大層秀れた眉目の若者でござるが……如何なされた？」
「影」は、ひくい声音で、樟媛神社の斎の宮の鏡宮の中から、そっと盗みとって来た、と教えた。
「……宮は、この絵すがたを、いつまでも、あかずに、見入って居ったわ」
吐きすてるように、つけくわえる「影」を見成った佐助は、

「宮は、美しい娘でござったかな？」
と、訊ねた。
「影」は、それに応えるかわりに、
「この絵すがたを、宮に返して来てくれぬか、赤猿」
と、たのんだ。
「かしこまった」
佐助は、絵絹を、油紙で包むと、
「恋――でござるかな。恋は、まことに、よろしいあじわいのものらしゅうござるな」
とぼけた口調で、言ってから、
「どれ、この女も、どこかへ、すてておき申そう」
かるがると、肩にかつぎあげたことだった。

二

同じ時刻、樟媛神社の奥では――。
緋毛氈を延べた上に、唐紙をひろげ、いま、墨絵の稽古がはじめられようとしていた。
老いたる宮司が、しずかに見成る前で、斎の宮は、不破伝次郎をあいてに、閑雅なひとときをすごそうとしている。

それにしても、兵法者、不破伝次郎に、こうした余技があるとは、意外だった。彼は、浪人長屋にいる時は、ただの一度も、画筆を把ったことはなかった。

この神社にやって来てから、思い出したように、唐紙をひろげたのであった。

持参した画帖をかたわらにして、それを写そうとしているところを、宮司に見られたのである。

宮司は、その筆あとを一瞥して、ふかい感動をおぼえた。兵法者の余技とは到底思われぬ、みごとな風格があった。描かれた竹の図には、清風が、ふと吹き過ぎて行く爽かな趣きがあった。

ほめられて、伝次郎は、恐縮した。

「山中屏居のつれづれに、亡師が画きのこしたものを真似たにすぎず、四君子のほかは、何も描けませぬ」

四君子とは、南画の初階で習う、蘭・竹・梅・菊のことである。この四君子の画法の中に、南画の精神と、その描法の真髄がこめられている、という。

国学に造詣の深い宮司が、南画に趣味をもっていたのは当然であったし、観る目は鋭かった。

宮司は、伝次郎から示された、その手本である画帖を受けとって、思わず、驚嘆の声をあげた。

「これは」

瞠目して、伝次郎を瞶めると、

「芳賀一心斎殿が、これを描かれたと申されるか？」

「左様です」

「さても……おそろしいまでに冴えた筆致でござる！」

伝次郎は、そう称讃されると、目を伏せた。

宮司の目のたしかさもさることを乍ら、恩師の偉さが、あらためて、思われた。

画帖は、四君子が四枚ずつ描かれて、十六枚から成っていたが、実は、これこそ、芳賀一心斎が、その剣の極意を伝える秘巻だったのである。

一心斎の剣は、正・中・破・急の四つにわかれ、その各々が、陰・陽・虚・実に四変するのであった。この極意を、画帖にして、愛弟子にのこしたのは、たとえ盗まれても、他流の者にわからぬようにするためばかりではなかった。一心斎の剣は、技よりも心を重しとする精神主義であり、人体を描いてその構えを現すよりも、南画の描法による方が、よりよく、その心を伝え得るからであったろう。

一心斎は、愛弟子に教えていた。

「剣の秘訣する要素に、十と卍と円がある。これを、天地人の法形とする。教仏の根本教義である法・報・応であろうか。きわまるところは、この三要素が、結んでは解け、また解け

ては結び、くりかえしくりかえし、流通円転して、終始するところなく、循環変動常なく、あたかも環の端がないように、無常に似て無常にあらず、始めも終りない——一切皆空本来無一物と唱える仏の真法身こそ、剣の極意といえる。虚空にも似て、物に応じ、形を現すこと、水中の月の如し、と申すが、まさにそれである。……心が円いように、剣もまた円くなければならぬ」

そして、一心斎が、立って示した型こそ、まさにその「円剣」であった。

空間を截る剣尖の曲線は、循環変動常なく、流通円転して、とどまるところがなかった。樟媛神社の舞楽に、一心斎は、この剣の意を、組んで、具現してみせたのであった。

もとより——。

剣のことは何も知らぬ宮司は、この画帖の秘密は、察すべくもなかったが、しかし、四君子にこめられた気魄に打たれずにはいなかったのである。

宮司は、そこで、斎の宮のつれづれをなぐさめるために、南画の席を設けたのであった。

……斎の宮の筆は、教えられるままに、素直であった。ためらいも、うたがいももたぬ純真さが、そのまま、四君子に映された。

不破伝次郎は、生まれてはじめて、ほのぼのとした幸福な時間をもった。

三

宮司が所用で中座してから、二人きりの、ややぎこちない沈黙の時が、しばし、つづいた。

何か云わねばならぬと、伝次郎が、膝へ落していた目を挙げた時、宮は、まっすぐに、伝次郎を瞶めていた。

眩しさに、伝次郎が、あわてて、視線をそらそうとすると、宮は、とらえてはなさなかった。

「そなたに、うかがいたいことがあります」

「は——？」

「そなた、恋をしたことがおありですか？」

「……」

思いがけない質問に、若い兵法者は、とどまった。

「い、いえ、いまだ、女人を恋したおぼえはありませぬが……」

「でも、恋をする者の心は、そなたならば、おわかりであろうと思いまする」

伝次郎は、すこし間を置いてから、しずかに、こたえた。

「恋が、死を怖れぬ心をつくるならば、兵法者と雖も、一度は、それを知りたく存じます」

こんどは、伝次郎はためらわずに、宮を正視した。

宮も、はじらわずに、見かえしていたが、つと立って床の間のわきの黒棚の上から、鏡筥をとりおろした。

青銅の鏡をとり出して、横へ置き、錦の下敷きをめくった。とたん、宮の口から、魂消る叫びがほとばしった。

「あっ！　四郎どのの絵すがたがない！　なくなっている！」

その叫びの消えぬうちに、廊下とを仕切る板戸が、二寸あまり、そろりと、開いた。

その気配に、屹となって、振り返った伝次郎は、一本の腕が、油紙で包んだものを、そおっと、さし入れるのをみとめた。

「何者ぞ？」

誰何に応えて、対手は、

「絵すがたを、お返し申す」

おちついた声音で言って、板戸を、すっと閉めた。

――先夜の曲者か？

伝次郎は、敢えて起たなかった。追って、とらえられる曲者ではなかった。

伝次郎は、その品を、宮へ渡した。

宮は、披いて、生命よりも大切な美少年の肖像が、もどって来たのを知ると、

「……ああ！」

伝次郎がそばにいるのも忘れて、歓喜の表情とともに、熱いためいきをついた。そして、それなり、食い入るように、肖像から、目をはなさなかった。

その様子を見戍って、伝次郎は、急に全身から力が抜けおちるのをおぼえた。

赤猿佐助は、再び、博労町の旅籠の二階へ、ひょっこり現れた。

「影」は、退屈しのぎに、畳の藺茎を一本ぬきとって、むらがる蠅を、打ち落していた。

狙われた蠅は、確実に、一撃で打ち落され、「影」のまわりには、すでに、十数ひきも、ころがっていた。

小猿が、それを、つまみとって、窓のそとへ、すてていたが、主人の打ち落すのが早いので、すてきれぬていとみえた。

「影殿」

佐助は、自分が坐っても、なお、蠅をころすのを止めぬ若い忍者に、言った。

「お預り申した品は、たしかに、お返しつかまつったが……、あの斎の宮は、あまりにも、美しゅうござる」

「……」

「あれは、人の女房になる女人ではござらぬ。斎の宮として、生涯をすごされるために、生れついておいでだ、と見申した。おあきらめなされい」

「影」は、ふんと、嗤った。

そして、急に、目にもとまらぬ迅さで藺茎を、ふりまわした。七八ぴきもの蠅が、一時に、畳に落ちた。

白円陣

一

――このおれとしたことが……。

おのれ自身をさげすみ乍ら、「影」は、今宵もまた、樟媛神社の境内に、忍び入った。

これで、五度びをかぞえる。

斎の宮の美貌の噂をきき、いずれは、将軍家の寵妾にされる身ならば、容赦はせぬ、と噂をきいたその夜のうちに、襲った「影」であったが、白羽二重の寝召をまとうた宮を、一瞥した刹那、生れてはじめて、烈しい動悸をおぼえ、そのまま、動けなくなったのである。

これまで襲うた大名の夫人や女のうち、宮に比べ得る美貌の持主がいなかったわけではない。しかし、そのけだかさにおいて、宮は、まさに、卓絶していた。すくなくとも、「影」の眸には、そう映った。

のみならず――。

前髪立ちの美少年の肖像を見入る宮の表情は、深夜の孤独のうちにあり乍らも、なお含羞の色を刷きつつ、一途な慕性をこめて、たとえようもなく優雅であった。「影」が、とっさに、鏡の中に、その美少年の貌を真似てみせたのは、恋慕のいじらしさに、ふとほだされたからであったろうか。

爾来――。

宮の俤は、「影」の脳裡から、はなれなくなり、すこしずつ、「影」の心を、人間らしいものへひき寄せて来ていたのである。

二度と、そのすがたを見まいと、おのれに言いきかせて、盗んだ絵すがたも、赤猿佐助に返させたのであったが……。

目覚めた本能は、忍者の戒律も、佐助の忠告も、はねのける強烈な力をもっていた。

非情の忍者が、生れてはじめて、女性に対して寛大な態度をしめし、そして、そのことが、大層あと味のいい想いをのこすという経験は、すでに、「影」の内部にあって、ある意味の崩壊が起ったという証拠であった。

ありふれたたとえであるが、美しい花を手折る冷酷さのみを備えていた者が、ふと、そのかぐわしい匂いをかいだ時、はじめて、美しさに感動したのである。

「影」は、宮が恋する美少年の影になることに、ふしぎな満足感をおぼえたのであった。

いまは亡い「母影」が、わが子に教えたのは、女心のとらえかたではなく、女体の犯しかたであった。それによって、若い逞しい筋骨の中に鬱積した慾情を、消散させることだけであった。その目的以外には、忍者は女性を必要としない、と教えたのであった。

「影」は、母の教えを守ることに、忠実であった。

いかなる女性も、おのが慾情を消散させるための生贄でしかなかった。だからこそ、つぎつぎと忍び入った大名屋敷において、「影」は、犯しかたに趣向をこらす残虐を敢えてしたのである。

いわば、宮に出会うたことは、非情の忍者の内に、決定的なひとつの良心を生ましめた、といえる。

あれから、五度びここへ来て、宮の寝所へ忍び入ることに成功したのは、ただの一度であった。宮の護衛に任じた若い兵法者の鍛えた神経にふれぬようにするのは、「影」の秘術をもってしても、非常な難事であった。

「影」は、ようやく、寝所へ忍び入るや、夢見の術で、宮を美少年に会わせた。夢見る宮の寝顔の美しさに、「影」もまた、恍惚となり、指一本ふれることなく、そのまま、そっと、立ち去ったものであった。

「影」は、もう一度、宮の寝顔が、見とどけたかった。おのれが、全くの迂愚と化したと知りつつも、「影」は自制の力をうしなってしまっていた。

樟の巨樹へ、音もなく、猿のようにかけのぼり、その高処から、一躍して、拝殿の屋根へ

飛び移り、さらに、舞殿の屋根に、わが身を置いた「影」は、宮の寝所のある建物の庭前で、あかあかと、篝火が焚かれているのを見た。

その明りの中に、若い兵法者の姿が、浮きあがっている。

「影」は、距離を五間とはかるや、

——平蜘蛛の術が使えるな。

と、おのれに頷いた。

しばらくは、甍と化して、上棟の陰に身を伏せていて、突如、五体を宙に踊らせる刹那、数条の鳥黐縄を、投網のように投げひろげて、敵の四肢をからめ捕る——その計画であった。

二

不破伝次郎は、いまだ、「影」が舞殿の屋根に忍んだことに、気がつかなかった。

篝火を焚いて、深更のひとときをすごすことにしたのは、昨夜からであった。

宮から、ゆうべ夢の中で、恋する人に会うた、とうれしげに告げられた伝次郎は、その夢の見かたを糺して、慄然となったのである。尋常の夢見ではなかった。

あれほど油断なく、睡りの中にも、神経を冴えさせていたにも拘らず、またもや、寝所へ、曲者を忍ばせてしまったのである。

伝次郎は、これから、当分のあいだ、庭前を、照すことにしたのである。

……伝次郎は、心気をしずめて、待っている。

と——。

彼方の築山のふもとの石燈籠の陰から、黒い生きものが、ひょこりと現れるのを、伝次郎は、みとめた。

先夜、伝次郎は、曲者を、そこに追い詰めた時、代りにいっぴきの小猿が躍り出るのを見て、無念のほぞをかんだものであった。

——今夜は、犬か！

伝次郎は、ひょこひょこと、こちらへ近づいて来る狗影を見戍り乍ら、苦笑した。

それは、もとより伝次郎の知るところではなかったが、兵藤貢のあとを尾けまわしていた黒犬にまぎれもない。すなわち、湊屋がやとっている女忍者〝闇〟の手馴らした尾行犬であった。

舞殿の屋根上においても、この黒犬の出現は、訝られた。

——あの女が、なんの目的で、ここへ来たのか？

「影」は、先夜、その女忍者を、南蛮館の壺庭の老樹の上で、襲って、からだをもてあそび、乳房と乳房のあいだに、文字絵を描くと、兵藤貢にむかって、投げおろしている。

女だてらに、忍者となって、強慾な堺商人にやとわれていることが、許せなかったのである。女忍者は、おのが母を最後として、この世に、一人も存在してもらいたくはなかった。

偶然にも、おのれが忍んでいるところで、性懲りも無く、忍びの術を使おうとする女に、「影」は、烈しい憤りをおぼえた。

——こんどこそ、容赦はせぬ！

「影」は、思わず、浮身の姿勢となった。

瞬間——伝次郎は、眸子を擡げて、舞殿の屋根を視た。

——いるぞ、彼処に！

黒犬は、その囮と、判断した。

「影」は、しまった、とおのが軽率を悔いた。対手に発見された以上、微動だに出来ぬこととなった。

この隙を、女忍者〝闇〟の方が、見遁す筈はない。自身の立場を有利なものにして、はたして、何をなそうとするのか？

「影」は、焦躁した。

その時であった。神域の砂利を踏む跫音が、ゆっくりと、拝殿の方から、近づいて来たのは——。

三

不破伝次郎は、拝殿のわきに立った兵藤貢を見出したとたん、なぜか、当然来るべき敵が

現れたような気がした。

貢は、篝火の焔を、顔面に映す距離まで、近づいて来ると、

「謀定まりて、後に戦う、と申すが、もはや、それも面倒になり、出向き申した」

と、言った。

「ここは、仁に福する神を敬うところ。果し合いの場所ではござるまい」

伝次郎は、しずかな声音で、こたえた。

「ははは……神は人の敬うに依って威を増すそうなが、あいにく、それがしは、神など一向に信じて居り申さぬ」

貢は、うそぶいた。

「太鼓も撥の当り工合、と申す。お主が、神域を血でけがすおそれを抱いて居るならば、罰を蒙る感応の有る無しによって、これは、当方が有利と相成る。是が非でも、闘わんかな！」

貢は、わずかに腰を引くや、目にもとまらぬ迅さで、一刀を鞘走らせた。

刹那——。

「外道っ！」

伝次郎の口から、その一喝が迸った。同時に、その手に、白刃があった。

伝次郎は、常に、師一心斎から、剣の修業上、戒めをされていた。

「毫釐も差あれば、天地懸かに隔る」

という三祖大師の遺訓が、一心斎の口ぐせであった。

同じ剣を学ぶにあたって、その心がほんのわずかに逸れても、殺人剣に誤る。

兵法者は、絶えず、我を知り、己れに克ち、一心剣一身刀の守行を閑却してはならぬ。我執、暴慢、殺伐、残忍の悪意をしりぞけてこそ、流派の如何を問わず、剣の極意たる水に法る兵形を、おのれのものにし得る。伝次郎は、いまこそ、この神域において、対手の倨傲の速剣を、業理を一致させた真正の剣で破らねばならぬ、と思った。

……兵藤貢の不敵な浮き沈みの下段に対して、伝次郎は、すうっと、八双に構えた。

舞殿の屋根上の「影」は、もはや、その決闘から、目が離せなかった。何処かへ忍んだ〝闇〟を追うて、捕えることは、一時、すてなければならなかった。

この決闘を、ただの兵法試合ではない、と見てとったからである。

兵藤貢は、釣人が竿をゆるやかに上下させるあんばいに、地上三寸あまりの宙で、刀身を、浮きつ沈みつさせている。そのたびに、白刃は、焔の色を反射して、眩しく煌いた。

伝次郎は、化石したごとく、不動の姿勢を据えたままであった。

突如――。

貢が、地を蹴って、斜横に、空中を跳びつつ、波濤のかたちに、白い閃光を描いた。これは、攻撃ではなく、受けの型であった。

すなわち――。

伝次郎が八双の構えは、師一心斎が編んだ秘伝天狗撃ちの予告であった。

八双の構えから、一瞬、対手の両足を薙ぎ払い、えたりと跳びのがれるところを、つばめ返しに、脇下を斬りあげる――これを天狗撃ち、という。

この迅業の予告に対して、貢は、汐合のきわまるのを待たずに、跳び上って、脇下へ来るであろう一颯の刃風をかわしてみせたのである。

これは、いかにも、貢の独り芝居のように見受けられた。しかし、心理作戦としては、見事であった。伝次郎をして、つと、構えを変えさせたからである。

伝次郎は、目にもとまらぬ迅さで、八双から、おのが顔面前に、白刃を直立させた。貢の双眸から、伝次郎の貌は、白刃の陰に消えた。

「木ノ間隠れか！」

貢は、叫ぶと、一間を跳び退った。

木ノ間隠れは、刀身を顔面前に直立させることで、間合を放棄する。

こちらが間合を放棄することは、当然、敵にも、間合を無用とさせる。なぜならば、もはや、間合を放棄した以上、静止は、ゆるされず、前進あるのみであり、一気に、敵の面をとるほかはないからであった。これを、逃すには、烈しい突きを入れつつ、後退する。そして、あらたな間合を生んでおいて、一刹那をえらんで、その胴を両断する。

……伝次郎は、砂利上を滑るように、進む。貢の方は、矢のように、切尖を突き出しつつ、退く。凡庸の目で視れば、それは、剣技の型が示されているにすぎない光景であったろう。心得ある者によって視られるならば、両者は、この動きに、総身いっさいの力をこめているのであった。

伝次郎も貢も、舞殿の屋根から、ひとすじの白い雨が降るのに、気がつかなかった。それは、対峙する両者のちょうど、まうえで、ぱっと、八方に散った。

「むっ！」

「おっ！」

同時に、両者の口から、ひくい唸り声が迸った。八方に散った白い雨は、鮮かに、両者を睨み合せておいて、そのまわりに、美しい円を描いたのである。

それは、ただの粉ではなかった。砂利に落ちるとともに、白銀の光を発して、ゆらゆらと、かげろうのような薄烟をゆらめき昇らせた。

伝次郎の前進も、貢の後退も、円の中で、ぴたりと停められた。

「南無三！」

貢は、呻くように、呟いた。

禅書に、

「大力量底の人、甚によってか、足下の紅線を断たざる」

という公案がある。

むつかしい論は別として、「大力の人ともあろう者が、なぜ足もとの紅い絹糸が、切れないのか？」という問題である。これは、かぼそい一本の絹糸でも、それが足もとに張られてしまうと、心がこだわって、身の動きに不自由をおぼえる、という意味であろうか。

げんに――。

力量手腕ともに伯仲の間にある伝次郎と貢の、真剣の立合いに、その周辺に、白い線が引かれてみると、決闘の場は、円内に限られてしまうのだ。これを後退して、ふみこす一瞬、貢の胸中が、わずか乍らも乱れるのは、必定である。

伝次郎の方としても、貢を追い詰めて、敢えて、白線をふみこえさせることに、卑怯を知る。

両者は、白い円内に、「高波」の型を示したまま、微動だに出来なくなった。

心身の消耗は、その速度をくわえた。

「影」は、その隙に、奔って、寝所へ、とび込んでいた。一足おそかった。

「しまった！」

床の間わきの黒棚の上から、鏡筥が、消えうせているのを知った。女忍者が、それを盗み去ったのである。

——湊屋め、あの絵すがたを盗んで、なんとしようというのか？

「影」は、なにごとが起っているのかも知らずに、すやすやと眠っている宮の美しい寝顔を見下し乍ら、絵すがたを失ったと知った時の悲嘆ぶりを思いやった。

庭上においては——。

貢が、さきに、刀を引いていた。

「今夜の勝負は、それがしの負けとみとめる。但し、一言の弁疏をゆるされい。……今夜は、それがしは、それがし一個の決意をもって、貴公と雌雄を決すべく、参上したのではない。湊屋久右衛門なる堺の商人にたのまれて、斎の宮が所持される古鏡を奪いに参った。すでに、それは、それがしの連れが、盗み去ったに相違ない。……待たれい！　それがしが敗れたとみとめたからには、必ず、古鏡は、お手許にお返しつかまつる。八幡、誓って違約はいたさぬ。……許されい！」

踏　絵

一

この日、斎の宮が、清雅な模様の袿衣をまとい、被衣をかざして、神社を出る時、苑内の池畔に、ひとむれの菖蒲が、楚々たる黄緑の花びらをひらいて、微風にゆれていた。剣葉の芳香が、匂うようであった。

べつに、なんの不吉な予感もなく、心しずかな朝だったのである。

上覧の舞楽の下見をいたしたいから、大目附井上筑後守の邸第へ御来駕ありたい、という使者が来たのは、昨日のことであった。

但し、井上筑後守は、外船と宗門撿断の事に従うため、目下長崎に到って留守中であるから、代って、将軍家師範役・柳生飛騨守宗冬が、下見の役に任ずる、ということであった。

但馬守宗矩は、すでに隠居して、柳生道場の主は、その次子宗冬となっていたのである。

柳生宗冬が、井上筑後守の代理をつとめるのに、ふしぎはなかった。柳生家は、水野河内

守、秋山修理亮、井上筑後守とともに、目附役の資格をもっていたからである。

そしてまた、上覧舞楽の下見役は、柳生家のつとめでもあったのである。

というのも——。

嘗て、家光が、将軍家を継いで間もなくの頃、某日、殿中で、能楽の催しがあった。家光は、侍座の但馬守宗矩をかえりみて、

「今日の観世左近の所作をよく注意して観ていよ。もし、隙があって、ここぞ斬りつけるべきところと、心得たら、あとで、申せ」

と、言った。

但馬守は、畏って、目を逖さずに、視守っていた。能が畢って、家光は、「どうじゃ？」と尋ねた。

但馬守は、

「はじめより、心をつけ候に、寸分の隙は見えず、ただ、大臣柱の方に隅をとりし際、いささか、撃つべき隙があり、あのところを斬らば、斬るべきか、と存じました」

と、こたえた。

一方、観世左近は、楽屋入りしてから、「今日、上様の近間に坐って、わが所作を、鋭く見入っていた御仁は、誰であろうか？」と、傍人に訊ねた。

それが、柳生但馬守であった、ときかされると、左近は、道理こそ、と大きく頷いた。

「自分が、舞の内に、隅をとったところで、わずかに気をぬいた時、にこと笑われたが、流石は剣の達人かな！」

この逸話によって、爾来、上覧の能楽舞楽の下見は、但馬守がつとめるようになり、宗矩隠居によって、当然、二代宗冬がこれをなすことになったのである。

神社の外には、迎えの乗物が待っていた。宮が、それに身を置くと、不破伝次郎が今日だけは、侍従の資格で、しじら熨斗目に威儀を正して、その横につき添うた。

井上筑後守の上屋敷は、四谷喰違い木戸門内に在った。

到着すると、斎の宮は、大式台からまっすぐに奥ふかくみちびかれて行き、不破伝次郎は、遠侍の板敷きの間に据えられた。差料は、脇差とともに、玄関わきに預けさせられた。

しずかに正座して、羅漢柏のみを植え込んだ閑雅な内庭を、無心に眺めやっているうちに、伝次郎は、ふと、その羅漢柏の一樹の梢に、ちらと動く生きものをみとめて、眉宇をひそめた。

それは、まぎれもなく、いっぴきの小猿であった。

——はてな？

それが、先夜、宮の寝所を襲った曲者のつれていた猿かどうか、見わけることはできぬが、にわかに、伝次郎の胸中は、さわいだ。

二

斎の宮は、控えの間で、単、打衣、五衣、表衣、唐衣をまとい、緋袴をはき、武礼冠をいただき、宝剣を携えた。

そして、しずしずと、長廊下を進んで、能舞台へ向った。

楽士たちは、すでに、舞台の囃子座に就いていた。

幕があげられた。宮が鏡の間から、一歩、橋懸へ、すべり出ようとした時、

「あいや！」

武者窓わきから、声がかかった。

宮は、もとより見知らぬ武士であったが、これは、湊屋久右衛門が、籠絡するのに最も難物とした公儀目附中随一の利けもの大平修理であった。

「まことに、ご無礼乍ら、その宝剣を、改めさせて頂き度う存じます」

大平修理は、そう申出た。

宮としては、すでに舞台へ通ろうと、心気を冴えさせた瞬間、これを阻止されるのは、苦痛であった。しかし、上覧のための下見とあればやむを得なかった。

宝剣は、大平修理の手に渡され、さらに、仕手柱ぎわにいる柳生飛驒守宗冬へ、渡された。

そうしておいて、大平修理は、ゆっくりと、橋懸をひきかえし来ると、三ノ松あたりのところへ、懐中からとり出した一枚の四角な板を置いた。なんのためであろうか、といぶかる宮へ、大平修理は、鄭重な態度で、言いかけた。

「お願い申上げたき仕儀ひとつ。貴い上臈に対し、はなはだ失礼と存じまするが、将軍家におんまみえになるお方には、その身分を問わず、行われなければならない掟にございます。これなるは、伴天連門徒禁絶のために作られたる踏絵にて、もとより、斎の宮であらせられる貴女様には、造作もなきこと、ひと足かけて頂き度う存じます」

「……」

宮は、ほんのわずかではあるが、不快の色を、美しいおもてに掠めさせた。あまりに唐突な、ばからしい要求であったからである。

これは、かなたにいる柳生宗冬にとっても、甚だ意外な思いをさせられたことだった。

これまで、上覧舞楽を演ずる者に、踏絵などさせたためしはなかったのである。どうして、大平修理が、突然、あいてもあろうに、斎の宮をえらんで、踏絵をさせようというのか、解しかねた。

そもそも、踏絵は、寛永五年、長崎奉行水野河内守守信が、いかにきびしく取締っても、かくれ切支丹があとを絶たぬので、一策を案じ、基督の画像を作って、一般庶民に踏ましめ、以て転びの信否を検したのである。後に、江戸切支丹屋敷でも、これを行うようになり、旗本でも、嫌疑をかけると、それを要求することはあるが、常識としては、庶民にとどめて、

士人に及ばぬ制であった。

また――。

宗門改めは、大目附と作事奉行の両職の兼掌であった。目附である大平修理が、これを行う権利はなかった。あきらかに越権行為であった。

柳生宗冬が、啞然としたのは、当然であった。しかし、宗冬は、厳父ゆずりで、剣技もさること乍ら、政治的感覚にも秀でていた。目附中でも、一種の黒幕的な隠然たる存在である大平修理が、前例もなく、おのが権利にもないことを行おうとするのは、斎の宮に嫌疑をかけるに充分な証拠を摑んだからに相違ない。

舞楽の下見という口実で、斎の宮を、当邸へ呼び寄せ、まことは、この踏絵がさせたかったのである。宗冬は、自分が証人にされたのだ、とさとった。

身に露ほどの覚えもない嫌疑をかけられて、斎の宮は、その憤りを、大平修理に対するさげすみに代えて、鎮めようとした。そして、邪宗門の踏絵であれば、足にかけても、身のけがれにはなるまい、とじぶんに言いきかせた。

しずしずと、滑るようにすすみ出て、木版の板の前に立った。

瞬間――大平修理の面上に、皮肉な微笑が泛べられた。

柳生宗冬は、宮が、その白足袋のさきを、ふれようとして、何気なく、木版へ、目を落した刹那、あっと、驚愕するのを見てとった。その美しいおもてから、みるみる、血の色が引いた。

佳人は、あまりの大きな衝撃で、眩暈にでもおそわれたように、よろめいて、辛じて、倒れるのをふみとどまった。

――かくれ信徒であるならば、踏絵をとり出された時、蒼ざめるであろうが……。

宗冬は、大きな疑惑を抱いた。

と――。

その時、宗冬は、別の鋭い神経を働かせて、ふっと、舞台の格天井へ、視線を向けた。天井裏に、何者かが、ひそんでいるような気がしたのである。気配らしい気配を察知したわけではなかったが、一流兵法者の、いわば霊感的な、本能ともいえる神経の冴えであった。

三

一方――。

控えの間に、黙然として坐した不破伝次郎は、襖をへだてた周囲に、すくなからぬ人数が、おのれをとりまいている気配をさとっていた。二十名以上がひそんでいるようであった。音をしのばせて、二人、三人と、しだいに、数を増して来たのである。

なぜ、包囲されるのか、理由は全く不明であった。ただ、伝次郎に、はっきりと判るのは、

宮に危難が迫ったということであった。しかし、宮を救い立とうにも、無腰の身で、こうまで、ひしひしと、四方から迫られては、いかなる手段があろう。

——宮のおんいのちに別状がなければ、後刻、お救いする可能を思おう。

いまは、おのが身を、どうやって脱出させるか——それに、心を専らにすべきであった。

と——。

天井の隙間から、小さな紙片が、ひらひらと、花びらが舞い込むように、伝次郎の膝の前へ、落ちて来た。

「……？」

つまみあげてみると、一行の文字が記してあった。

床柱に、耳をつけよ。

伝次郎は、ゆっくりと、席を移すと、床柱に、背を凭りかけた。

目蓋をとじて、耳をすませた。微かな、しかし、はっきりとした声音が、天井から、柱をつたって、降りて来た。

「それがしは、赤猿佐助と申す、故真田左衛門佐幸村が老党でござる。先夜、樟媛神社へ、陰陽師の少年の絵すがたを、お返しに参上した者とお心得下されい。鏡宮より、持ち去ったのは、それがしの主人にあたる御仁のしわざにて、ほんの出来心にすぎ申さず、他意はござらぬ。決していつわりは申さぬ。……ところで、宮は、いまだ、お気づきでござらぬが、お

手前が、兵藤貢なる兵法者と果し合いをなされている隙に、あの絵すがたは、再び、別の者によって、鏡宮の中より盗まれ申した。いや、お手前は、すでにご存じでござろう。湊屋久右衛門なる堺の商人めが、たくらんで、兵藤貢ともう一人を使ってのしわざでござった。……湊屋は、あの絵すがたを、そのまま、写して、木版にいたした。すなわち、邪宗門を取締る踏絵に——」

伝次郎は、愕然として、かっと、双眸を瞠いた。

「様子を変えられるな。そのままに、そのままに——」

天井裏の佐助は、忠告しておいて、話をつづけた。

「ただいま、それがしは、能舞台の天井裏に忍んで、見とどけて参りました。目附役大平修理なる人物が、宮に、踏絵を要求いたしまして、橋懸に、その木版を置き申した。それでござった、湊屋が作った踏絵は——。切支丹宗徒が仰ぐぜずす・きりすとやらの貌は、あの絵すがたの陰陽師の少年をそっくり写して居り申した。……宮におかせられては、もとより、踏絵など造作もなきこと、踏もうとなされて、動転なされたのは、ごむりもない。いのちをかけて思慕なされる人の貌が、足もとにあったのでござる。宮は、血の気を失って、立ちすくんでしまわれ申した。宮の純情では、とうてい、絵すがたを、足にかけることは、でき申さぬ。……このおそるべき陰謀にかかってしまっては、切支丹の嫌疑からまぬがれようはござらぬ。宮の自由は、うばわれ申した。是非なき仕儀でござる」

伝次郎は、総身の血汐が逆流するような激怒をおぼえた。

これで事態は明白になったが、この危難に対して、どう処置すべきか、咄嗟に、判断がつかなかった。

ただ、事態が明白になった以上、こうして、黙座して、敵の罠にかかるにまかせているのは、死よりも苦痛だった。

伝次郎は、ふたたび、かっと、双眸をむいた。

それを視下した佐助は、間髪を入れず、

「動かれるな！」

と、制した。

「舞台には、柳生飛騨守が、ひかえて居り申す。ここで、お手前が、騒がれると、犬死と相成ろう。……宮は、自由こそうばわれ申すが、お生命に別状はござるまい。後日、宮を救い出すのは、お手前の役目でござろう。ここは、ひとまず、脱出なされるが上策。……行先は、博労町の上州屋なる旅籠。庭の柏の梢にとまって居る小猿が、案内役をつとめ申す。そこに、それがしの主人が、滞在つかまつる。影、と称す、と申上げれば、お手前も、すでに、ご存じの筈。非情の御仁なれど、宮にかかわることなれば、必ず、お手前のたのみをきき入れるに相違ござらぬ。すでに、二度までも、宮の寝所に忍び入り乍らも、犯さずに、しりぞき申した。これは、非情の忍者のからだにも、あたたかい血が流れている証拠でござる。影とし

ては、生れてはじめてのなさけでござろう。……ところで、ここを脱出するのは、造作もない。やがて、襲撃の時が参るが、お手前は、羽織を脱いで、そこへ置きすてて、隅の衝立の陰に入って居られるがよい」

伝次郎は、承知の意を、わずかな身じろぎで示した。

その控えの間から、ほど遠からぬ部屋に、湊屋久右衛門と兵藤貢が、詰めていた。

「どれ――やるか！」

貢が、のそりと立ち上ると、湊屋は、皮肉な眼眸を送って、

「無手の対手をお斬りなさるのだから、こんどは、万が一にも、仕損じはございますまい」

と言った。

「さあ、どうであろうかな」

貢は部屋を出ると、控えの間から行く前に、玄関へ出て、そこの刀架けから、不破伝次郎の差料を把って、ひきかえした。

貢は、わざと、内庭へ降りて、まわって行った。

床の間にむかって正座している後姿を見て、

――この危急の際に、みごとに、おちつきはらって居る。

貢は、感服しつつ、差料を投げた。

差料は、把って立つべき、左わきの位置に、ぴたりと止まった。にも拘らず、その後姿は、

微動もしなかった。

貢は、急に、憤りにかられた。

「参る！」

沓石からとびあがりざま、畳をツツ……ツと滑って、その後姿へ、一颯、送った。

その刃風にあふられたように、横へ飛んで、むきなおり、にやりとしたのは、伝次郎の若々しい風貌ではなく、赤猿佐助の皺面であった。

殉教

一

将軍家光が、その三代を継いだ元和九年夏以来、切支丹信徒が謂うところの殉教は、信徒が根絶するまでつづけられることになって居り、すでに、千余名が、磔柱上に息絶えていた。

にも拘らず、かくれ切支丹の数は、江戸市中にあっても、いまだ、すくなくはなかった。

元和九年十月に、フランシスコ・ガルヴェス神父、エロニモ・デ・アンゼリュス師ら伴天連をはじめ、曾ては徳川家康の小姓として千五百石の旗本たりし原主水を頭領とする平信者五十名が、札の辻の刑場で、焚殺されたのをきっかけにして、迫害は年毎に熾烈となり、打首、火刑はもとより、鋸挽き、水責め、餓死など、あらゆる残忍冷酷な処刑手段がとられたにも拘らず、信徒の殉教熱は、かえってつのるばかりであった。

公儀は、庶民へのみせしめのために、さらに、あらたな処刑方法を、考えなければならな

かった。去年は——。

鈴ケ森の浜で、海中に磔柱を立てて、七十名の信徒を、さかさ吊りにした。上潮の時には、水が口中に侵入し、顔は、血の逆行と塩水に洗われる苦痛で、無惨にひき歪み、正視に堪えなかった、という。

そして、今年は——。

刑場は、品川の浜辺に移され、三日間にわたって、切支丹牢屋敷に監禁する囚徒百六十余名を、ことごとく、火炙りにすることになった。

伴天連は、西班牙人のペドロ・デ・ガルシャという遣外管区長代理が一人いた。あとは、ことごとく、日本人で、士分は小旗本が二人、足軽七人、他は大工、桶屋、矢師、研師、絹織職など、市井の匹夫であった。婦女子は二十余人、十五歳以下の少年少女が、八人加えられていた。

門地分限の上からは、全く問題にならぬ人々が、よろこんで、死に就こうとして、刑場へ向って、足をはこんで行く——。

先頭には、ただ一人、駄馬に乗せられた伴天連ペドロ・デ・ガルシャ神父が、罪状と名を記した小旗をせおわされていた。日本人信徒は、徒歩で、長蛇の列をつくった。

夜明け前に、切支丹牢屋敷からひき出されて、庚申坂を下り、お茶の水から、小伝馬町の牢屋敷へつれて行かれて、牢奉行から、処刑申渡しを受けて、最も人出の多い朝の時刻、日

本橋を渡るように、とりはからわれたのである。

「影」は、日本橋の高札場わきに、小猿を肩にとまらせて、彳んでいた。

どういうものであったろう、この行列を見物しようとする群衆は、意外に、すくなかった。伴天連は、魔法をつかって、悪魔を招き寄せる、とまことしやかな流説が信じられていて、庶民は、それを怖れたのであろうか。それとも、信徒が、隣人としては、この上もない善良な人々であることを知っていて、視るに堪えないためであったろうか。

先頭の駄馬上の伴天連は、天に向って顔を擡げ、絶えず、小さく、祈禱をとなえつづけていた。

「影」は、まず、眩しい陽光にさらされたその貌の、澄んだ美しさをみとめて、ふと、とまどった。

ついで、そのあとにつづく囚徒たちの貌を、つぎつぎと見送っているうちに、どうにも解しがたい疑念をおぼえずには、いられなかった。

孰れも、なんの鍛えも示して居らぬ貧しげな面相であった。なんとなく生れ、なんとなく育って、それぞれの職に、つつましく就いて来た者ばかりであった。

にも拘らず、火炙りの極刑に処せられるために曳かれて行き乍ら、それらの顔は、ひとしく、穏かであった。苦悩や恐怖の翳は、まったく、さしていなかった。

眼眸には、あかるい光があり、五体は永い月日の地下牢ぐらしでおとろえているにも拘ら

ず、足どりは、しっかりしていた。

邪宗門の歌を、ひくく斉唱していたが、その声音も、みだれてはいなかった。

——これは、どういうのだ？

死を怖れぬこのおちつきを、信仰によって得たのか？　切支丹には、死をよろこばせる魔術があるのか？

「影」には、わからなかった。

わからないで、すまされぬ、不安と焦躁が、「影」の内で、起った。

いま、かりに、おのれが、捕えられて、刑場へ曳かれて行くとする。人の目には、おちつきはらった態度を示すことは、さまで努力を要すまい。しかし、それは、忍者の凄じい修練を積んだおかげである。胸中には、火炙りという無慚な処刑に対する恐怖のたたかいがある筈であった。

この囚徒たちは、心身を、生死の瞬間に置くための修練など、一度もしたことはないであろう。にも拘らず、惨死の場所へ歩み乍ら、なんという自然な様子を保っていることだろう。

「影」は、囚徒の一人一人をつかまえて、

「そのおちつきは、どうして得たのだ？」

と訊きたかった。

徒歩の行列が切れて、数頭の駄馬に乗せられた囚徒が、しんがりであった。

「影」は、それらの囚徒を仰いだ時、

——これが、ほんものの科人のすがただ。

と、思った。

どの顔も、絶望と恐怖のために、みにくくひき歪んでしまっていた。無実のぬれぎぬで、切支丹にされてしまった者たちであった。政略の犠牲者たちであった。彼らは、舌を裂かれて、無実の罪を訴える声を奪われていた。足は、筋を断たれて、歩行不可能にされていた。踏絵を前に置かれても、これを踏むことが出来ないのであった。

——もしかすれば、斎の宮は、この贋信徒の中に加えられるかも知れぬ。

「影」は、想像しただけで、背すじを悪寒が走った。

いかなる手段をとっても、斎の宮だけは、この行列に入れてはならなかった。

二

品川の浜には、小舟が三十余艘、鎖でつないで、汀ちかく並べてあった。そして、一艘に、二本ずつ、磔柱が立ててあったが、これは逆さ吊りをするように、下部の横木は、上部の横木よりも長く作ってあった。

薪は、十字架の根かたに、積んであった。すぐに燃えあがらぬように、水でしめらせてあった。苦悶の時間をながびかせるためである。

囚徒たちは、つぎつぎに、十字架へ、逆さに、両手両足および胴を、鉄の鎖で結びつけられた。

「漕ぎ出せい」

下知とともに、鎖を鳴らし乍ら、舟は舳先を沖に向けた。

浜辺へ、三町余もめぐらされた竹矢来の外には、公儀が予想した見物人の蝟集はなかった。矢来が透けてみえる程度に、ばらばらに、立っていた。

時刻は、海面が、夕陽に染まる頃あいであった。二町あまりの沖に漕ぎ出された舟は、ふたたび、一列に並べられた。役人と船頭は、別の舟に移り、かこたちが、一艘に一人宛のこって、松明に火をつけて、かまえた。

この時、左端に、一人だけ手足を十字架へ釘で打ちつけられた伴天連ガルシャ神父が、大声で、

「おん主ぜず・きりしとのお名により……」

と、言った。

六十余名の囚徒が、これに和した。

「福なる日、福なる十字架にかかり……大いなるおん主でうすのおん恩寵をこうむりて……われらの罪科の償いのために……おん主ぜず・きりしとのご苦難に倣いたてまつり……われらの守護の天使、天堂のもろもろの聖人の許へ……みなみな、心をあわせて、御合力を願い、たてまつる……」

唱和がおわったのを、見はからって、検使が、

「火をかけい！」

と、命じた。

かこたちは、松明の焔を、薪に移した。薪には、油がそそいであったとみえて、一斉に、黒煙を噴いた。

その黒煙の中から、聖歌「て・でうむ」が起った。

「主よ、おん身の御手の中に――」

伴天連は、くりかえして、唱えた。

黒煙は、いったん、逆さの顔をおしつつんだが、汐風に吹きはらわれた。汐風は、同時に、薪の中から、紅蓮の舌を、煽り出した。

かこたちは、急いで、待ち舟へ逃げた。その時、恰度中央の舟の艫ぎわの水面へ、ひとつの首が、ぽっかりと浮き上った。

「影」であった。

舷へ手もかけず、焼けかかる逆さ顔へ、食い入るように鋭い視線を送り乍ら、

「おい、ききたいことがある」

と、声をかけた。

逆さ顔は、まだ二十歳あまりの、大工か左官の下働きらしい風貌であった。
「お前は、なぜ、怖ろしくないのだ？　どうして、悲鳴をあげぬのだ？」
火焔に、逆垂れた頭髪を焼かれ乍ら、その眸子は、澄んでいた。
「おんあるじの、お慈悲を……信じまする……」
「慈悲があれば、この拷問から、すくってもらえるではないか！」
「この、身は、焼けても……霊魂が……」
「あにまとは――？」
「たましいが……天堂へ、のぼり、まする……」
そうこたえて、若い職人は、めらめらと燃えあがって来た炎の熱さに、目蓋をとじた。
狂おしい絶叫が、左端の二艘から、ほとばしっていた。無実のぬれぎぬをきせられた囚徒たちの声であった。その絶叫のおかげで、「影」と若い職人の問答は、役人たちの舟までは、きこえていなかったが、かこの一人が、何気なく、視線をまわして、
「おや、あそこに、人間が浮いている！」
と、叫んで、指さした。検使の舟が、そこへ漕ぎ寄せられた時には、「影」の首は、水面から、消えていた。
異変は、次の瞬間から、起った。
まず、ガルシャ神父の小舟が、突如、大きく傾いたとみるや、燃えさかる薪を海面へ撒い

て、どうっと、顚覆した。
「呀っ！」
執行人たちは、あっけにとられた。
間を置かずに、次の舟も、ひとゆれするや、ひっくりかえった。
三番目の舟も、四番目も、五番目も……検使舟が、漕ぎ寄せられるいとまを与えぬ迅さで、その腹をかえしてしまった。
「飛び込め！　下手人は、水中をもぐって居るぞ」
叱咤されて、かこたちは、のこらず、身をおどらせたが……。

三

その夜、かなり更けてから、「影」は、死んだようにぐったりとなった若い女を、小わきにかかえて、博労町の旅籠の二階のわが部屋へ、窓から、戻ってきた。
すると、そこには、赤猿佐助の、うそ寒げに背中をまるめた老軀が、見られた。
「影」は、襤褸でもすてるように、女のからだを、畳へ抛り出して、胡座をかいた。憮然とした暗い面相を、佐助は、微笑し乍ら、見戍った。
「磔舟を、ぜんぶ、ひっくりかえされたの？」
「見ていたのか」

「影」は、宙を睨み乍ら、こたえた。
「少々自棄ぎみの振舞いと見申したがな」
「……」
腕を組んで、しばらく、無言でいた。
「影」は、やがて、じろりと、佐助を見やると、
「わからぬ！」
と言った。
「なにが、おわかり召さぬ？」
「焼き殺される苦痛が、みじんもないとは、どういうのだ？」
「まことにな……信心は、おそろしいものでござる」
「信心だけで、あのように、平然として居られるか！　仏法で、心頭を滅却して、火をも涼しとなすのは、禅僧快川ぐらいの名僧でなくては、叶わんぞ！　門徒も法華も禅宗も浄土も、切支丹の足もとにも、およばぬぞ！」
「信心と申すものは、われら忍者とは、全く別の世界のものでござる。気にかけられまいぞ」
「いいや！　わしは、昨日まで、仏力も業力に勝たず、と思うていた。そうではなかった」
そう吐き出したおり、畳の上の女が、微かな呻きをもらした。「影」は、とびつくように

して、ひき起こした。
「おいっ！」
激しくゆさぶられた女は、ぼんやりと目蓋をひらいて、ややしばし、焦点のあわぬ視線を、
「影」にあてていたが、突然、
「あっ！」
と、叫んで、立ち上ろうとした。
それを、ひき据えた「影」は、
「なぜだ？　なぜ、お前は、焼き殺されるのが、怕くなかったのだ？」
と、なじるように、鋭い語気で問うた。
「わたしは……、わたしだけが、すくわれて――」
女は、喘いだ。
「それでは、みなさまに、申訳ありませぬ！……わたしも、行かねば、なりませぬ」
「行かねば――？　天堂とやらへか？」
「は、はい――」
「たわけめ！」
「影」は、女をつきとばした。
女は、起きあがると、両手を合せて、一心不乱に、祈禱を誦えはじめた。

「うるさい」
「影」は、女の細い肩を鷲摑みにすると、憎悪をこめて、睨みつけつつ、
「それほど、死にたいか？」
「おんあるじぜずす様は、わたしらの死ぬことを、嘉したもうて、下さいます。……十字架の上で、死にとう、ございました」
女の双眸から、泪があふれた。
「よし！　死なせてやる。……おのれを犯し乍ら、頸を締めあげてやる！」
「影」は、いきなり、女の前を剝ぎ捲ると、白い細い下肢を、ひき裂くように、拡げさせた。
「止さぬか！」
佐助は、珍しく、怒気をふくんだ一喝をくれた。
「影」は、佐助を、睨みかえした。
一瞬——凄じい殺気がみなぎった。
だが……さきに、視線をはずしたのは、「影」の方であった。
ごろりと仰臥して、天井をじっと見上げたなり動かなくなった。佐助は、女に、出て行けと、目くばせした。
それから、かなり長い時間が移った。
佐助は、小猿をあいてに、のんびりと時間つぶしをつづけていた。

ふいに「影」が、口をひらいた。
「おれは、斎の宮に惚れた。……惚れた不覚で、自分自身が、わからなくなった！　どうしていいのか、わからなくなったのだ！」
その悲痛な独語をきくと、佐助は、それを待っていたように微笑した。
「影殿、お前様は、人間になったのでござるよ、人間に——」
のっそりと、立ち上って、
「人間になることは、辛うござる」
そうつけ加えた。

さかさ銀杏

一

宵が過ぎ、そろそろ亥の刻にさしかかった頃合であった。

南蛮屋敷の、書院露路の中の四阿では——。

卓子に、珍しい南蛮料理をならべて、湊屋と兵藤貢が、対い合っていた。

貢は、酒をたしなまず、湊屋ひとりが、ぎやまんの盃を、口にはこんでいた。

湊屋は、貢をここに呼ぶと、明後日、いよいよ品川の浜に置きすててある幕府の持船、安宅丸を、乗り出して、南の海へむかう、と打明けたのである。

安宅丸は、三十余間の巨舸で、もと北条氏の船であったが、徳川家の所有となってから、まだ一度も、遠い航海をしていなかった。自由に動かす技術者がいなかったからである。

かねて、湊屋は、この船に目をつけて、公儀から払い下げてもらうように工作していたのであったが、ようやく、成功したのである。

海外渡航禁止令が出され、これを犯した者は死罪と定められた今日、湊屋は、敢えて、堂々と、江戸表から、安宅丸を乗り出そうというのであった。

公儀を無視した振舞い、というもおろかな、まさに倭寇の末裔にふさわしい、放胆不敵ぶりであった。

「ま——申さば、海外渡航の絶対禁令のおかげで、手前ひとりが、思うさまに、儲けさせて頂く、ということになるのですな。……外国と交易してはいかぬ、という禁令が、そもそもおかしな話で、徳川様の御安泰のために、全土数千万が、広い世界から目を掩われ、耳をふさがれて、不自由な、貧しいくらしをせねばならぬとは、まことに莫迦げた仕儀と申さねばなりますまい。……一度、海の彼方に渡ってみると、その味は、とうてい忘られるものではないので——さまざまの女を観るだけでも、男冥利につきますな。髪が、陽色に煌いている者、瑠璃色の瞳をもった者、肌は白磁よりも白く艶がある者……ははは、思い出すだけでも、ぞくぞくいたしますわい」

兵藤貢を、安宅丸に乗せようと、湊屋は、常になく、熱心であった。

貢は、殆ど無言で、時おり、料理に手を出していたが、やがて、ふと思い出したように、

「お主、自分がやとう者は、決して叛かぬ自信があるようだな」

「どうして、そのようなことをお訊きなさる？」

湊屋は、貢を、瞶めかえした。

貢は、うすら笑って、
「たとえば、お主が手足として信頼している、あの女忍者の〝闇〟だが……」
「ほう――〝闇〟が、手前を裏切る、と申される。それは、貴方様が、あの女の素姓をご存じないからだ」
湊屋は、言葉遣いをぞんざいにして、語りはじめた。
「あの女の父親は、琉球の和寇であった。宮古島の上比屋山の大和人、といえば、遠く呂宋、暹羅あたりまで、きこえていた。千里の波濤をやすやすと乗りこえられるよう、宮古船の構造を改めて、大木を使い、板の接合には釘を用いず、鉄板を聯ね、罅隙を塞ぐのに、麻筋や桐油の代りに草皮を詰めたのは、この男であった。広福船と闘って、十八艘を、海底の藻屑にしてしもうた、という。……ところが、海の荒武者も、老齢と病いには、勝てず、六十の坂をこえてから、中風を患うて、片手片足の自由を喪った。たちまち、腹心に叛かれて、八艘の宮古船と二百名の配下を、奪われた。……この海賊に、息子と娘が一人ずつあったのを、偶然にも、手前が、ひろった。十三年前のことであったな」
往昔を思い泛べる面持になって、湊屋は、女中がはこんで来た酒を、盃に注いだ。
「手前は、兄を奉書船の船頭に育て、妹を、伊賀郷へ送って、女忍者にしたてあげた。兄は、気象体軀ともに、異国船に襲いかかって、あばれまわるにふさわしい偉丈夫になったし、妹も、六無の修業がみのって、みごとな忍びになり居った」

「お主は、なぜ、娘を、忍者にしたてあげる積りになったのだ？」
「ふふふ……」
湊屋は、含み笑いをもらしてから、
「裏切者どもに捕まった時、まだ十二歳の小娘であったが途方もない勝気がわざわいして、面皮を剝がれたとお思いなされ」
「面皮を――？」
「生き皮をな。……ふっふっふっ、顔を無くした娘は、また、それなりに、使いみちがあるのですわい。闇の中にひそむのを好むようになるからな。忍者にしたてるには、もっともふさわしいと申せますて」
貢は、しかし、べつだん、湊屋の狡智をあきれるでもなく、かるいあくびを、ひとつやってから、
「湊屋、お主、大層酒にはつよいな」
と、言った。
「二合ばかりは、味わうものの、あとは、水同様――」
湊屋は、そうこたえてから、貢のあくびが伝染ったように、物倦げに、口をひらいた。
とたんに、貢が、にやりとした。

二

「湊屋！」

一変した貢の鋭い声音に、湊屋は、酔眼を、はっと、瞠いた。水同様、とこたえ乍ら、いつになく、湊屋は、酔いをおぼえていた。

「悪酔いしたようだな、湊屋」

「なんの……」

「と、笑おうとしても、頬の筋がこわばるのは、いったい、どうしたものか。……お、それ、指の先も、少々しびれて来た模様だ」

あざけられて、湊屋は、愕然として、立ち上ろうとした。

どうしたのか、足が利かぬ。

烈しい狼狽が、叫びをおし出そうとしたが、もはや、舌までが、しびれて来て、それすら叶わなかった。

貢は、冷然として、その様子を眺めやり乍ら、

「おれが、兵法の掟によって、一滴もたしなまぬ、と断ったのを、莫迦正直に受けたお主は、案外なお人好しということになる。……湊屋、お主は、顔のない女でも、恋はする、ということを、あいにく、忘れていたようだな。……女忍者らしく、やはり、慕う対手も忍者であった。そうして、また、対手も、女に顔がないことなど歯牙にも掛けず、平然として犯す非情をそなえていた。……〝闇〟は、お主をすてて、ゆめおとこ、と称する忍者についた。湊屋、おれは、お主をすくってやりたかったが、無念乍ら、対手がわるい。兵藤貢も、忍者二人をむこうにまわしては、到底敵わぬ。ついでに申さば、おれは、不破伝次郎に敗れた。その時、〝闇〟に盗ませた古鏡は、必ず返すと、約束した。おれは、お主が、古鏡の中にかくしてあった少年の絵すがたを、踏絵にするのを、黙って見すごした。使用済みとなった絵すがたは、約束通り、返さねばならぬ。そのためにも、お主が、こうして、しびれ薬を混入した酒を、知らずに飲むのを、止めることはできなかったのだ。あしからず、万事あきらめてもらうよりほかはない」

この残酷な宣告に対して、湊屋が反応を示し得たのは、眼眸だけであった。憤怒と憎悪と無念を綯交ぜて、眼球もとび出さんばかりにひき剝いた形相は、それまで、天下の支配者面をしていただけに、いかにも悲惨なものに、見えた。

この時、前方の織部燈籠の陰から、幽鬼のように、「影」が出現して、この四阿へ歩み寄った。

貢は、わざと、「影」を視ずに、

「この商人を、いったい、どうするつもりだ？」

と、訊ねた。

「こやつの魂を救うてやろうと思う」

「魂を――？」

貢は、あきれて、「影」を見戍った。

「左様、魂をだ。……酒に混じた河豚の毒は、しびれるだけで、生命に別状はない。舌が動かず、言訳を封じられる。そこで、こやつの身柄を、今夜のうちに、切支丹牢屋敷の地下牢へ、そっと移して置く。明朝は、ひき出されて、他の囚徒とともに、品川の処刑場へ、つれて行かれることになろう。礫柱に逆さ吊りされる恐怖を、とっくりとあじわうがよかろう」

それをきかされるや、湊屋は、死力をふりしぼって、口をひらいた。

よだれとともに、破れ笛のような、あわれな悲鳴が、迸っただけであった。

「さて――この屋敷内での、おれの役目はおわったぞ」

貢が、立ち上ると、「影」は、ぼそりと告げた。

「麻布善福寺のさかさ銀杏の下で、お主の宿敵が、待って居る」

三

さかさ銀杏――または、杖銀杏とも称ばれている巨樹であった。

麻布山元町の善福寺開山堂の前に天を冲して蔚然とそびえていた。

相伝う、親鸞上人が了海師に附法にあって後、ここを去る日、その携えていた杖を、地に突き立てて曰く、念仏の行法凡夫の往生もまた、斯くのごとくであろうか、と。程経て、杖より枝葉が生じ、繁茂した。ゆえに、逆さ銀杏とも称す。

その巨樹の下に、不破伝次郎は、黙念として、立っていた。

雲ひとつなく晴れわたった夜空に、十三夜の月が、傾いていた。

幾刻かを澄んだ光に照らされた地上は、風もなく、鬱蒼とこもらせた巨樹の、そよともせぬ葉に、冷たく月かげを宿らせて、物の怪が掠めたとしてもふしぎはない、深い寂寞をたたえていた。

物の怪――それにも似た小さな黒い影が、前方を、さっと奔るのを、伝次郎は、みとめた。

――小猿！

これは、「影」が、貢の到着を予告してくれたことだった。

尋常の兵法試合ではなかった。

貢が、奇策をえらんで、思いがけない襲撃をして来ても、これを、卑怯とそしることはできなかった。審判を置かぬかぎり、いかなる手段であろうとも、敵を殪せばよい――それが、当時の凄じい果し合いであった。

――どこから来る？

伝次郎は、心気を鎮めて、待った。

やがて、山門に跫音がして、それは、まっすぐに、こちらへ、進んで来た。

兵藤貢は、奇策をすてて、堂々と姿を現した。二間の距離をへだてて、立ち停まった貢は、

「絵すがたは、影なる忍者に預けておき申した」

と、言った。

そして、無造作に、差料を抜きはなつと、

「参る！」

声音もしずかに、ぴたりと、青眼に構えた。

抜き附けに、敵の意表を衝く変化を示す居合の小技は、すてたのである。

と見て、伝次郎も、すらりと一刀を鞘走らせて、相青眼となった。

「互角だな」

この呟きは、開山堂の屋根の上で、もらされた。

吹上の禁苑で、天下の兵法者を聚めて催された御前試合を眺めて来た「影」の目にも、これは、孰れが敗れるか予断し難い凄絶の立合いと映った。

剣法も、戦国時代の修羅場裡の力技からようやく脱して、心・気・形・業の完全な一致による神妙の術に進んで来ていた。

「三重極意伝」に、次のような言葉がある。「把るところの刀、柄の頭より刀鋒に至るまで、気渉り、毫も至らざる所なきこと。この術を得れば、一刀おのれの手足と同じくして、活剣となるべし。活剣ならざれば、撃つことあるべからず。一刀、一身、一心、一気、一体となれば、おのれの血脈、剣中に通うに同じ。斯くの如く、刀を活かして用うるに非ざれば、たとい屢々肯綮（肯は肉に着く肉、綮は骨と肉と結合せるところ）の堅きを抜くと雖も、全く抜けたるに非ず。肉を落し、骨を砕き、その斬り得たると、得ざるとは、切口を見て知ることを得べし。刀を以て抜くと、術を以て抜くとに至りては、大いに逕庭あり」

いわば……。

この二人の若い兵法者の対峙の構えこそ、古格から進んで、最も近代的なものとなっていた、といえる。

……変化は、幾分かの後に起った。

伝次郎の剣尖が、徐々に、下方へむかい、下段の型に入った。左手は、柄から離れ、滑るように、地摺りの刀身の背をつたった。とともに、両足の爪さきは、外側へひらかれた。

芳賀一心斎の極意「石火の構え」にほかならなかった。

これに対して、同時に、貢の剣も、移動していた。これは、対手と逆に、青眼から上段へ転じていた。その左手は、やはり同じく、柄から離れ、刀身の背を滑った。

両脚を大きく左右に開くとともに、一剣は、頭上に、一直線に横たえられた。いわゆる大鳥居の構えであった。

「みごと！」

屋根上で、「影」が、ひくく叫んだ。

石火剣に対するに、大鳥居を以ってしたのは、兵藤貢が、苦心の発明であった。

石火とは、石と石を打ち合って、火を発する意であり、いわば、剣を無視して、拳と拳を打ち合せる肉弾的突撃を意味している。

すなわち、一心斎が工夫をこらしたところは、対手の剣を握っている拳であった。敵が、わが頭上へ襲撃せんとするや、その剣を握る拳の方向も定まる。その刹那、その拳を撃つことは、最も正確な防禦であるとともに、攻撃でもあるのであった。

貢は、咄嗟に石火剣の秘術を看破するや、大鳥居に構えて、おのが拳を、最も遠い位置に離したのである。

伝次郎の剣が、拳の目標を失って、胴を薙ごうとするなら、その一瞬こそ、貢は、対手の頭上へ電光の一閃をふり下すことになろう。

対峙が、そのまま完全な固着状態を迎えたのは、当然であった。

その息詰まる対峙のあいだ、伝次郎は、恩師の教えを、心に抱いていた。

伝次郎に、石火剣の極意をさずけてから、しばらく後、一心斎が、

「来れ！」

と命じて、石火の構えに対して示したのが、実は、いま敵がかまえている大鳥居だったのである。

その時、伝次郎は、不動縛りに遭ったごとく、微動だに叶わぬ当惑をおぼえたことだった。

恩師は、木太刀をおろして、教えた。

「大鳥居があれば、必ず、奥に神殿があると心得るがよい。されば、鳥居は、くぐらねばなるまい。これが皆伝じゃ」

いま、あらためて、その言葉を胸中にくりかえした伝次郎は、つと、一歩ふみ出した。

そのまま……石火の構えの伝次郎のすがたは、そろそろと、前進しはじめた。宛も、恭しく、鳥居をくぐって、神殿に拝礼しに行くがごとく……。

大鳥居に構えた貢に、後退はなかった。

「やあっ！」

満身からの気合を、夜の宙に劈かせて貢の白刃は、伝次郎の頭上へ、降った。

と、……次の刹那。

その剣は、はじかれたように、さかさ銀杏の梢へ、飛び去った。その柄を、肱から両断された右手が、摑みしめたままで——。

紫雲旗

一

品川の浜辺における切支丹信徒の舟上逆さ吊りの処刑は、三日目の朝を迎えた。

二日間に処刑された五十余人の無慚な屍骸は、なお、そのままに、舟上の磔柱に、曝されてあった。「影」によって、顚覆された舟は、汀まで曳かれて、もと通りにされたのである。

鎖で横一列につながれた五十余艘の舟は、うち寄せる波浪に、大きくゆれ乍ら、朝霧の中から浮きあがって来た。

ずらりと並んだ九十余柱の殉教者たちは、すでに、のこらず息絶えて、魂は、天堂へ昇り去ったかと、みえた。

ところが——。

左端に、一人だけ磔柱を反対に沖へ向ってむけかえられて、手足を十字架へ釘で打ちつけられた福者伴天連ガルシャ神父の逆さ貌が、目蓋を微かに顫わせつつ、みひらいたのは、まさに、基督の復活にも似た奇蹟であった、といえる。

焚刑とはいえ、十字架もろとも、その身体を焼きつくしてしまうのではなかった。紅蓮舌が、頭髪を、ちりちりになめてしまう頃あいには、すでに、煙によって、窒息してしまっているのであるから、薪には海水が注がれて、消されることになる。したがって、孰れの逆さ首も焼けのこってはいたのである。

しかし、逆さ吊りにされて、一昼夜を経過すれば、いかに逞しい人間も、その拷問によく堪えて、なお、体内に生命をとどめていることは、不可能であった。まして、ガルシャ神父は、二昼夜を、惨たるその姿ですごしたのである。

それは、おそるべき信仰にささえられた精神力によるものであったろうか。

いや、異国の布教師は、すこしでもはやく、天堂へ昇ることを希求していたのである。これをさせなかったのは、深更、波浪をくぐって泳ぎついて来た者であった。

「影」は、なぜか、この神父一人だけを生きのびさせるために、忍者が死神を迎えてなお幾刻かを生命をのばすのに服する根毒を、その口にふくませたのである。

おかげで、神父は、二昼夜、頌歌「御手の中に」を誦しつづけなければならなかったのである。

……目蓋をひらいた神父は、海上を流れる霧が、徐々に、紅味をおびるのを眺めた。そし

て、薄れゆく霧をつきやぶって、幾条かの光箭が、東天から、さっと降りそそいで来るのに会うや、

「おお——栄光を！」

と、呟いた。

それは、まさしく、天堂の雲上に彳む天主が、けなげな殉教者の篤い信仰をよみし、ひたすらの祈禱に応えて、霊魂を救う光を投げかけてくれるに似た、荘厳な朝ぼらけであった。

神父は、さらにまた、ふしぎな光景をみとめた。燦然たる光芒の落ちた海上はるかな沖あいを、幻影のように一艘の巨船が、ゆっくりと進んでいた。それはあたかも、殉教者たちの魂を乗せて、天堂へむかう洗礼船かと、眺められた。

神父は、栄光の豊旗雲の下を、進む船影へ、敬虔な眼眸を送り乍ら、さいごの力をふりしぼって、

「主よ、御身の御手の中に」を唱えた。

すると、その神の船から、それに応えるかのごとく、天主讃歌が、海原を渡って神父の耳に、とどいた。

神父は、微笑して、目蓋をとじた。そして、息絶えた。

二

その巨船も、そして、そこに起った天主讃歌も、決してガルシャ神父の幻覚ではなかった。船は、湊屋が、幕府よりはらい下げてもらった安宅丸であった。

湊屋の予定通り、安宅丸は、出帆したのである。船倉には、湊屋が苦心して聚めた異国との交換物資が積まれていた。

いや、それよりも、湊屋自身も、みずから指図してつくった豪華な船主部屋に坐っていた。かたわらには、数万両とかぞえられる千両箱も積んであった。

ただ、予定とちがっているのは、湊屋の片足くびが、鉄の鎖でつながれていることであった。その顔面は、憔悴しはてて、殆ど死人の色であった。

「影」によって、河豚の毒を嚥まされた湊屋は、手足も舌も動かぬ躰を、切支丹牢屋敷の地下牢へ抛り込まれたのであった。湊屋が、生れてはじめて見せられたむごたらしい生地獄であった。

おのが私腹をこやすために、地獄の苦患に遭わせている犠牲者の群の中へ、皮肉にも、おのれもその一人として、抛り込まれた湊屋の恐怖は、言語に絶した。

番士にむかって、自分が湊屋久右衛門であることを告げられない恐怖と、すでに、自分が湊屋久右衛門であることを囚徒たちが知らされている恐怖と、そして二日後には、品川の海上で、逆さ吊りにされて、焼き殺される恐怖と——。

三つの恐怖によって、湊屋の頭髪は、一夜のうちにまっ白となってしまった。

囚徒たちが、裏切者と知り乍ら、恨みの言葉ひとつ、あびせずに、無視してくれたのがせめてもの救いであった。

……夜あけ。

囚徒たちが、一斉に起き上って、祈禱を誦しはじめるや、湊屋の白化した頭髪は、逆立った。いよいよ、処刑の日が来たのである。

囚徒たちが、神の奇蹟をのぞむように湊屋もまた、逆の意味での奇蹟が起るのを祈らないわけにいかなかった。

奇蹟は、起った。

一人の番士が、祈禱のつづけられる牢内へ、入って来ると、まっすぐに、湊屋に近寄って来たのである。それが「影」と名のる忍者であるのをみとめた湊屋は、よだれの流れつづける唇をわななかせると、濁り目にもの言わせて、哀訴した。

「生命が惜しいか？」

「影」は、冷笑した。

湊屋は、頷いた。

「生かしてもらいたくば、命令通りにするか？」

それをきくや、湊屋は、歓喜を、動かぬ全身に滲ませることに、必死の努力をはらった。

「虫けらめ！」

半刻後、湊屋は、再び、不思議な万能者の手で、地上へ、つれ戻されていた。

「影」の活躍は、疾風のごとく敏速をきわめた。廃人同然の湊屋を、いかにも常人とかわらぬように雇傭人たちに見せかけて、安宅丸を出帆させる用意を、ととのえさせた。

ついで、大目附井上筑後守邸に捕われている斎の宮を、ひそかに、救い出した。

同時刻——。

品川の処刑場へむかって曳かれて行く信徒六十余人が、日本橋にさしかかったおり、突如、地から湧くごとく出現した二十名あまりの黒装束の一団によって、拉致された。赤猿佐助が指揮する、故真田左衛門佐幸村の「六文銭組」のしわざであった。

こうして、安宅丸は、ぶじに、船出したのである。乗り込んでいるのは、救われた切支丹信徒と、「六文銭組」をはじめとする豊臣の残党と、湊屋と、そして、斎の宮と不破伝次郎であった。

——なるようになるがいい！

いまは、湊屋も、度胸をきめていた。

船長の甲比丹源九郎は、湊屋が、十三年前に、宮古島から救い出して、きびしく鍛えあげた、生命知らずの、剽悍無比の若者である。あるじが、俘虜になっていることを知らされていないが、もし気がついたら、必ず、恩誼に報いてくれるに相違ない。妹の〝闇〟とちがって、絶対にあるじを裏切るようなことはあるまい。と、湊屋は、それに、一縷の希望をつな

いでいた。

湊屋は、知らなかった。

甲比丹源九郎は、すでに、真田「六文銭組」の俘虜となり、四十余名の水主とともに、降服していることを——。

さて、船上の三重の楼の貴賓室には、やや面やつれした斎の宮と不破伝次郎が坐っていた。変転するおのが運命に思い沈むていで、二人は、黙って、船体の軋る単調なひびきを、きいていた。

蓬窓から、朝陽がさし込んで来て、膝へ落ちた時、斎の宮は、ふっと、われにかえって、海原へ、澄んだ眸子を投げると、

「この船は、どこへ、参るのでしょうか」

と、呟くように、言った。

「わかりませぬが……もしかすれば、南蛮をめざしているのかも知れませぬ」

「南蛮へ——？」

宮は、おどろいて、伝次郎を視た。

「豊臣の残党とおぼしい面々が乗って居りますし、胴の間でうたって居るのは、磔をまぬがれた切支丹の信者たちでありますし——孰れも、この日本には住み難い人々であります故——」

「……」

宮が、遠いところを視る面持になるのを見成った伝次郎は、

——あの絵がすたの美少年が、ともに、この船に在るならばと想うていられる。

そう察した。伝次郎は、微かに疼く嫉妬の情を抑えると、

「宮様、希望をお持ちあそばすよう——」

と、言った。

「はい」

宮は、すなおに、頷いた。

「いずれ、この船も、瀬戸の内海をこえれば、西国のいずこかに、碇泊することに相成りましょう。その時、それがしが益田四郎なる御仁の行方をおさがし申します」

「……」

宮は、みるみるうちに、双眸をかがやかせた。伝次郎は、おもてを伏せたまま、つづけた。

「宮様が、もし、そうしたいと仰せならば、それがしが、益田四郎殿の許へ、おつれつかまつります」

宮は、礼をのべようとしたが、感動で胸がいっぱいになって声が出なかった。

「宮様のお幸せをおはかりする——それが、それがしのつとめでありまするし、つとめをはたした後は、おいとまして、もとの気ままなくらしにもどりたいと存じて居ります」

あとの言葉が、伝次郎の、宮の恋に対する謙虚な反抗であった。

三

同じ時刻——。

きれいに掃いて、水を打った江戸の朝の街すじを、騎馬が十騎、通り魔のごとく駈け抜けていた。

江戸の街は、夜が更けるのがはやいかわりに、朝は早く、陽のさしそめる頃には、往還は、あきないにせわしい町人で織るようになる。騎馬の一団は、行人の多きに委細かまわずに、戛々たる蹄の音をひびかせて、おどろいた者が、あっとなって身をかわしたとたんには、もう数間さきにある疾駆ぶりをみせていた。

——何か、一大事が出来した！

馬上を仰いだ者は、ひとしく、そう感じた。孰れも黒覆面で、左手に鉄砲を摑んでいたのである。衣服は、旗本の士であることを示していた。

やがて、十騎が到着したのは、四谷喰違い木戸門内の井上筑後守邸であった。

案内も乞わずに、開かれた門を、一気に駆け入るや、大玄関前で、ひらっと降り立った先頭の士が、りんりんたる大声で、

「柳生飛騨守宗冬、ただいま参上。お留守居、出られい！」

と、呼ばわった。

留守居役が、あわてて、走り出て来るや、宗冬は、挨拶を抜いて、いきなり、

「斎の宮の身辺の守りに、遺漏なきや？」

「それは……厳重に——」

「見て参られい！」

叱咤するように言われて、あわてて、奥へ奔った留守居が、ふたたび、あらわれた時、その顔面から、血の色が引いていた。

日本橋上から、処刑の信徒六十余人が、何処かに拉致された急報に接した宗冬は、不吉な予感をおぼえて、隠居所へ父の但馬守宗矩をおとずれて、その指示を仰いだのである。

「六十余名を一挙にさらうことができるのは、おそらく、真田の六文銭組の生残りたちを措いてほかには居るまい。目的とするところは判らぬが、これが、天下擾乱の因となる懸念なしとせぬ。首魁は『影』であろう……。もしかすれば、斎の宮も、さらう企てと思われる。皇女たる宮を、『影』が、かしらにいただく存念がありとすれば、この上の危険はない。……追って、宮を、鉄砲で撃ち止めい、あわよくんば『影』も殪すことができれば、だ！」

但馬守宗矩の頭脳は、老いてなお、冴えていた。「影」を撃ち止めることは不可能であろうが、せめて、一党の象徴となるかも知れぬ斎の宮を暗殺してしまえば——と、咄嗟に思いめぐらしたのである。

実は、兵藤貢を使って、不破伝次郎を監視し、その陰にかくれている大きな徒党の動向をさぐっていたのは、但馬守宗矩であった。諸国にあふれた浪人者のうち、驥足を展ぶ機会を虎視眈々とうかがっている秀れた士が、意外に多くひそんでいて、互いに脈絡を通じ合っている気配があることを、二年ばかり前から、宗矩は、さとっていたのである。当然、真田の残党が、その中にかぞえられるとすれば、「影」の存在は、きりはなしては、考えられなかった。

兵藤貢に、監視させた限りでは、徒党中の俊髦たる不破伝次郎と「影」との間には、なんのつながりもなかった。

ところが、昨夜半、右腕を両断された兵藤貢が、ひそかに、隠居所に忍んで来ての報告によれば、「影」は、不破伝次郎と近づき、怪しむべき行動を起した、という。

宗矩が心配していたことは、ようやく表面へあらわれて来たのである。

宗矩は、辞去する宗冬を、玄関まで送って出ると、

「よいか、もし『影』を発見して、追って、撃つ好機をつかんだなら、彼奴がその神変の動きを、宙に停止した刹那をえらべ！」

と、教えたのであった。

宗冬は、再び馬上の人となるや、九騎をしたがえて、門前へ駆け出た。

「品川へ！」

馬腹を蹴った——瞬間。宗冬は視た。

一町余のさきの路上に、一旒の錦の御旗が、ひるがえっているのを。

のみならず、その下には、妖しく、紫雲がたちこめていて、それを持った者の姿を包んでいた。

——「影」め！

宗冬以下十騎は、馬脚をあおった。

錦旗は、追って来てみよ、とあざけるがごとく、往還を、疾走しはじめた。

紫雲は、そこから湧いて、追駆する騎馬の群の前のあたりまで、なびいて、消えた。それは、えもいわれぬ芳香をはなって、往還の左右で茫然と棒立つ行人たちを、とまどわせた。

宗冬は、ついに、紫雲のたなびく一町余の距離を、せばめることは、できなかった。

錦旗は、それ自体生きもののごとく、地上を掠めて、やがて、愛宕山に至るや、たちまちに、役行者堂のある上り口から、八十六段を駆けのぼって行った。

十騎は、その石段下で、とび降りるや、一列陣を成して、鉄砲をかまえた。

九挺の鉄砲は、一斉に、轟音をほとばしらせた。一瞬、おくれて、宗冬のかまえた鉄砲が火を噴いた。宗冬は、配下たちに、錦旗の下の、紫雲のたちこめているところを狙わせ、おのれは、錦旗の上を狙ったのである。父宗矩の教えを思い出したからである。

「影」が、銃声とともに、宙へ高く跳躍する——その空中で、ぴたっと停止する一瞬を、撃

ったのである。

——仕止めた！

たしかに宗冬は、その確信があった。

しかし——。

階段を駆けあがって、紫雲が薄れて散った其処に、見出したものは、弾丸に撃ち抜かれて、放射状に罅割れた一個の古鏡だけであった。

きりしたん四郎

一

安宅丸が、江戸を出航した時、実はまだ、その行先は、決定していなかった。

船内の胴の間において、評議は、昼夜つづけられ、遠州灘を過ぎる頃、ようやく行先は、きまった。

島原。

そこであった。

これを主張したのは、真田六文銭組の謀師格の天草甚兵衛であった。

甚兵衛は、小西行長の遺臣で、行長滅亡後は、肥後宇土郡江辺村に隠棲して、天下の推移を鋭くうかがっていたが、大阪の陣が起るや、真田幸村の招聘に応じて、大阪城に入ったのであった。

大阪城が炎上するや、ひそかに遁れて、故郷天草大矢野の里に帰り、農夫となっていた。

先祖は安芸国中村の城主阿曾沼中務少輔であり、行長に仕えては、六千石を領する大身であった甚兵衛は、帰郷二十年、いつの間にか天草はもとより島原、肥後の地下人たちの尊敬を一身に聚めるようになっていた。

二十年ぶりに、旧主幸村に会うべく、主府して来た時、たまたま、幸村の江戸退転の壮挙にぶつかり、それに参加し、井之頭池の血戦には、「短兵急」の真田隊の指揮をとり、われに十倍する御場段切れの公儀勢を、縦横無尽に押しまくったのである。甚兵衛が、島原を主張した理由は、次のごとくであった。

島原半島は、山地が大部分を占め、一帯に地味は瘠せ、耕地に乏しく、のみならず、数年前から、年々凶作がつづき、飢饉が起っていた。殊に、昨年は、それがはなはだしく、麦も不作、夏は、旱魃で疲弊はますますつのる一方であった。

しかも——。

領主松倉長門守勝家は、苛斂誅求の権化のごとき人物であった。住宅を建築すれば建築税を、炉を設ければ炉税を、窓を設ければ窓税を、出産すれば頭税を、はては、死亡埋葬すれば穴税を——まさに、言語道断な税目を設けて、領民の膏血をしぼりあげていたのである。

凶作がつづかなくてさえ、領民は、先代領主豊後守重政が、有馬晴信の故城日野江城を、島原へ移して、高来城を築いた七年間の経費と労力で疲弊し果てていたのである。それにひきつづく、凶作と、当代領主の放縦貪虐に遭って、惨状は語るにしのびないものになっているのである。

また——。

有馬・小西の両切支丹大名によって護られた島原・天草一帯は、公儀が迫害を苛酷なものにすればする程、その信仰を根強く、深いものにしていた。元和二年に、大和五條邑から、島原に就封された時には、松倉重政は、切支丹に対して、寛大な態度をとっていたが、家光が三代将軍を継いで、その徹底的弾圧を厳命するや、やむなく、重政は、家老多賀主水に命じ、残酷苛烈な処刑方法をもって、島原から、その信仰を絶滅せんと計った。

寛永四年からはじまったその迫害は、まことに、言語に絶した。

多賀主水は、そうした残忍の極をつくすために生れたような人物であった。

烙印、灸籠、指切り、凌辱、水漬け、竹鋸、穴つるし、木馬責め、はては、温泉岳（現在の雲仙岳）の地獄谷で噴きあげる硫黄の熱湯へ、逆吊りをするなど、世界刑罰史上比類のない酷刑を、敢えてしたのであった。

男女の別なく、丸裸にして、口まで水の中に漬け、曳き上げるや、焼鉄の尖端を躰に当ててまた水に漬け、額や頬には、切支丹という字の烙印を捺し、ついに最後には、石をくくりつけて、海底へ屠る——といった処刑を、枚挙にいとまがないくらい、くりかえしたのである。

そのような残忍極まる迫害をやっても、なお、信徒の頭数が減らぬのに苛立った多賀主水

は、やがて、温泉岳地獄谷の責苦を思いついた。

囚徒十六名を、瘠馬にのせて行き、硫黄のガスが、息もつかせぬ程渦巻く地獄谷の池の前へ、素裸にして立たせ、その背中を截ち割って、熱湯を柄杓でそそぎ込み、あるいは、噴きあがる池中へ、逆吊りにしたりした。

しかもなお、信徒たちは、一人として、心を変えようとはしなかった。その指導者であるパウロ内堀作右衛門は、すでに、十本の指をことごとく切られていたが、その責苦に堪えつつ、同志をはげましつづけ、

「何人と雖も、霊魂を奪うことはできぬ。わしは、このように指をすべて切られているが、菖蒲の花ひとひらを切られたほどにも思うては居らぬ」

と言いはなち、一同つぎつぎと息絶えて、さいごに一人のこるや、

「主よ、今こそ御言葉に従いて、しもべを安らかに逝かしめ給え」

という聖歌をうたい、

「いと尊き聖体の秘蹟は讃美せられさせ給え」

と祈って、こときれた、という。

重政が逝き、勝家が、遺領を継ぐや、多賀主水は、さらに、信徒のみならず、普通の農夫をも、税を納めなければ、捕えて、こうしたむごたらしい拷問を加えた。あるいは、その女房や娘を人質にとったり、孕女を素裸にして、凍った池へ投げこんだり、少女を犯させたり

……。

文字通り、島原半島は、この世の地獄図絵と化していたのである。

二

「窮鼠は却って、猫を噛む、と申す、もはや、これ以上の苦患に遭うまい、と知り、死を免れることができぬ、とさとれば、いかに、非力の農奴も、ついには、まなじりを決して起つに相違ござらぬ。われら真田六文銭組が、彼らを団結させ、指揮をとるならば、島原を、数日にして、占領するのは、きわめてたやすきことと、おぼえ申す」

と、天草甚兵衛は、主張したのである。

一座の面々は、緊張し、固唾をのみ、その壮挙を想いやった。甚兵衛は、さらに声音を強めて、つづけた。

「事を起すには、機会が必要でござろう……。天下は、大阪役から二十三年の和平になれて、人心挙って、懦弱安逸に流れて居り申す。また、現在、将軍家には、沈痼の病に罹って、政を見ざること歳余、勅使にさえ謁する気力もない由、すでに巷では、逝去を伝えあい、嗣なくして喪を秘せり、などと流説も生じ居るありさま……。松倉勝家は暗愚であり、家老多賀主水は憎悪の的となり、土民は飢えて、死を待つばかり。しかも、西国一円に炎旱うちつづき、夕陽は赤きこと丹朱のようになり、秋に入って、忘れ咲きの桜花を見るなど——奇怪の

天象も、機会のひとつにかぞえ得る。まさに、島原の人民を一丸として蹶起せしめる絶好の秋にほかならず、と心得る！」

完全に徳川家の天下となったいま、豊臣の残党という烙印を捺されたために、驥足を展ぶる一寸の余地もうしなった人々であった。甚兵衛の主張は、異常に魅力あるものにきこえたのは、当然である。

「起つか！」

一人が応えるのをきっかけにして、

「よし、やろう！」

「孫子も曰う、兵は拙速を聞く、未だ巧の久しきを睹ざるなり、だ！」

「勇者は懼れず、手に唾して取るべし！」

「やるぞ！」

「おもしろい！　われら二十余名の力で、天下をくつがえしてみせるか！」

たちまち、胴の間は、異様な昂奮に満ちたのであった。

ただ一人だけを除いて、であった。

いつの間に、どこからか乗り込んでいた赤猿佐助が、片隅に蹲っていたが、冷静な視線を、一人一人の顔へ、巡らせて、

「事を構えて僥幸を得ん、か――。元和偃武で、もはや、いくさは起らぬはずと思うて居ったが……」

と、独語していた。

安宅丸は、しかし、周防灘をこえたあたりで、忽然として、船影を、何処かへ没し去った。あとを追っていた公儀隠密は、ついに、それを再び発見することは、叶わなかった。

それから、幾箇月間かが、なにごともなく、流れすぎた。

三

天草大矢野村に在る天草甚兵衛の留守宅は、さすが大庄屋の貫禄をもった宏壮な構えであった。

この屋敷の離れに、いつ頃からともなく、一人の少年が、かくれ住んでいた。

家人も召使いも、ただ、

「若衆様」

と、呼んでいた。本名を知る者は一人もなかった。その気品のある容姿は、いかなる者をも、はっと目を瞠らせずにはおかなかった。遠くから、かい間見た下婢の一人は、それから数日間、仕事も手につかず、茫然とわれを忘れていた。

離れの障子に、その影が映っているのを眺めただけで、女たちは、ひとしく、胸をときめかせた。

陰陽師、益田四郎がその正体であった。

四郎自身、夢にも知らぬ間に、切支丹門徒にされていて、陰陽師として自由に各地を歩くことが叶わなくなり、この屋敷へ、ひそかに戻って来たのである。四郎が、育てられたこの屋敷を出て行ったのは四年前であったが、戻って来てみれば、何故か、主人甚兵衛を除いて、ことごとく人は変ってしまっていた。主人自身も、江戸へ出て、未だ帰って来ていなかった。

四郎が、おのれが切支丹にされているのを知ったのは、長崎の町で、突然、数十名の男女にとりかこまれて、祈禱を唱和された時であった。四郎は、おのれの貌が、踏絵にされているのを告げられて、愕然となった。

全く身におぼえのないことであった。

しかし、犀利俊抜な頭脳の持主である四郎は、長崎の宿舎で、養父甚兵衛が、何処からともなく送って来た尺牘を一読するや、直ちに心に決するところあって、この大矢野の屋敷へ戻って来たのであった。

四郎は、離れに、じっとかくれ住み乍ら、島原にやがてまき起るであろう擾乱を、期待していた。

やがて四郎は、何処からともなく、次のような流言がひろがりはじめた、と下婢の一人からきいて、微笑したことだった。

「二十六年前、上津浦にいた伴天連が、追われて、日本を去るにあたって、一通の書をのこした。その書に由れば、いまから二十六年目に、必ず一善人が出るであろう。その子は、幼童にして、学ばずして諸学に通じている。

その子が十七歳になった年に、天に奇異あり、木に饅頭が生り、野山に白旗が立ち、東西の雲は焦げ、人家は焼失し、野山はかわくであろう。この惨状を救う者こそ、その子である。天使と思うて、あやまりはない」

それから、一月ばかり経って、あわただしく、若い差配が、一枚の紙を持って、離れをおとずれた。

「若衆様、ご覧じませ。このような檄文が、ひそかに、村々へ手渡されて居ります」

さし出された紙を、四郎は無表情で、一読した。

態と申し遣し候、天人あま下り成され候て外道どもは、天主様より火の苛責成され候間、何者なりとも、きりしたんに成りたく候わば、早々御越あるべく候、村々の庄屋、二名は早々御越しあるべく候、島中この状御廻しこれあるべく候、異端者方にても、きりしたんになり候者は御免なさるべく候　恐惶謹言

右早々村々へ御廻し成さるべく候由申入れ候

天人を御使に遣わし申候間、村中の者に御申附け成さるべく候、きりしたんになり申し候者の外は、日本六十六国ともに、天主様よりの御定にて、地獄に踏込み成さるべく候間、そのぶん御心得なさるべく候、天草の内、大矢野に御座成され候四郎様と申す人は、

天人にて御座候、爰元に御座候間、そのぶん御心得あるべく候　已上

四郎は、読み了るや、黙って、差配へ、それをかえした。

「若衆様！」

差配は、必死の面持で、訊ねた。

「貴方様が、四郎様ではございませぬか？」

「わたしが、四郎であったなら、どうする？」

四郎は、微笑して、訊きかえした。

差配は、畳へ両手をつかえ、しばらく、肩を顫わせていたが、

「じ、じつは、わたくしめも、切支丹にございます」

と、告白した。

四郎は、べつに何も言わずに、差配をさがらせて、長いあいだ、沈黙していた。

やがて、ひとり、冷やかに、笑った。

「このわしが、天人か」

いまだ、曾て、他人にみせたことのない、陰惨な表情であった。

資稟英異、五歳にして書を善くしたこの美少年は、外面においては、進止都雅、婥約処女のごとくであり乍ら、内面には、氷のようにつめたいものをたくわえていた。

いかなる場合にあっても、その理性をうしなったことはなかった。

一をきいて十を知る——、文字通りその叡智の持主であった。

四郎は、養父甚兵衛が、六十の老爺であり乍ら、なお慷慨の気を銷せず、常に、機会をうかがっているのを、看破していた。

養父は、いまこそ、その機会到来と、思いたったに相違ない。

島原・天草の人々は、峻法をはばかって、仏教に服しているようにみえるが、実は、その殆どは、帰依している切支丹をすててはいない。されば、その切支丹の信仰をもって、民心を鼓舞し、糾合して、乱を起し、九州に倔起して、中国を制し、京の都に上って、徳川家を倒さん！

これが、甚兵衛の企図するところであろう。

——事成らば、栄誉をほしいままにし、成らざるもまた老境の一快事である……養父殿の方寸は、そうであろう。

四郎には、それが、いかにも、おろかに思われているのであった。

……その夜、更けて。

四郎は、掛具をはねて、しずかに起き上った。

「誰だ？」

闇の中に——部屋の一隅に、何者かが立っているのを、察知したのである。

「名はない。影、とおぼえておいてもらおう」

「忍者か？」
「左様――」
「何用だ？」
「お主人という人物を、見とどけに来た。それまでのこと」
「なんの理由がある？」
それに応えず、「影」は、気配をうごかして、近づくと、
「お主、切支丹ではあるまい」
「切支丹でなくとも、天人にされたからには、そういう顔をせねばなるまい」
「乱魁となって、あたら、若い生命をすてる存念か？」
「やむを得まい。それが前世からのさだめであれば……」
「磔柱に逆さ吊りされて、焼き殺されるのを、いとわぬのか？」
「その時は、哭き喚くかも知れぬ」
そうこたえてから、四郎は、じっと闇に濃く滲んだ黒影を透し見て、
「わしを、殺しに来たのではないのか」
と、訊ねた。
「場合によっては、と考えて来たが……どうやら、このまま、ひきさがることになる」
「なぜだ？」

「噂にたがわぬ人物だからだ。切支丹一揆の頭領となるには、ふさわしかろう」
そう言いすてて、「影」は、すっと身を引いた。
それきり、音もたてずに、何処かへ、消えうせた。

呂宋行

一

島原の一角に、勃然として、狂暴な一揆が蜂起したのは、それから、一月後であった。

それまで、度重なる迫害に、息をひそめていた切支丹信徒が、いかなるわけか、彼処此処に寄り集って、堂々と、ぜずす・きりすとの画像をかかげて、礼拝しはじめたのである。

処々与りの代官たちは、あれほど無慚苛烈な処刑をつづけたにも拘らず、土民たちが、これ見よがしに、その信仰の座を公開しはじめた反逆を、どう受けとっていいか——なかば、恐怖の予感をおぼえたことだった。

ともあれ、この事態が、城代家老多賀主水の耳にとどけば、代官自身が、切腹して責を負うことになるのは、火を見るよりもあきらかであった。

代官たちは、密偵をはなって、集合の場所と日時をさぐり、一挙に弾圧すべく手筈をととのえはじめた。

まず——。

有馬村の代官林兵左衛門と本間九郎左衛門が、同村うちの寄合を探知した。

その夜、両名は、着籠に身をつつんで、馬を駆って、その場所を襲い、画像をひき裂き、五名を斬った。

追って、極刑の沙汰がある旨を申渡して、両名が、おもてへ出た時——。

黒い布でおもてをつつんだ浪人ていの男が四名、その前に立ちふさがった。

争闘のいとまもなかった。

林兵左衛門は、首を刎ねられ、本間九郎左衛門は、袈裟がけに斬られて、地べたへ臥した。

孰れも、一太刀をあびた最期であった。

その翌朝のうちに——。

南は、口之津村、加津佐村、小浜村、串山村、水石村へ。

北は、有家村、堂崎村、布津村、深江村、木場村へ。

有馬村有志の名をもって、触れ書の廻状がまわされた。

此方の代官は、只今討ち殺した。この上は、耶蘇宗門一味を致し、一揆を起して、村々の代官を討ちとり、神社仏閣を破壊しつくそうではないか、と。

村々では、それを受けて、一斉蜂起する用意は成っていた。

加津佐村の代官山内小右衛門と安井三郎右衛門は、同村の庄屋の密告で、これを知って、

顫えあがり、夜陰に乗じて、島原城下へむかって、遁れようとした。

しかし、越えようとする小浜と串山の境の山道に、忽然として出現した数名の黒装束の武士たちのために、あっという間もなく、斬り伏せられてしまった。

水石村では——。

代官高橋武右衛門は、その夜、一揆の起ったのを夢にも知らずに熟睡していたが、突如、

「火事だっ！」

という呶号に、愕然して、牀を蹴って、はね起きた。

瞬間、

「天誅！」

一喝とともも、白刃が振り下されて、武右衛門の首は、胴をはなれて、血飛沫もろとも、天井へ刎ねあがっている。

村々蜂起の急報は、その日のうちに、島原の高来城へ、とどいた。

城主松倉長門守勝家は、江戸表へ参観していて不在であった。

城代多賀主水は、重臣田中宗夫、岡本新兵衛と協議して、即刻、暴徒を、殲滅すべく、軍勢をくり出すことにした。

こうして、これから半年間にわたる死闘の幕がきっておとされたのである。

二

ちょうど、この頃、一艘の巨船が、呂宋島の日本人町ディラオの港に到着していた。安宅丸にまぎれもなかった。

呂宋島の日本人町ディラオは、マニラの東側城壁外の、支那人町とパコの土人町との中間を占める地域に在った。文禄中にできて、慶長八年には、五百人をかぞえ、三年後に、イスパニヤ人と騒擾を起した時、激昂して起った日本人の頭数は、千五百と伝えられている。

その後、元和元年に、ディラオの日本人町の東北パシャ河をへだてたサン・ミゲルにも、日本人町がさかえ、その人口、合せて三千人の多きに達していた。

ちなみに、ディラオの町は、主としてサン・フランシスコ派の信徒が居り、後のサン・ミゲルの町には、ゼスイット派が多かったそうである。

この町に住む日本人は、やはり故郷の慣習にしたがって、髷を結い、色染の布子をつけ、寛く短い股引をつけ、鞣革の足袋に、草履をはいていた。武士は、大小をたばさんでいた。礼節を尊び、名誉と秩序をおもんずる風がゆきわたり、町の景色は整然としていた。

すでに、日本との交通は厳しく断たれ、日本人たちは、帰国の希望をすてていた。

そこへ——故国から幾年ぶりかで、渡航禁制を犯して、日本の船が入港して来たのであったから、ディラオの町は、非常な騒ぎとなった。

安宅丸の船首には、八幡旗ならぬ、錦旗がはためいていた。

船主部屋には、湊屋がいた。すでに、片足くびから鉄の鎖ははずされていた。

真田六文銭組に、降服し、その壮挙に与するほぞをかためれば、やはり、この堺商人は、和寇の末裔にふさわしく、異邦にあっては、なくてならぬ有能な人物であった。

湊屋は、すでに顔見知りの日本人町の有力者たちを、船主部屋に招くと、滔々として、故国の形勢一変の実状を、述べたてた。

徳川幕府は、三代家光におよんで、治政乱れ、突如として蜂起した豊臣家の遺臣を中心とする浪人勢に、江戸城を奪われたこと。その指揮をとったのは、ひそかに生きのびていた真田左衛門佐幸村であったこと。幸村の企図するところは、王政復古であり、切支丹公認であり、大いに海外に発展して交易を盛大にすることであった。いまや、天下は、ふたたび天皇の御手に還り、徳川親藩・譜代を除く諸大名は、悉く、禁廷に対して忠節を誓っている。もとより、幕府との、天下分け目の決戦はまぬがれないが、結果は、すでに、明々白々である。

まさに、信じ難い一大革命であったが、公儀の内証を左右する程の大商人である湊屋が、堂々と語り伝えることであり、また、その形勢一変ぶりが驚天動地的であるだけにかえって、固唾をのまされ、故国を喪った人々は、疑惑をさしはさむ冷静に欠けた。

安宅丸の目的とするところは、天下動乱のための兵器弾薬の買占めであった。近い時代まで日比交易は、日本からは、甲冑、槍、刀等の武器類および、小麦粉、塩漬の魚肉などの食

料品その他の雑貨を輸出し、呂宋からは、絹織物、鹿皮、蘇木、棕櫚、そして欧洲の珍貨を輸入していた。大砲や鉄砲は、交易品目から、はずされていた。呂宋側は、それらが和寇の手に渡ることをおそれたからである。

湊屋から、相談を受けた有力者たちは、協議の後、兵器弾薬の調達は、自分たちでは不可能であり、もし、是が非でも、欲するならば、彼処において、もとめるよりほかに方法はない、と遙かな海上に浮いた黒影を指さした。

アッジと称ばれるその島に、遠眼鏡を向けると、巍峨たる岩山に、城砦が築かれ銃眼をのぞかせていた。

イスパニヤの城であった。というよりも、紅毛の海賊達の根拠地といえた。

南の海を荒し廻った海賊船が、そこへ寄港して、食料と水をもとめるならわしが、いつからとなくできていた。したがって、その交易は、平穏裡に行われていたが、イスパニヤ側が、それを、すすんで行っているわけではなかった。

幾年か前、日本人の武力が、寄港する海賊を襲撃して、船を拿捕したことがあったが、その報復ぶりは凄じく、執拗であった。ディラオは、三度にわたって、放火の憂目に遭い、二十余名が殺され、七名の若い女が拉致されたのであった。

爾来、アッジの海賊と日本人町は、犬猿の間柄をつづけていた。

……しかし、緊急を要する銃器弾薬の購入は、その海賊たちとの交渉以外に方法はなかっ

たのである。

「よろしい。商人は、たとえ対手が盗賊であろうが、天子様であろうが、あきないの目処がそこにしかないと知ったら、出向く度胸がなければなりますまい」

湊屋は、いかにも和寇の末裔らしい剛愎さをみせて、その任務に自ら当る肚をきめた。

三

安宅丸に、斎の宮が乗っていたことは、その交渉にさいわいした。

日本国の皇女が、頭領であるという触れ込みは海賊たちをよろこばせたのである。

まず、湊屋が、単身小舟で、アッジへ赴いた。

そのときのいでたちは、同胞の目には甚だ滑稽なものに映ったが、相手方の目を瞠らせるに足りた。湊屋は、金襴の狩衣をまとい、黄金づくりの太刀を佩き、その上に、金泥を塗った烏帽子をいただいたのである。つまり、全身を、金ずくめにしたのであった。

東洋の島国に、山野が黄金で盈ちた夢の邦がある——ときいて、はるばる印度洋をこえて来ていた海賊たちを、おどろかすにふさわしい姿であった。

湊屋は、土産として、頭目に、ずしりと重い山吹色の大判の函と、一巻の巻物をさし出し、これが日本人の、異邦の人をおとずれる時のしきたりである、と述べた。

大判は、日本こそ、西欧において伝説化している東洋の夢の国であることを、暗示し、一巻の巻物は、頭目をして、思わず、にやりとさせた。それは、浮世絵の秘戯図であったからである。これは、談判をなごやかなものにするのに大いに効果あった。

会談の結果、次のような約束が成された。

安宅丸を、アッジの城砦に据えた大砲の射程すれすれにまで近づける。海賊の頭目は、部下十名のみを率いて、小舟を寄せて、皇女に拝謁した後、船艙に満載した黄金をたしかめ、船首において、狼火をはなって合図として、用意の銃砲弾薬を運ばせて、取引する。

ディラオに戻った湊屋の報告に対して、何故に海賊船をして、こちらの陸地に据えた大砲の射程すれすれにまで、近寄せることにしなかったか、という危懼の意見も出た。しかし、すでに約束は、成されたのである。安宅丸を、進めるよりほかはなかった。

翌朝、安宅丸は、朝靄の中を、しずかに、すべり出た。

その船影を沖あいにみとめるや、海賊の頭目は、約束をたがえず、わずか十名の部下をしたがえて、小舟を、アッジの浜から、漕ぎ出した。

安宅丸は、所定のところに、錨を降ろした。しかし、帆は流したままのかたちで残しておいた。いざという時、錨綱を切って、遁走できるように、用心したのである。

海賊の頭目は、斎の宮の気品たかい美貌と、船艙に積まれた千両箱の山に、満足した。

湊屋は、千両箱の蓋を、つぎつぎに開いて、中身を、音たてて床に撒き散らしてみせたばかりか、頭目自身に、随意に、その一個をえらばせるや、のこらず、空けてみせた。

しかし、それは、湊屋の詐術であった。

千両箱の半数には、贋小判が詰めてあったのである。

頭目は、随意にえらんだつもりであったが、うすぐらい船艙には、赤猿佐助という忍者がひそんでいて、その手妻を働かせたのである。

滞りなく取引は、済んだ。

船上で、酒宴が催されるや、海賊の頭目は、おのが部下の一人に、稀世の剣士を擁していることを誇り、これと闘う技倆の持主が、この船にいるか、と挑んだ。

湊屋は、即座に、宮のかたえに控えている不破伝次郎を指さしてみせた。

伝次郎にとっては、迷惑なことであった。

しかし、所望されたからには、受けて立たざるを得なかった。

陽が頭上に昇った頃合、異様な真剣試合がそこに演じられた。

伝次郎は、黒紋附に白袴をはき、白鉢巻をしめて、なめし革の襷を綾どり、愛刀備前長船義光を左手に携げて、出た。

対手方は、六尺をはるかに超える巨軀を黒衣でつつみ、右手に双刃の濶剣を左手に手楯を持って、現れた。

伝次郎は、敵が、手楯を胸前にかざし、左足をふみ出して、剣をやや下段にとった構えに一分の隙もないのをみとめた。

巨漢は、するすると進むや、いきなり、凄じい攻撃を開始した。

宙を唸って截る双刃剣の斬りは、右より左へ、下方へ斜めに振り下すのと、左より右へ、上方へ斜に刎ね上げるのと、左撃右撃の電光のごとき波状繰返しであった。

伝次郎は、その刃風にあふられたように、あとへあとへと、跳び退った。

巨漢は、手楯の防禦に絶対の自信があるのであったろう、伝次郎の後退を、次第にあなどって、その左撃右撃を大振りにした。そして、斜線を水平線に転ずるや、さらに、空間を薙ぎ払う動作を、恫喝的なものにした。

伝次郎は、刀身を地摺りに下げたままで、左へ左へ、廻り逃げた。

誰の目にも、伝次郎には、襲いかかる閃々たる双刃剣の斬りに、ほどこす策もないか、とみえた。

一瞬——。

伝次郎の身が、沈んだ。

その頭上を、双刃剣は、きえーっと、唸りをたてて、右から左へ薙いだ。

空を截ったむなしさに、巨漢は、大きく叫んで、剣をはねあげざま、まっ向から、振り下した。白い閃光は、正確に、伝次郎の頭上へ落ちた。

斎の宮は、思わず、悲鳴を発して、目蓋をとざした。

だが、その猛撃は、伝次郎自身がそうさせるべく計ったことであった。

伝次郎は、片膝立ちの姿勢で、抜く手もみせず、長船義光を、すりあげに、落ちて来る閃光に、合せた。

刃金の灼ける金属音とともに、双刃剣は、十字鍔の元から、両断されて、空中へ飛び、陽光を撥ねて、きらきらと煌き乍ら、海へ消えて行った。

巨漢は、なおも、ひるまず、いきなり、手楯を突き出して、伝次郎に躍りかかった。

次の刹那——。

その六尺の巨軀は、もんどり打って、船体をゆるがごとく、凄じい響きをたてた。そして、それなり、死んだように、動かなくなった。

伝次郎は、白刃を鞘におさめると、海賊の頭目に、一揖して、おのれの座にかえった。

遙かな沖あいにあって、嘹々たる喇叭の音が起ったのは、このおりであった。

船上の人々は、一斉に、そちらへ視線を向けた。

淡々とかすむ水平線上に、ふたつの帆影が見わけられた。

遠く印度洋のあたりを荒しまわっていた海賊船が、帰航して来たのである。

湊屋は、すぐに、頭目へ、視線をもどした。

頭目の横顔に、なにやら意味ありげな微笑が刷かれるのをみとめた湊屋は、遽に不吉な予感におそわれた。

——逃げねばならぬ！　これは、猶予はならぬ！

幻の城

一

島原にあって——。

島原城の松倉勢は、次席家老富岡弥左衛門が総大将となって、有馬村を征討すべく、軽舟に分乗して、海上から襲わんとして、失敗していた。

島原城から、有馬へは海上五里。その中間に、布津、常崎の岬角がある。ここをまわって、ふと、島原を振り返ると、何事ぞ、凄じい火炎が噴き上って、天を焦していた。

一同は、一揖が、島原城を攻撃した、と受けとった。本丸には、五百石の火薬を貯蔵してある。もし、城が陥れられたならば、それに、火がついて爆発するか、さもなければ、そっくり、一揖の手に奪われることになる。富岡弥左衛門は、その不安で、有馬村を征討するのをあとまわしにして、急遽、舟隊の舳先をまわすように、号令した。

そして、おのれは、陸路を、馬で趨るべく、舟を、岬角かげの渚へ着けさせると、とび降

りた。

しかし、翌朝、島原城へ駆け着いた馬のせなかには、弥左衛門の首だけが、くくりつけてあった。

舟隊の方は、ただ一人も、島原城へ、戻り着かなかった。暗夜の海上から、煙のように消えてしまったのである。

憤怒した城側は、主席家老岡本新兵衛自ら総指揮をとって、三百余名を率いて、一揆の主力が集中している深江村瀬野へ向って進発した。

深江村は、島原からわずか二里足らずの距離にあった。

松倉勢が、瀬野の古墅の前に到着したのは、辰の刻（午前八時）であった。

うち見たところ、古びた城門だけが、建ちのこり、その内部や附近は、老樹が鬱蒼と生い茂り、空隍は、竹藪と化していた。

まことに、四辺は、森々としたものさびしさで、さらに一揆が、門内にひそむ気配は感じられなかった。

そのものさびしさが、かえって、不気味であった。

馬上にあった岡本新兵衛は、前隊が、不意に起った強い秋風に、思わず、後へ退るのをみとめて、「おくれたかっ！　鬨を挙げい！」

と、絶叫した。

しかし、誰一人、口を開こうとする者はなかった。

新兵衛は、三度び叱咤して、三度びとも、部下の口を開かし得ないとさとるや、

「おのれら、たたかわずして、肝をつぶすとは！」

と、顔面蒼白になって、瘧のように、全身を顫わせた。

大阪役から、わずかに二十余年にして、はやくも、武士は、臆病者となってしまっていた。

やがて、新兵衛に指名された四士が、決死の覚悟をきめて、牆を越えて、門内に躍り入った。

そこに、息をひそめていたのは、杖を持たねば歩行のかなわぬ老爺と老婆四、五人だけであった。

それらの皺首を刎ねて、火を放っておいて、松倉勢は、引き揚げた。

突如として、一揆が、湧くがごとく、出現したのは、半里ばかり戻った広畑の叢中からであった。古墅前で、鬨の声も挙げられなかった松倉勢に、この不意撃ちを受けられる道理がなかった。

あっという間に、総崩れになり、算を乱して、敗走した。

総大将岡本新兵衛は、馬を狂奔させ乍ら、——ちがう！　ただの一揆ではない！　秀れた軍師の指揮がなくて、どうして、この伏兵作戦がなし得ようか！

と、はらわたまで冷たくなる恐怖にかられた。

その新兵衛自身も、やがて、叢の中から躍り出た小者ていの、編笠で顔をかくした男の槍に、はねあげられ、地べたへ、もんどり打っていた。

二

深更――粛々として、三千余名の軍勢は、島原城めざして、進撃を起していた。

「影」は、とある小丘の頂上に立って、闇の中を動いて行く黒い列を、見下していた。

一人として、満足な具足をつけている者はなかった。槍、刀、鉄砲などの武器は、半数にも渡されて居らず、農具や棒きれを携え、無手の者も多かった。そして、婦人も、かなりの頭数にかぞえられた。

しかも、旗指物も持たぬこの薄穢い軍列は、整然として、一糸もみださぬ。

もとより、陰にかくれた指導者から、予め作戦計画を申渡されているとはいえ、号令なき進撃を起して、みじんの不安も恐怖もないのである。

戦場往来の猛者である岡本新兵衛に率いられた松倉勢が、昨日、深江村瀬野の古墅で暴露した怯懦ぶりと比して、なんという見事な勇気であろう。

一揆を、島原・天草に蜂起させるにあたって、天草甚兵衛は、

「われら六文銭組は、決して、一揆の先頭に立ってはならぬ。農夫自身が、おのれたちの力で、城兵と闘って、勝つ――その快味と自信を持たせねばならぬ。武士は合戦のために存在

する者、農夫は穀物をつくるために存在する者――この観念を、くつがえし、農夫と雖も、ひとたび、蹶起すれば、武士の首級を刎ねることができる、という自信を持たせることこそ、このたびの壮挙にあたって、最も肝要とするところ。この自信を日本全土の農夫にひろげて、天下を取る――これで、ござる」

と、一統へ言ったのである。

まさしく、この巧妙な意図は、実現した。

三千の農夫は、韓非子が曰う、死を視ること帰するが如し、の落着きをもって、足を進めているのであった。

――わからぬ。まだ、おれには、この烏合の衆を、精兵に化さしめている信仰というものの正体が、わからぬ！

「影」は、胸の裡で、呟いた。

それから、一刻後、島原城追手門に肉迫した一揆は、ゼズス・マリアを高唱しつつ、たちまち、門扉を破った。そして、破壊口から、燃える藁や茅を、投げ込んだ。その投げ手は、ことごとく、女子であった。

もとより、追手門は、勝敗の決するところ。城代多賀主水の指揮のもとに、城兵も、必死となって、闘った。

一方、西の桜門には、切支丹ならぬ、三会、東空閑、湯口、多比良、土黒などの村の百姓三百余人が動員されて、守備を命じられていた。

一揆は、なぜか、この農夫隊に対しては、攻撃を加えなかった。

指揮をとっていた花房七郎兵衛、生熊助之丞は、農夫隊に、追手門を襲う一揆の背後を衝かせるべく、大声で、下知した。

まず、三会村の農夫隊が、動きはじめた。生熊助之丞がその先頭へ奔り出て、

「いざ、つづけっ！」

と、陣太刀を、ふりかざした。

瞬間、隊列の中から一人の男が、すっと進み出ざま、無言裡に、居合抜きに、助之丞の首へ、一閃を送った。

助之丞を血祭りにするのを合図に、農夫隊は、どっと鯨波をあげて、武器をさかしまに向けかえて、桜門へ殺到した。城内の狼狽は、名状しがたいものがあった。

両門における修羅場は、未明までつづいた。

しかし、ふしぎにも、一揆は、充分に城を占領する力を示し乍ら、突然、さっと、かこみを解いて、ひき潮のように、去った。この攻撃は、松倉勢を、城内に屏息させる目的であったからである。

島原城攻撃は、それまで、ためらっていた農民たちを一斉に奮起させる効果があった。

それから、五日後の十一月朔日には、一万八千の徒党が組織されていた。

天草にあっては——。

天使として降った益田四郎を大将として、大矢野の宮津にひるがえる十字架の旗のもとに、五千人が、集結していた。

三

天草島は、肥前唐津城主寺沢兵庫頭堅高の領するところで、重臣三宅藤兵衛が、富岡城に拠って、これを支配していた。

富岡城は、天草下島の西北隅の海中に突出した丘陵上にあり、三方海を繞らし、一路狭く長い平坦な砂地をもって陸地とつないでいた。風光は絶佳であり、一夫を以て守れば万卒も越える能わざる要害をなしていた。

しかも、あずかる三宅藤兵衛は、歴戦の勇将であり、重厚の人柄は、主君をしのいでいた。

大矢野に、叛旗がひるがえっても、容易に、動かなかった。

一揆軍が、大矢野島から、天草上島の上津浦に進出して、山塞を急築して、本拠としたという報告にも、黙然として、動かなかった。

賊軍は、ついに、天草の中心地本渡に、十字架旗をおし進めて来た——と知った時、藤兵衛は、起った。

起つや、その行動は、敏速をきわめていた。

藤兵衛は、武田流軍学にくわしく、山形三郎兵衛昌景に私淑していた。山形三郎兵衛は、長篠の合戦に、右手を鉄砲に撃ちぬかれるや、采配を左手に持ちかえ、さらに左手をも撃たれるや、これを口にくわえて、敵陣へ、突入した勇将であった。

藤兵衛は、千五百の将兵を、海辺の砂上へ整列させると、城門の屋根の上に仁王立ち、大音声をはりあげた。

「孫子曰く、激水の疾き、石を漂わすに至る者は、勢いなり。鷙鳥の疾き、毀折するに至る者は、節なり。この故に、善く戦う者は、その勢い険に、その節は短し。勢いは張りたる弩のごとく、節は発する機のごとし。……よいか、敵は、烏合の衆と雖も、これを指揮する者に、虚実の策謀あり、と観た。さいわいに、わが富岡城は、難攻不落の名城である。わが全軍が進発した後に、これが、突如の奇策によって、奪われるうれいは、全くない。されば、わが全軍は、おのが城に寸毫のうれいものこさず、疾風のごとく、進撃し得る。勝利は、まさに、速戦して速決である。奇道は無用である。積水を千仞の谿に落すがごとく、一挙に、敵の本拠地を衝くべきである。進撃の途中の異変は、ことごとく、敵の欺騙の策と思え！一切わき目をいたすな！……いざ、われに、つづけっ！」

言いおわるや、屋根から白馬へ飛び、ひと鞭あてて、まっしぐらに、丘陵をかけ下った。

士気をあふるに、まことに、鮮やかな、用兵の体・用・術の実行ぶりであった。富岡勢は、

五里の山野を、一気に、趨った。伏兵ありとみせた竹藪の佯攻の動きも、原野の旗すすきの中に突如として具足を鳴らしてみせる偽兵作戦にも、目をくれなかった。

まさしく、その疾きこと風のごとく、侵掠は火にも似て、富岡勢は、一挙に、本渡まで趨った。

しかし、そこに待っていたのは、炎々として燃える凄じい猛火の饗宴であった。

天草軍は、本渡の町民ことごとくをつれて、上津浦の山塞に、しりぞいたのである。

三宅藤兵衛は、ただちに、全隊を三分し、一は上津浦を攻撃し、一は本渡を確守し、のこりの一は、遊軍となって、危きを援ける作戦をたてた。

上津浦の攻撃は、その子息三宅藤左衛門と並河九兵衛に当らしめた。

激突は、上津浦と本渡の中間の島子の海辺で起った。

富岡勢は、敵軍が、上津浦の山塞を出て、堂々と海辺に布陣しているのを発見して、猛然と襲いかかった。とたんに、右方の山間の隘路から、立木すべてが人間と化したように、どっと躍り出て来たのである。

はさみ撃たれた富岡勢は、大将並河九兵衛がまず討死したのをきっかけにして、算を乱して潰走した。三宅藤左衛門は、一騎のみ、渚づたいに遁走したが、途中、力つきて、海中に落ちた。

——黎明。

本渡の小丘陵上の濃い朝霧の中に佇立していた三宅藤兵衛は、潮騒のような鯨波が、彼方に起るのを、きいた。

やがて、霧は、鯨波に吹きはらわれるように、急速に霽れて来た。

海辺から、森から、野から、川から、無数の兵の影が、この丘陵めざして殺到して来た。

藤兵衛の面貌は、しかし、わずかに、眉宇を、眦を、痙攣させたばかりであった。

昨日の惨たる敗走ぶりをきき、そして、夜陰に乗じて、ひたひたと渡って来る敵の気配を、まんじりともせずに感じつづけた藤兵衛は、すでに、我にほどこす策のないのを、さとっていた。

敵は、ただの農夫軍ではなかった。

――真田左衛門佐幸村が、生き残って、指揮をとっているとしか思われぬ。

おのれに呟いた藤兵衛は、思わず、総身が冷たくなる、戦慄をおぼえたのであった。

――武将として、最後の花を咲かせる場所が、ここか！

闘志はなく、自嘲があった。

藤兵衛が、白馬にうちまたがった時、麓においては、凄惨な修羅場が、くりひろげられていた。朦々と渦巻く砂煙りの中に、太刀が、鎗が、ひらめき、からみ合い、血と呶号が、噴き散った。

藤兵衛をのせた白馬は、その修羅場へむかって、すべるように、駆け下って行った。

ただ一騎で――。

海沿いの野を奔駆して行く藤兵衛は、なお、血にぬれた太刀を、水平に突き出していた。

狂喚と矢唸りと鉄砲の音と得物の嚙み合う音と馬蹄のひびきが、いまだ、耳の中に渦まいていた。

鎧の片袖、右の草摺は截りとられ、背中には、一本の矢が射立てられ、肩と左の太股に、激痛があった。

兜の目庇の下の双眸は、虚無的に瞠かれ、何も見ていなかった。

いや、修羅場を突破する際、眼前に躍りはねた十字架旗の、真紅の十字架が、鮮やかに、網膜にやきついていて、いまだに、ひらひらとひらめいているのであった。

敗れたことに悔いはなかった。むしろ、敵の鮮烈な勝利をたたえたい気持さえわいていた。

わが方に、倍する手勢があっても、あの敵の怒濤の攻撃を破ることは、不可能であったろう。

――何者が指揮したのか？

藤兵衛は、それが知りたく、阿修羅のたたかいのさなかにも、その者の出現を期待していたのであったが……。

いまは、もはや、何者であったか、知る気持も失せていた。

桑楡まさに迫った者の、淡い寂寥が、傷ついた五体をつつんでいた。

と——。

白馬は、そこで停るように命じられてでもいたように、蹄の音を止めた。

藤兵衛は、かすむ双眸を挙げた。

松林の彼方に、おのがあずかる富岡城が、薄暮の空の下に、そびえていた。

藤兵衛は、見た。

城壁に、無数の旌旗が、はためいているのを——。

それらには、真紅の十字架が描かれていた。

藤兵衛は、かぶりをふった。

——最期にあたって、幻影におびえようとは！

すこしずつ、うなだれてゆき、やがて、がっくりと、首を垂れるや、血まみれの巨軀は、どうっ、と砂地へ落ちた。

藤兵衛は、決して幻影を視たのではなかった。

湾内には、同じ旌旗をたてた一艘の巨舸が入っていたのである。呂宋から帰って来た安宅丸にまぎれもなかった。

原城暮色

一

島原半島の南端、東岸に一港を抱き、南西に半島状の岬角を有し、天草島の富岡城と十一海里をへだてている丘陵がある。

有馬氏代々の居城であった原城（一名日野江城）の址である。

港は口之津港にして、岬角は早崎または瀬詰崎という。

この原城は、攻むるに難く守るに宜しと称された名城で、足利の頃、有馬貴純の築いたもので、尚鑒、晴純、義直、義純、直純の七代に伝えられ、松倉豊後守重政が、大和五條より移封されて来て、島原に築いたので、廃城になったことは、すでに述べた。

その要害ぶりは——。

東北に高く雲仙岳を仰ぎ、前に近く方丈岳が横たわり、南面は、数丈の断崖絶壁になり、島原の海原に対し、はるかにへだてて、天草の翠巒をのぞんでいた。

まことに風光絶佳で、白堊の城壁をつらね、城楼を天空にそびえさせていた頃は、「日暮城」と称されていた。

城の北面は、一帯の潮田、沼田がひろがり、出丸の丘陵は八方にさし出て、横矢（十字火）を集中するに屈強の場所となっていた。

全城が劃然として他所と離れ、独立した強味をそなえていた。

島原城を襲撃した一揆軍と、天草富岡を占領した一揆軍が、日を合せて、この原城址に拠ったのは、寛永十四年十二月一日であった。

天下動乱の狼火をあげるべき地を、島原と決定した時、真田六文銭組の謀師天草甚兵衛の肚の中には、拠点を、この原城址にすることが、きめられていたに相違ない。

島原、天草の両軍は、それぞれ、寺沢藩と松倉藩を襲って、兵糧を奪いとって、原城にはこび込み、昼夜をわかたずに、堀を割り、石垣を築き、塀をかけ、小屋を建て、またたくうちに、すべての工を竣えて、厳然たる城郭を整えたのであった。

ことわるまでもなく、真田六文銭組の面々の、秀れた指揮があったのである。

大将天草四郎時貞が、三千余を率いて入城したのは、十二月三日であった。

その時、すでに、島原の一揆軍は、悉く城内にあって、四郎を迎えた。

合せて、総勢三万七千余名であった。もとより、婦女子子供を含んでいた。

大将・天草四郎時貞

評定衆（浪人衆）

天草甚兵衛、蘆塚忠兵衛、渡辺伝兵衛、赤星主膳、有家久意、会津宗印、毛利平左衛門、金沢七左衛門、松竹勘右衛門、久田七郎左衛門、浦野彌兵衛、秦村休沢、打田木工之允

これが三万七千の一揆軍の指揮をとる顔ぶれであった。

不破伝次郎と「影」と赤猿佐助の三名だけが、その評定の席に加わっていなかった。不破伝次郎は、斎の宮の附人であり、「影」と佐助は、忍者であったからである。

兵の配置は——。

本丸守備二千人、二の丸守備三千人、二の丸西隅守備五百人、三の丸守備三千五百人、池尻門守備六百人、田尻門守備五百人、後門守備千四百人、出丸守備二千人、遊軍二千人であった。

二

幕府の征討使・板倉内膳正重昌が、兵六百を率いて、早駆けに駆けて、島原城に到着したのは、十二月五日であったが、その時は、すでに、原城の修築は完成し、防備陣営は全く整備していたのである。

板倉重昌を征討使に、石谷貞清を副使に任命したのは、大老酒井忠勝であった。

柳生但馬守宗矩は、飛騨守宗冬から、この報せをきくや、老いの貌に、珍しく激情をしめ

して、

「なんたる軽率か。板倉は参州額田のわずか一万一千石の小城主、石谷は千五百の小旗本ではないか。かかる小身者に、九州諸大名を指揮操縦することが、なろうか！　わしが、板倉の出発を阻止する」

ただちに、馬を曳かせて、単騎で、追ったのであった。

宗矩が、重昌に追いついたのは、神奈川の海辺であった。

重昌は、主命を辞すことはかなわぬ、と頑として拒否した。

宗矩は、やむなく。

「一揆の指揮をとるのが、真田六文銭組の錚々であることを、ご存じか！」

と、言った。

重昌は、一瞬、蒼ざめたが、すぐに強くかぶりをふって、

「たとえ、敵が、真田左衛門佐幸村自身であろうとも、身共は、あとへは引き申さぬ。一死あるのみ！」

と、言いはった。

宗矩は、眦をひきつらせて、頬筋を痙攣させる重昌の貌を、影うすいものにおぼえて、

——やむなし。

と、見すてた。

宗矩は、四年前、井之頭池畔において、真田六文銭組の神出鬼没の奇策に遭っている。尋常の策略をもってしては、これに対抗すべくもないのである。重昌に、その頭脳があろう筈がないのである。

宗矩は、ひきかえして、登城すると、将軍家光に面謁して、

「重昌の身分をもって、西国の諸大名を統御することは、到底あい叶いませぬ。若し、教徒どもが頑強にして、日を経ることとなれば、必ず征討使を他人に代えなければなりません。何卒、他の分別を致されますよう——」

と、願った。

家光は、すぐに、酒井忠勝を呼んだが、忠勝は、

「たかが、血迷うた農奴連れの一揆に、御三家や老中を上使となさば、公儀の尊厳にかかわり、外様の面々のひそかな失笑を買うのみにございます。一万石の小名をもって、外様大名たちを指揮せしめることこそ、公儀の尊厳を示す所以かと存ぜられます」

と、主張して、ゆずらなかった。

宗矩は、大老の思慮の浅さを、あわれまずにはいられなかった。

……板倉重昌は、九日、有馬に到着して、左のごとく、西国諸大名に、包囲陣を形成するように、命じた。

大手城門にむかって、松倉長門守、有馬兵部大輔、立花左近将監。

本陣出丸の向陣として、鍋島安芸、鍋島淡路、鍋島隼人、鍋島市佐、多久美作。
その後方に、鍋島中務、鍋島右近。
松山にむかって、諫早豊前、鍋島若狭、鍋島山城。
海上の警戒として、鍋島の関将監、西五太夫、田沢助左衛門によって、兵船五十艘を。
この奇手の軍勢の数は——。
鍋島勢　一万八千
松倉勢　四千
板倉勢　六百
すなわち、籠城勢より、はるかに劣勢であった。
しかし——。
重昌の念頭には、たとえ指揮をとるのが真田の残党であろうとも、とられるのが水呑百姓であるからには、何程の働きができようか、という倨傲と侮蔑があった。
その誤に、気がつくには、まず、第一番攻めをやらなければならなかった。

三

雀色時が来ていた。
「影」は、本丸の西方の弾丸黒子のように狭小な出丸の叢に腰をおろして、遠く、沼田を

へだてた敵の陣地を眺めていた。
夕靄の中に、鍋島の旌旗が、林立していた。人影はなく、風も落ちて、世界は静寂であった。
昨日から今朝がたまで、喊声と銃声の渦巻く修羅場であったのが、嘘のように思われる。
「影殿、どうしたな？」
ふいに、背後に、赤猿佐助の声がした。
「どうもせぬ」
「大層ぼんやりしておいでじゃ」
「影」は、一刻以上もここに蹲っていたのである。
佐助は、かたえに、どっこいしょ、と腰をおろすと、
「ここらあたりが、ひきあげどきではあるまいかな」
と、呟くように言った。
「影」は、こたえなかった。
「お前様もこの爺も、ただ、腕を拱いて、いくさを傍観しているだけのことじゃ。べつだん、面白うもない」
左様、「影」も佐助も、包囲軍の一番攻めに対して、何もせずに、その凄じい攻防を眺めていたばかりであった。忍者の働きを全く必要とせぬ味方の強さであった。

火ぶたがきられたのは、辰の刻（午前八時）であった。松倉勢は、浜手の先陣となり、鍋島勢は、山手の先陣となり、板倉勢は、中軍となり、到着したばかりの立花勢も、戦列に加わって、怒濤のごとく、襲いかかって来たのであった。

城兵は、寄手が塹壕を躍り越えて来るまでは、いかにも、火器乏しげに、ばらばらに、弾丸を放って、それが、なんの威力もないかに、見せかけた。そして、各処の城壁に一番乗りをめざす侍大将たちが、とりついたところを、狙って、一斉に、呂宋の海賊から仕入れた数百挺の鉄砲の筒口を揃えるや、驟雨のように、その頭上へ、あびせかけたのであった。

同時に――、

鍋島勢の鉄砲隊にむかっては、一番高台の三の丸の塁の陰にかくしていた大砲五門を、轟然と、とどろかせ、数十人を一挙に四散させたのである。

包囲軍は、たった一日で、死者百数十人を出し、負傷者数百人におよんだ。

それにひきかえて、城兵は、ほんの数人が怪我をしただけであった。

「赤猿、おれたちは、ここでは、無能で無力で、ただの阿呆に過ぎぬようだな」

「左様、左様。――だから、いい加減で退散させてもらうことにいたそう」

「いや、おれは、おのれが、無能で無力であるのを、小気味よいとさえ感じている」

「はて、そういう存念は、いかがなものか」

「赤猿、合戦のために禄を食んでいる軍勢が、昨日まで土をいじっていた百姓たちの前で、手も足も出ぬのだぞ。おれは、昨日、鉄砲の狙いかたも知らぬ女子が撃った弾丸で、侍大将らしい男が、城壁から、もんどりうって、濠へころげるのを見た。おれは、その時、この女子には、おれ自身も、敵わぬ、と思うた。狙い撃ったのではないからだ。女子は、いっそ、当らないで欲しいと祈り乍ら、撃ったのかも知れぬ。これ以上、強い働きはない。おれは、はじめて、おのれが、阿呆に思えた」

佐助は、微笑し乍ら、合点したが、ふと思い出したように、

「斎の宮は、どうやら、切支丹に帰依された模様じゃな」

と、言った。

「……」

「影」は、急に、憮然とした面持になると、立ち上った。

斎の宮と天草四郎が、初対面の時に、「影」は、物陰にいたのである。

初対面は、天草からこの原城へ移って来る際、安宅丸の船主部屋でおこなわれた。

ほんとに、それは、しらじらしい対座であった。斎の宮は、終始俯向いたきりであったし、四郎は、宮の臈たけたすがたに、その冷やかな表情を、みじんもかえることをしなかった。

四郎は、なろうことなら、原城へ籠るのは、思いとどまれるよう、とすすめ、宮が、意志をひるがえさぬと知るや、

「それでは、ご随意に――」

と、言いすてて、さっさと、座を立ったものであった。

宮が、まともに、四郎を看たのは、その時であった。

宮の眼眸には、男のつれない態度に対するふかい悲しみの色があった。

それきり……宮と四郎は、一度も顔を合わせていなかった。

宮は本丸に、四郎は三の丸にわかれて、いずれからたずねて行くこともなかった。

四郎は、すでに、天草甚兵衛から、宮が秘蔵していた自分の絵姿が盗まれて、踏絵になったことをきいていた。当然、宮の心を知らぬ筈はなかった

四郎は、宮ほどの臈たけた美女の慕情をも受けぬ冷酷な若者なのであろうか。

「影」が判らないのは、そのことであった。

ともあれ、常人とは全く異った頭脳と神経の持主であることは、明らかであった。

「影」は、いまは、四郎を、悪む感情がおのれの裡に湧いているのに、気づいていた。

同じ時刻——。

不破伝次郎は、四郎を、三の丸に陣場を訪うていた。

斎の宮に代って、必死の願いがある、と告げて、人払いをたのみ、

「お手前様には、宮のお心の内、もはやご存じの筈と存ずる」

と、きり出した。

四郎は口をつぐんだまま、じっと、伝次郎を見かえした。

伝次郎には、あまりにも澄みきって、神秘にすらおぼえるその眼眸を、受けとめるのが、かなり苦痛であった。

伝次郎は、片手をついて、頭を下げた。

「何卒、宮を妻としてお迎え下さるよう、この儀、嘆願つかまつる」

咽喉奥から、押し出すように、言った。

すると、四郎は、それにこたえるかわりに、

「この籠城が、この後、幾箇月つづき申すかは、身共にも相わかり申さぬ。ただ、いずれは、全員討死いたすことは、疑いもないところ。所詮は、一簀を以って江河を障えんとする無謀のわざ……。このたびの義挙は、明かせば、身共の義父甚兵衛の、愚者の悦びを欲して、賢者の嗤いを思わざる野望よりなされたことでござれば、犯人は乱亡の患いあり、犯神は疾走の禍あるむくいを受けるは必定……。それと、知りつつ、大将となった身共は、ただ、死を一途に定むるのみ。……明日にも、貴殿は、宮をおつれ召されて、退城なされるよう——」

さわやかな声音で、そうすすめた。

「何を申される！」

伝次郎が、にらみかえすと、四郎は、ふっと、美しく、頬をほころばせた。

「貴殿は、宮を愛しておいでであろう」

ずばりと、言いあてた。

伝次郎は、たじろいだ。

「かくされんでもよい。あの美しい宮の守護役として、長くそばに在れば、いつか、心が傾くのは、人情と申すもの。……宮を妻にして、いつくしむのは、貴殿の役目でござる」

「し、しかし、宮は……」

「身共の絵すがたに魅せられ、慕うて、運命をともにすべく、この城に籠られた、と申されたいのであろう……。乙女が描いたまぼろしに、一流兵法者たる貴殿までが、踊らされるとは！」

冷然として、きめつけた。

伝次郎は、この美少年を、骨の髄まで冷酷な性情の持主だ、と思った。

「無駄なお願いをいたした」

伝次郎は、一揖して、陣場を出た。

——宮をつれて、城を去る！

そのことを想像して、ある甘美な思いにとらわれつつ、伝次郎は、本丸へ戻って行った。

落　日

一

寛永十五年一月元旦。

原城包囲の鍋島、有馬、松倉の三軍は、この佳日に一挙に陥落せしめて、江戸表へ捷報（しょうほう）を送りたいと、奮（ふる）い立った。

有馬忠郷は、自軍総勢五千を指揮し、後門から乗りかけた。鍋島元茂、直澄は一万五千を率いて二の丸に押し寄せた。松倉重次は、三の丸にむかって、攻めかかった。

総指揮板倉重昌はじめ、攻囲軍側は、敵は、正月元旦であるから、さだめし油断しているであろう、という予測をたてていた。これは、はなはだしい錯誤であった。切支丹の習俗では、基督降誕祭（クリスマス）は大いに祝うが、正月にはなんの祝いもしなかったからである。

このことを知っていたのは、立花忠茂のみであった。故に、立花勢だけは、大手門前に、陣を張ったまま、時おり喊声（かんせい）を放つのみで、すこしも動かなかった。

ひとつには、立花忠茂は、さる十二月十九日の二番攻めに当り、深更から翌二十日の四つ過ぎ（午前十一時）まで、先鋒となって、敢然と城壁にまで肉薄して、多数の犠牲者を出し、苦戦に陥ったにも拘らず、諸勢が拱手して、援助しなかったのを怨んでいたのである。

さて、先鋒有馬勢は、熊の皮の甲冑をかぶり鷲の旗印を馬前に樹てた主将忠郷を先頭に、凄じい鬨を噴きあげて、城門に殺到するや、雨飛する銃火をものともせず、短兵急に、城壁にとりついて、遮二無二、乗越えようとした。

侍大将松田作兵衛は、おのれの旗を城内に投げ込んで、一番乗りを絶叫した。すると、あっという間に、旗は、城外へ投げ返された。

作兵衛は、さらに、その旗を、従僕にひろわせて、城内へ投げ込もうとして、敵弾に斃れた。

駒田弥左衛門と藤島伝助は、ついに、塀を躍り越えて、四人までを斬り伏せたが、たちまち、殪されて、甲冑を剝ぎとられ、丸裸の屍体を城外に投げ出された。

安富与左衛門は、膂力衆に抽んでていて、大梯子をかついで、駆け寄り、一気に、城壁を登ろうと試みたが、そのなかばで、投げ落された大木を胸を受けて、血反吐を吐いた。いかに、屍をふみこえて乗り入らんとする試みをくりかえしても、徒労であった。

忠郷は、いったん退却して、士気をあらたにして、別の攻撃方法をとるべく、下知した。その機会をのがさず、城兵は、さっと城門をおしひらいて、撃って出て来た。惨として、有

馬勢が、後門塀際に、さらした屍骸は、侍百余名、雑兵二百七十余名をかぞえた。手負うた者は、千名をこえた。

二の丸の出丸松山丸を正面攻撃した鍋島勢は、主将鍋島淡路をはじめ、いずれも一騎当千の猛将ぞろいであり、猛然と、疾風を起して、二の丸の塀際まで肉薄して、即時に、撃ち破る気勢をしめした。それまで、城内は、ひそとして不気味にしずまりかえっていたが、突如、塀の中で、濛と黒煙を噴かせるや、数千本の松明を、投げかけた。

ひるむところを、鉄砲隊が、代って、釣瓶撃ちに、あびせかけた。

鍋島勢は、八百余名の屍骸を、塀の前にのこして、総退却しなければならなかった。

二の丸の曲輪においても——。

松山の要害にあっても——。

土手上に、塹壕の中に、具足を朱に染めて、名ある武士たちが、おりかさなって、仆れた。

三の丸を襲った松倉勢もまた、弾丸と矢と大石と大木の前に、敢えなく敗北し去った。

総指揮板倉重昌は、眦を裂いて憤怒し、自ら先鋒となって、撃ちかかるべく、松倉重次の陣へ、馬を馳せて、直ちに、勢いをもりかえして進攻すべきを命じた。しかし、松倉重次は、損害の多大を事由にして、日をあらためることを主張して、動こうとしなかった。

重昌は、声をあらげて、動乱の発頭人はお許自身ではないか、諸勢に先んじて戦う責務があろう、となじったが、松倉重次の方は、さらに応ずる気色はなかった。

重昌が、駒をかえそうとするところへ、有馬勢と鍋島勢へ遣していた目附が、馳せ戻って来て、同じ報告をした。

「われらは、勇戦奮闘した。城を陥落せしむる能わざるも、その使命は果したものと心得て、諸侯が援軍を待つ」と。

一万石の小城主は、総指揮者としての資格も威望も、与えられなかったのである。

しばらく、うつろな眼眸を宙に据えていた重昌は、やがて、

「さらば、自ら、屍を、大手門前に曝すのみだ」

と、ひくく呟きすてた。

半刻後——。

大手前に向って、ただ一騎、紺糸威しの甲冑をつけ、黄金造りの太刀を佩き、半月の背旗を指し、腰に采配をはさみ、右手に長槍を把って、重昌は、駒を進めた。

「寄手の総大将をうけたまわる板倉内膳正重昌、当城の総大将にもの申す。一騎討ちの栄誉を争わん。いざっ！」

ひそとして、しずまった血なまぐさい修羅場に、大音声をあげた。

しかし、これに応えて、天草四郎の姿は、城門から、出現しなかった。

城壁の銃眼から、ただ一発、鋭くうなって飛来した弾丸が、重昌の胸部をつらぬいた。

二

「上兵は謀を伐ち、次に兵を伐ち、下なるは城を攻む。城を攻むるの法は已むを得ざるが為なり」

とは、孫子の言である。まことに、名城を攻めることは、面倒であった。

板倉重昌が討死した日、松平伊豆守信綱が、島原に到着した。

伊豆守は、当時武蔵忍の城主で、小藩のことゆえ、自ら率ゆる兵は、きわめて尠かった。将卒あわせて千五百に足らなかった。しかし、幕閣内の俊髦としての威名は、重昌とは比べもならず、ただちに、包囲の諸侯を呼び寄せて、上意に服さしめるに足りたし、また、あらたに、数万の兵を、西国各国から集めることも、さしたる難事でもなかった。

伊豆守は、つぎつぎに、予定の手を打った。

平戸に碇泊していた和蘭船に命じて、海上から、原城を、猛砲撃せしめた。正月十三日に、砲撃を開始し、その月二十七日まで、毎日、多い日は六十発、すくない時でも五発をかぞえた。また、伊豆守は、陸地にも、和蘭船の大砲をひきあげて、海陸呼応して、砲撃した。

城側からも、呂宋の海賊ゆずりの大砲が、応戦したが、弾丸数において、到底およばなかった。

ようやく、城側が、動揺の気配をみせはじめた。それと見てとって、伊豆守は、捕えてい

た幾人かの伴天連を、城内に遣して、切支丹信徒たる身が、武器をとって戦う罪の深さを説かしめた。

「小敵の堅は、大敵の虜」と謂う。

一揆三万が、ひとつの信仰に拠って、いかに堅固に城を守ろうとも、十余万の幕軍に包囲されては、所詮、滅亡は、日時の問題である。日を経るにしたがって、士気が弱り、糧食が乏しくなり、戦闘力が減じて来る。

二月に入って、城兵は、三隊にわかれて、一は大江口より出で寄手をさわがせ、一は出丸の脇口から走り出て寄手の後方にまわって火を放ち、同時に、城中の男女が、天にとどろく喚声をあげておいて、のこり一隊が、寄手の虚を衝いて、兵糧・弾薬を奪取した。

伊豆守は、この奇襲をきいて、ひそかに北叟笑んだ。

いよいよ、兵糧弾薬が尽きたな——。

そうさとったのである。

翌朝、戦場に遺棄された一屍骸の腹を割かせてみると、はたして、穀物は一粒もなく、すべて野菜ばかりであった。もはや、一挙に攻め抜く必要はなかった。

……そして、一と月が過ぎた。

三

月のない、墨を流したような深更であった。

三の丸の城壁を、音もなく躍り越えた者があった。しばらく、深い塹壕の中にひそんで、仕寄竹束のめぐらされた敵陣営を、じっとうかがっていてから、するすると、斜面をよじのぼり、一間を奔っては地に伏しつつ、南へ南へと、遁れた。

半刻のち、その者は、敵陣営から、はるかにはなれた松林の一端まで、身を運んでいた。

「……さらば！」

ひと言、陥落をひかえた城へむかって、訣別して、ゆっくりと、林の中へ歩み入ろうとした。とたんに、悸っとなって、立ちどまった。

闇の行手に、闇よりも濃い影が、気配もなくして、出現したのである。

「見そこなったぞ、天草四郎！」

冷やかに、そうあびせたのは、「影」の声にまぎれもなかった。

遁走者は、反射的に、抜刀したが、もとより、その使いかたを知らなかった。

「よもや、伊豆守が放って来た矢文を、信じるお主ではあるまい、と思うていたが、見そこなった。やはり、頭脳は秀れていても、小僧にすぎなんだ」

「影」は、吐き出すように、あびせた。

伊豆守は、これまで、三度も、降服をすすめる矢文を放って来ていた。大将四郎が、切支丹信者でないことは、すでに明白であり、脱出して来るならば、わずか十六歳の少年のこと

ゆえ、赦免にするにやぶさかではない、と。

「お主、養父の甚兵衛にそそのかされて、ぬけ出て来たか。それとも、おのれ一人で、臆病風に吹かれたためか。どちらだ？」

あざけって、一歩、「影」は、迫った。

四郎は、刀をすてると、土下座した。

「ゆ、ゆるせ！　わしは、生命が惜しい！　わしは生きたい！　わしは、自分の頭脳が、百万人に一人も居らぬほど、秀れているのを知っている。わしは、生きのびて、この頭脳を、どれだけ働かせられるか、試したいのだ。……たのむ！　見のがしてくれい！　お、おねがいだ！」

両手を、土について哀訴した。

「影」は、冷やかに、鼻で嗤った。

斎の宮は、まだその時刻を起きていて、手負った者に塗る薬草を、こまかに刻んで、石でもみつぶす仕事をつづけていた。うしろに、誰かが入って来た気配に、手をやすめて、やつれてなお美しさをたたえた貌をまわした。

「影」であった。

右手に、油紙で包んだ物を携げていた。

「その勤めは、もはや、無駄でござろう」

「……？」

潤んだ眸子に、対手を受け入れぬ色を示して、宮は、無言でいた。宮にとって、ついに、この忍者は、薄気味わるい存在でしかなかったのである。

「影」は、携げている物を、黙って、宮の前に置くと、何か言おうと口をひらきかけたが、思いかえして、立ち去った。

不破伝次郎が、天草四郎の首の前で自害している宮を発見したのは、翌朝であった。

総攻撃は、二日後——二月二十七日午よりおこなわれた。伊豆守のさだめたのは、二十八日未明からであったが、鍋島勢のうち若者ばかりで組織した一隊が、突如として、抜け駆けの功名を競って、二の丸を襲撃したのである。

主将鍋島勝茂は、自軍の先鋒が法を犯した急報に愕然となったが、即座に肚をきめた。

「事ここにいたる。進むも罪、退くも罪——同じ罪を得るならば、むしろ進んで罪を得、城を屠るに如くは莫し」

総勢に、そう下知して、自ら、その先頭に立った。

この抜け駆けを、伊豆守は、無礼と憤って見すてておくわけにいかなかった。

総攻撃の命令は、全軍に下された。

細川勢が、黒田勢が、久留米勢が、立花勢が、寺沢勢が、松倉勢が、小笠原勢が、水野勢が、延岡勢が、戸田勢が、松平勢が……雲霞のごとく、原城めがけて、殺到した。

不破伝次郎は、すでに、何十人を斬ったか、おぼえてはいなかった。

右手に摑んでいる血刀は、折れては敵から奪い、奪っては折れ、また敵から奪い、すでに五本目であった。

場所は、同じ地点であった。

宮の遺骸と四郎の首を置いた小屋を、伝次郎自身の手で、火を放って焼きはらった——その跡であった。

伝次郎は、自ら進んで、敵を斬ってはいなかった。とびかかって来る敵を、斬り伏せているだけであった。

全身いたるところに傷を負うていたが、痛みもなければ、疲労もなかった。ただ、無念無想裡に、血刀を揮っていた。

ふと——。

伝次郎は、二の丸の方角から、風のように、こちらへむかって奔って来る一士をみとめた。いたるところに、凄惨な血闘がくりひろげられているさなかに、ふしぎにも、その者の姿だけが、鮮やかに、伝次郎の眸子に映ったのである。

「不破伝次郎っ！」

面前に躍り立つや、

「めぐり逢うたぞっ！……お主と勝負を決するために、おれは、この攻城に加わったのだぞっ！」

歓喜をみなぎらせて、そう叫ぶや、ぴたっと、左の隻手で剣を下段にとった。

伝次郎は、微笑した。

おのが生命を呉れるべき、最もふさわしい対手が、予め約束してあったもののごとく、出現したのである。

この上は、伝次郎の心すべきは、兵藤貢の鬼気をこめた執念に対する礼儀として、いかにして、敗れると気どられずして敗れるか、であった。

四

落日が、覆輪をはらって、赤く、大きく、円く、ふくれあがって、天草灘の水平線上にあった。眩しく煌く光の道が、陸地まで、海原に敷かれていた。

いま——。

一艘の小舟が、その光の道を、ゆっくりと、横切っていた。

漕いでいるのは、「影」であった。舳先に蹲っているのは赤猿佐助であった。

「のう、影殿」

沈み行く今日の太陽へ、目を細め乍ら、佐助が、呼んだ。
「わしらは、このたびの騒動で、なんの役にも立たなかったな」
「影」は、憮然として艪をあやつっているばかりであった。
「女や子供までが、必死にたたかい、殺されてゆくのを、ただ眺めていただけであったな」
佐助は「影」へ、視線を向けると、
「お前様は、宮を救い出すこともせなんだ」
「……」
「とどのつまり、こうして、二人だけ、生きのこってしもうた。……どういうのであろうかな」
佐助は、鍬首をふって、再び、視線を落日へ移した。
「影」は、漕ぎつづけ乍ら、
——所詮、おれたちは、人間にはなれぬ。
そう、胸の裡で、呟いていた。

ケイブンシャ文庫　81

南国群狼伝（なんごくぐんろうでん）

昭和60年5月15日　第1刷

著　者　柴田錬三郎
発行者　加納将光
発行所　株式会社勁文社（けい）

〒164　東京都中野区本町3-32-15
電話　東京　(372)3281（編集）
　　(372)3291（販売）
振替　東京9-13311
印　刷　凸版印刷株式会社
製　本　明興製本工業株式会社
——定価はカバーに表示してあります——
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）
検印廃止

© E. Saito 1985

Printed in Japan
ISBN4-7669-0225-4　C0193

ケイブンシャ文庫　好評発売中

井口 泰子
愛と死の航跡
——カーフェリー殺人事件
480円

東京—高知を航行する一万三千トンのカーフェリーの船内で起こった密室殺人事件。偶然に乗り合わせたために事件に巻き込まれた杉原七保子と甥・謙一の前に第二の殺人が！　彼女らを待ちうけるものは……。隔離された船内で織りなす人間ドラマの悲喜劇を描く異色の長篇推理小説。

井口 泰子
未婚の母殺人事件
590円

佐田郁子は男児・一路を産み未婚の母となった。妹・由実子は郁子に内密に、そのことを父親と思われる岩国と秋山に告げた。それが事件の幕開けだった。岩国の突然の死に続き秋山も何者かに毒殺され、嫌疑は郁子の身にも……。複雑にからみ合った人間関係の裏に隠された真相は？　気鋭が活写する愛憎長篇ドラマ。

井口 泰子
三重波紋
520円

雪深い鷹の巣温泉から、某テレビ局のやり手局長若林一成が失踪した。数ヵ月後、信濃川河口に元テレビディレクター・宇治野宏の死体があがった。共に香子が愛した男たち……。三人を結ぶ糸は？　見えざる敵に窮地に陥る香子。謎は第三の民放の開設をめぐる利権争いへ。陰謀渦巻くテレビ界の内幕を暴く異色長篇推理。

井口 泰子
山陽路殺人事件
——殺人は西へ
460円

兵庫県加古川市の鉄道新線架橋工事現場で、土地移転問題に絡む殺人が発生した。ヤサグレ警部浅川と婦人記者・木庭修子は事件を追って奔走する。が、岡山県備前町においても買収を拒否した男が殺された。連続殺人事件を結ぶ意外な人物と隠された動機とは……。鮮烈なタッチで描く気鋭の長篇推理。

ケイブンシャ文庫　好評発売中

宇能鴻一郎
浮気日記
390円

あたし、松井テル子。人妻なんです。でも、子供もいないし、暇をもてあまし気味。で、結婚前におつとめしていた会社に再就職することにしたんです。あたしに言いよってきた独身社員たちどうしているかしら。あたし、考えただけでジュンときちゃうわ…。著者独特のタッチで綴る人妻社員シリーズ第一弾。

宇能鴻一郎
火遊び出張
390円

あたし、松井テル子。人妻社員なんです。今度、若い男性社員の宮本さんといっしょに、地方の代理店まわりをするんです。本社に入ってくるウワサでは、地方の代理店さんは、変わった人が多く、しかも、すごくアレが好きなんですって。考えただけでもう頭クラクラ……。人妻社員シリーズ第二弾！

宇能鴻一郎
盗聴作戦
370円

あたし、人妻社員なんです。今度は専務の命令で、会社の近くのラブホテルに潜入したんです。専務、〝社内相姦図〟を作って、それを自分の出世のタネにしようと思っているんです。協力する気はなかったけれど、誰がどんな利用の仕方をしているのか、ヤキモチ心と好奇心に燃えて……。人妻社員シリーズ第三弾！

宇能鴻一郎
人妻社員
350円

人妻社員のあたし、労働組合の委員長に選ばれちゃったんです。組合執行部の役員も、ぜんぶ女子社員なんです。というのは、アレの経験も豊富なあたしたちが、お色気戦術で、チン上げ要求を、上役にノマせる作戦からなんです。どんなテクニックでせまろうかしら……。人妻社員シリーズ第4弾！

ケイブンシャ文庫　好評発売中

宇能鴻一郎 人妻いじめ
380円

主人が会社に行っているルスに、NHK（日本ホームビデオ協会）の人が来たんです。この人、ウチのテレビにエッチなテープを映したんです。人妻を男性二人が、ムリヤリ、犯すストーリーなんだけれど。あたし、ジュン、と感じて、ガマンできずに、この人と……。著者独特の軽妙なタッチでおくる官能の世界。

宇能鴻一郎 新妻いじめ
380円

あたしと主人、生まれてはじめてスワッピング・パーティに出たんです。六組の夫婦間でドキドキするような前戯が繰り広げられて、スリル満点。あたし、すごく、コーフンしちゃったんです。だから、つぎの交換会のことを考えただけで、思わず、ジュンと……。スリル満点、お色気もよう花盛り!!

宇能鴻一郎 あつい夜
440円

主人を送り出したあと、パンティとシャツだけで、美容体操をしていたんです。そのとき、銀行員みたいな青年がきたんです。その人、アレの回数を聞いたりして、実は、予防具のセールスマンだったんです。その製品の上手な使用のしかたを実演してくれることになって。あたし、ドキドキ！　思わず、ジュン、と感じて。

宇能鴻一郎 人妻せせり
380円

あたし、童貞ボーイに、ちょっと好奇心があるんです。ある朝、新聞配達の坊や、配達もれを謝りにきたんです。熱っぽい顔をしていたので、紅茶をごちそうしたんです。ネグリジェにガウン姿のあたし、だんだんヘンな気分になってきて……。無知な子に、ホントのこと教えてあげるの、年上の女の、義務じゃないかしら。

ケイブンシャ文庫　好評発売中

宇能鴻一郎 濡れて脱ぐ
PART1/PART2
各440円

あたし、美保ジュン子。東京の女子大にパスしたんです。映画製作研究サークルに入会し、カメラテストを受けたら、主演女優に選ばれちゃったんです。さっそく性教育映画のロケが始まったんだけど、学生カントク、恥ずかしい演技ばかり要求するんです。あたし、だんだん、ヘンな気分に……。しろうと女優、大活躍篇!!

川上 宗薫 恐怖の顚末（てんまつ）
430円

流行作家の及川の周辺を嗅ぎまわる正体不明の男。その不気味な気配は、銀座のクラブでも情事にふけるホステスの部屋にも忍びよる。薄気味悪い予感におののく及川をあざ笑うかのように、その目前で発生した殺人事件。恐怖にふるえ上った及川は……。著者渾身の異色長篇ミステリー。

川上 宗薫 夜に動く
470円

高級マンションに住むクラブのママ登記子は、ある朝不思議な事実に気付き戦慄した。置時計の位置が変わっているのだ！　それが二日続いた後も深夜に起こる奇怪な出来事。姿なき訪問者の狙いは……。恐怖と官能が交錯する表題作の他、異色推理五篇を収録した著者会心のミステリー集。

川上 宗薫 獏（ばく）食え
390円

〝いつか妻は家を出て行く〟――うなされるような悪い「夢」がまとわりつく。二人目の若い妻との四年間の日々、重ねる〝時間〟の中で交錯する、男と女のこころの綾。そして度重なるいさかいの後、ついに離婚の日が来た。著者自身の痛切なる体験を、あえて作品化した、衝撃の〝告白小説〟。

ケイブンシャ文庫　好評発売中

川上 宗薫
好色なカルテ
420円

「わたしって、体の恥ずかしい部分がすごく変わっているんです」――元産婦人科医・坂の前に、好色な肌が開かれる。未亡人が、女子大生が、女優が、そして女実業家が……、次々と、官能と法悦の波を呼び起こされる女たちの、さまざまな反応と味わい。快楽へのあくなき探求を綴る傑作官能長編。

川上 宗薫
不倫の肌
440円

互いに肌を求めながらも、外に出ればそれぞれ浮気を重ねる奇妙な夫婦。愛欲の泉は、止むことなく溢れ、今宵もまた、あやしげな不倫の匂いが、スリルと甘い陶酔を誘う。だがその浮気の代償は？　現代の奔放なセックスライフと多彩な美女の妖艶な姿態を大胆かつ華麗な筆致で描く官能巨篇。

川上 宗薫
脱ぐ
460円

スチュワーデスやブロンド娘と一夜限りの情事に精を出すプレイボーイ・パイロット吉原。そして、留守中の肌の疼きに堪えかねた吉原の愛人光。共に愛し合いながらも、別々の世界でくり広げられる妖艶な戯れが、いつしかエスカレートして……。著者独得の情感あふれる筆致で描いた、魅力あふれる官能長篇。

草部 和子
DJヌバ
――新宿ものがたり
440円

六月の雨の日の午後、少女はふらりとやって来た。少女の名はヌバ、ディスコのDJを仕事としていた。新宿裏通りのキッチン〝渚〟を舞台に、〝渚〟のママ民枝とヌバ、そして仲間のDJたちの織りなす人間模様。恋と仕事に悩みつつも、激しく生きる現代の若者の青春群像を描く話題作。58年度放送文学賞佳作入選作。

ケイブンシャ文庫　好評発売中

河野 典生
あれは血の土曜日
360円

ホテルで女が惨殺された。偶然隣の部屋で乱交パーティまがいの遊びをやっていたジャズマンの野村隆は重要参考人として警察に手配されたうえ、事件直後に何者かに命を狙われた。事件は仕組まれたわなのか？　犯人を追って行動を開始した隆の行手に…。スウィング感たっぷりに描くハードボイルド・ミステリー！

小松 左京
機械の花嫁
390円

ウーマン・リヴが勝利した地球。安逸の日々を送る女性を見捨てて、男たちは宇宙へと旅立って行った。最後まで、女性との共存を望んだ男たちが、宇宙の果てに見出した〝女らしさ〟の対象は…。表題作「機械の花嫁」ほか、ロボットと人間の共存をテーマにした巨匠のSFロボット集。

五味 康祐
興行師一代
530円

暗躍する博徒！　乱れ飛ぶ札束！　悪ほど栄える興行界に命を張って関西の王座を死守する山岡一家。当主の楠次郎はもと紀州藩の小納戸役、持前の度胸と腕っぷしで数々の修羅場をくぐりぬけ、やがて大をなした、その劇的な生涯と一家の盛衰を、明治から昭和の興行界をクローズアップして描く異色長編小説。

五味 康祐
剣
440円

剣一筋。人を斬るためにのみ鍛えに鍛えられた兵法者の技。一瞬の勝負に己のすべてを賭けて、剣に生き、剣に死ぬ壮絶極まりない武士の世界。透徹した史眼がとらえた武士道の極美を描いて剣豪小説の白眉と称される「剣聖深草新十郎」、「筒井白雲斎」など七篇の最高傑作を収録した本格的時代小説。

ケイブンシャ文庫　好評発売中

破邪の剣
五味 康祐
――まん姫様捕物控シリーズ〈1〉
440円

将軍家御息女・まん姫様は、まれにみる美しさで、頭脳明晰。けれどやんちゃで捕物好きが家臣泣かせ。きょうも、御家来衆の心配をよそに持ちまえの好奇心で、巷に起こる難事件のナゾに挑む。華やかに舞い、正義の剣をふるうお姫様の大活躍を艶やかな筆に描く、異色の痛快娯楽時代小説の決定版。

色即是空
清水 一行
440円

男、四十にして惑わず――あと二六五日、四十歳までの残された日々をいかに充実したものにするか!? 出版社社長・朝田久じが思いついたその奇想天外な過しかたは……。粘土細工できたえた黄金の指を武器に、ハイテクニックを駆使して多彩な美女に挑戦する中年男の悲喜劇を描く、興味津々の異色作。

女の時間
清水 一行
360円

サラリーマン生活に見切りをつけて、学習塾塾長におさまった可児雄一。若くハンサムな彼を、欲求不満気味の母親族が放っておくわけがない。進学相談にことよせて、あの手この手の誘惑合戦。教室ならぬベッドの上で、手とり足とり性教育、脱線気味の色模様を軽快に描く、エロチックユーモア小説の快作。

女の事情
清水 一行
460円

若くハンサムな学習塾塾長・可児雄一。生徒を集めるためには、まず母親から。ベッドのうえで契約成立。ついでに母親相手の性教育。そのうえ、講師志望のピチピチ女子大生ともナニして、雄一をめぐる誘惑合戦はますます乱戦模様。イロにとりつかれた男と女の姿をユーモアたっぷりに描く風俗ロマンの快作。

ケイブンシャ文庫　好評発売中

法城壊滅の日
志茂田景樹
430円

最大勢力を誇る某宗教団体の記念すべき大祭の夜、何者かによって仕掛けられた時限爆弾で、死傷者百数十名の大惨事が勃発した。所轄の静岡県警F署に設置された特捜本部は、ただちに捜査を開始。真相究明に一人捜査陣をしいた。人間の醜い権力欲と復讐心の渦巻く新興宗教団体内部の相克を鋭くえぐった異色長編小説。

野獣は血に狂う
志茂田景樹
480円

国際売春組織に属する畑幸男は、六本木に暗躍する対抗組織探索の命を帯び、敵組織に属する黒人コールガールを連行した。嗜虐の鮮血がしたたる拷問の末、訊き出したボスの名前とは……!? 血で血を洗う暗黒街の抗争に恋人を巻き込みながら、破滅への道を突き進む男の生きざまを描く、長篇バイオレンス!!

群狼は血に飢える
志茂田景樹
460円

狼の如く冷酷非情に、経営不振の会社をしゃぶりつくす男たち。彼らを倒産屋といった。不況のあおりを受け、混乱の極にあった老舗の食品会社を標的に、壮大で緻密な倒産ドラマを演出する倒産屋たち。必死の抵抗を試みる会社幹部の激しい抗争の過程と迫りくる倒産への危機を描くバイオレンス企業サスペンス。

的の男
多岐川 恭
460円

タフで悪辣な実業家・鯉淵丈夫の生命を狙って暗躍する七人の男女。ライフルで狙撃の機会を待つ男。深夜ひそかに秘密のトンネルを掘る男。長い黒髪に憎悪の思いを託す女。不死身の男の周辺にはりめぐらされた危険な罠。仕掛けられた殺人計画の結末は……。今、殺人への序奏が鳴り響く、長篇ミステリーロマン!

ケイブンシャ文庫　好評発売中

難波　利三
路地裏の神様たち
460円

怪しげな占い師たちが軒を連ねる〝神様路地〟。そこにフラリと現われて、たまたま二度も予言を適中させたすかんぴんの浮浪者。大神様とたてまつられて、いんちき予言の金儲けに利用される気弱な男の悲喜劇を描く表題作。他に大阪の裏町を描いて独壇の世界を構築する六篇を収めた傑作集。

伏見丘太郎
花びら泥棒
440円

理事長の姪と婚約――突然の幸運に奮い起つ大学講師真野に、チン妙な条件がついた。「これまでイワクインネンのあった女を一パツずつ打ち止めにしてまわれ」だが、これが至難の技、その数たるや……おまけに〝初もの〟まで紛れ込み、百花繚乱、混戦必至。抜群のエロチック・ユーモアと独特のタッチで描くお色気大騒動。

伏見丘太郎
おんなしぐれ
――東山先生風流譚其の壱
480円

憧れの銭湯の番台に座れることになった大学講師の東山先生。いそいそと番台に上った先生だが、ズラリと並んだ観音さまを拝観しているところを大学のオールドミス職員に見られたから、さあタイヘン！　さっそく弱みにつけこまれて…。東山先生が巻き起すチン騒動をユーモアたっぷりに描く官能シリーズ第1弾！

藤本　義一
ささやき旅行
470円

女の体は金になる!?　平凡なOLの京子と女子大生の冬子が思いついた退屈な日常からの脱出法。男たちを手玉にとり金をまきあげて日本一周旅行をめざす。二人の珍道中は色と欲とがからみあって意外なゆきに……。軽妙洒脱な文体で、現代女性の生態を鋭くとらえた、笑いと涙の長篇風俗ロマンの力作。

ケイブンシャ文庫　好評発売中

藤本　義一
をんな暦
480円

「女は、常に被害者をよそおう加害者」人は生まれ落ちた年の運命に翻弄されてゆく。ホステス、夫に忘れ去られた妻、旅館の女主人、謡曲の家元、女流画家、第二夫人など、十二人の〝をんな〟たちの、哀しくも華やかな生きざまを、十二支の年の運命にからめ、妖艶、華麗に描く意欲的連作小説。

眉村　卓
疲れた社員たち
450円

閑職に追いやられ、出世の望みを捨てたとき、突然テレパシー能力が芽生えた初老の平社員。パラレルワールドの混乱で、過去に別の職業に就いたもうひとりの自分と遭遇した資材課長。――日常に倦んだサラリーマンたちが、ふと出遇った異常な世界の物語。超日常へいざなう八つのSFサラリーマン小説集。

眉村　卓
幻の季節
420円

失ったものを求め、幻の旅をつづける男の心に、ふと忍び寄る不気味な女の影。男をたぶらかし命を奪う〝波娘〟伝説を素材にした「浜詰海岸」など、現実と非現実の狭間をさまよう男たちと、愛に餓え、次々と男に取り憑く幻視の女たちの織りなす世界をミステリアスに描くSFロマン集。

吉村　昭
実を申すと
390円

「随筆は、小説の素材にはならぬが自分に深いかかわりのある話を書くものだ、と勝手に思いこんでいる。が、時には小説にしてもよかった、と思うものを書くこともある」（「あとがき」より）と語る著者が、日常生活での身辺の出来事を通して、自己を繊細なまなざしで探る滋味豊かなエッセイ集。

ケイブンシャ文庫最新刊

題未定　小松左京

ひょんなことから、作者のフィクション世界に作者自身が迷い込んだために起った歴史線の大混乱。歴史の歪みを修復すべく七世紀へ飛んだ作者が出会ったものは…!?　混乱が混乱を呼んで作者は悪戦苦闘、青息吐息。前代未聞の長篇ユーモアSF!!　**定価440円**

南国群狼伝　柴田錬三郎

泰平の世、豊臣家再興に命を賭ける忍者〝影〟と老忍者赤猿佐助。弾圧に抗い、一斉蜂起した切支丹一揆に加担し、天下転覆の野望に燃える影の非情の生きざま。歴史の舞台裏で暗躍する男達を壮大なスケールで描く長篇伝奇小説の決定版。　**定価440円**

さらばエロスの砦　志茂田景樹
セックス・ヒーロー

豪放磊落、正体不明の快男児・勝田竜之進は、儲ることなら手当り次第に手を出して、一度はこれが不思議に当る強運の持ち主。惜し気なく儲けを使い、精力絶倫で女たちにモテること。遂には大地主夫人に惚れられて…。痛快長篇コミカルエロス。　**定価380円**

肌じめり　宇能鴻一郎

あたし、欲求不満なんです。主人、またゴルフに行っちゃって。主人が出かけた後、主人のゴルフ仲間が訪ねてきて、ゴルフのツキを呼ぶお守りに、あそこの毛を一本下さいっていうんです。あたし、ジュン、と感じて…。若妻の奔放な性の冒険!!　**定価420円**

日本映画のほんとうの面白さをご存知ですか？　白井佳夫

日本映画のほんとうの面白さとは？　長年「キネマ旬報」誌の名編集長として活躍し、以後テレビ・ラジオの映画解説や、旺盛な執筆活動を通して、常に日本映画のもつ独自の魅力を情熱的に語り続けてきた著者のシネマ・エッセイ集。　**定価460円**